HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国語の結果補語構造における下位カテゴリーの研究 : ＜限界性＞の観点から
Author(s)	楊, 安娜
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12515号
Issue Date	2017-03-23
DOI	10.14943/doctoral.k12515
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/68579
Type	theses (doctoral)
File Information	Yang_Anna.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

博士学位申請論文

中国語の結果補語構造における下位カテゴリーの研究

――〈限界性〉の観点から――

専　　攻：言語文学

学生番号：05105026

氏　　名：楊　安娜

凡　例

・ ＊　は当該の文が統語的に、非文であることを表す。
・ ＃　は当該の文が語用論的に、不適格であることを表す。
・ ？　は当該の文の許容度が低いことを表す(許容度の低さがどのレベルの要因によるものなのかは問題としない)。
・「　」は日本語の引用句であることを表す。
・“　”は中国語、または英語の引用語句であることを表す。
・〈　〉は意味・機能概念を表す。
・文法成分については次のような略称を用いる。
S＝主語（subject）
V=動詞（verb）
R=結果補語（resultative）
C=補語（complement）
O=目的語（object）
Oi＝間接的目的語（indirect object）
Od＝直接的目的語（direct object）
N=名詞（noun）
・先行研究は、例えば“朱德熙(1981)”のように、著者名・発表年代を示す(さらに頁数を付加することもある)。著者名については、日本人、欧米人は姓のみを、中国人は姓名を示す。
・本稿に取り上げる用例について
＊ 出典を明記していない用例は筆者による作例である。
＊ 作例以外の用例は CCL(中国北京大学漢語語言学研究中心の中国語コーパス http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus)によるものであり、(　)内にその出典示す。原則として著者名(訳者名等)、作品名を示すが(例えば「(CCL・老舍《龙须沟》)」),雑誌などの場合は雑誌名のみを示す(例えば「(CCL・《报刊精选》)」)。
＊ 用例の日本語訳は、特に断らない限り、筆者によるものである。
＊ 引用文の中の「……」は、特に断らない限り、筆者による省略を意味する。
＊ 引用文における漢字の字体(簡体字または繁体字)及び記号の表示は、原文に従う。
・中国語用例の文法性判断については、基本的に筆者自身(30 代，女性，大連市出身)に基づくが、その他適宜、中国出身の複数のインフォーマントの協力を得た。とりわけ、第 3 章の用例については､中国北方出身の 10 名のインフォーマントの文法性判断に基づいた。

目　次

序章　動補構造について 1
0.1. 本論文の研究対象及び研究背景 1
0.2. 「補語」についての概観 3
0.2.1. 「補語」の定義 3
0.2.2. 「補語」の分類 4
0.2.2.1. 朱德熙(1982)の分類 4
0.2.2.2. 刘月华他(1983/2001)の分類 5
0.2.3. 本論文の立場 7
0.3. 本論文の構成 8

第１章 VR 構造に関する先行研究 10
1.1. 結果補語(R)の定義 10
1.2. VR 構造に関する先行研究 10
1.2.1 先行研究の焦点 10
1.2.1.1. 形成レベルの問題 11
1.2.1.2. 「主要部」の位置の問題 11
1.2.1.3. 使役義の由来の問題 11
1.2.2. 先行研究の成果 12
1.3. 〈限界性〉の観点 14
1.4. VR 構造の下位分類 18
1.4.1. 先行研究における VR 構造の下位分類 18
1.4.2. 本論文の分類 19

第２章 従属節に生起する VR 構造―“VR 了的 N”における VR 構造― 22
2.1. 問題提起 22
2.2. 三宅(1991)における考察および問題点 23
2.2.1. 三宅(1991)の考察 23

2.2.2. 三宅(1991)の問題点 25
2.3. VR 構造の二次的分類 28
2.4. “VR(了)的 N”構造における“了”の生起状況についての調査 29
2.4.1. 生起可否についてのインフォーマント調査 29
2.4.2. 生起頻度についてのコーパスによる用例調査 36
2.5. “VR 了的 N”構造における“了”の生起条件に関与する要因 38
2.6. 第 2 章のまとめ 41

第３章 主節に生起する VR 構造—動詞コピー構文における VR 構造— 42
3.1. 先行研究における問題点 42
3.1.1. 動詞コピー構文における目的語(O)の指示性(semantic referentiality)に関する問題 42
3.1.2. 動詞コピー構文における動詞「重複」に関する問題 44
3.1.3. 動詞コピー構文の意味機能に関する問題 44
3.2. 先行研究における動詞コピー構文の分類 45
3.3. 本論文の分析 47
3.3.1. 本論文の動詞コピー構文の分類 47
3.3.2. 「非使役義コピー構文」と「使役義コピー構文」の関連性 52
3.3.3. 使役義動詞コピー構文の〈使役義〉について 53
3.4. VR 構造が動詞コピー構文に生起する状況 56
3.5. 第 3 章のまとめ 58

第４章 VR 構造の個別研究 60
4.1. “V 完”と“V 过$_1$”の機能の相違 61
4.1.1. “V 完”と“V 过$_1$”の意味機能に関する先行研究と問題点 61
4.1.1.1. 朴鐘漢(1997/2000) 62
4.1.1.2. 朱継征(1999) 63
4.1.1.3. 張岩紅(2006) 66
4.1.2. 本論文の分析 68
4.1.2.1. “V 完”と“V 过$_1$”の統語機能の相違 68
4.1.2.2. “V 完”と“V 过$_1$”の意味機能の相違についての仮説 70

4.1.3. まとめ 81
4.2. “V 好”と“V 完”の機能の相違 82
4.2.1. “V 好”の〈完成義〉の顕在化条件に関する先行研究と問題点 83
4.2.1.1. 藤田(1993) 83
4.2.1.2. **鲁晓琨**(1995) 84
4.2.2. “V 好”の〈完成義〉の顕在化条件 85
4.2.2.1. “V 好”の〈完成義〉が顕在化する語彙レベルの条件 85
4.2.2.2. “V 好”の〈完成義〉が顕在化する構文レベルの条件 92
4.2.3.〈完成義〉が顕在化する場合における“V 好”と“V 完”の機能の相違 96
4.2.4. まとめ 99
4.3. 第 4 章のまとめ 100

第５章 “V 到”構造と方向補語構造の機能差異.....102
5.1. 中根(2005, 2008)と杉村(2011)における主な観点 102
5.2. 〈過程性〉についての問題 103
5.2.1. 中根(2005, 2008)の主張及び問題点 103
5.2.2. VxY の〈過程性〉に対する杉村(2011)の見解 104
5.3. 〈限界性〉についての問題(Y の役割) 105
5.4. “正”、“在”、“正在”との共起問題について 106
5.4.1. 中根(2005, 2008)の分析 107
5.4.2. 杉村(2011)の分析 108
5.4.3. 本論文の分析 109
5.5. 第 5 章のまとめ 116

第６章 本論文の結論と今後の課題 118

参考文献一覧 122

序章 動補構造について

0.1. 本論文の研究対象及び研究背景

本論文は、現代中国語における「動補構造」という文法範疇の下位カテゴリーである「結果補語構造」(verb-resultative construction,以下は VR 構造と表記する)を研究対象とする。

補語とは、文法成分の一つであり、主として動詞や形容詞からなり、述語動詞の直後に位置し、その述語動詞が指示する事態の結果や状態を表す。補語と前項動詞から形成される文法構造は動補構造(VC 構造と記す)と呼ばれている。[1]補語に関する定義は本論文の 0.2.3 で行なうこととし、本節では、動補構造に関する研究について概説する。

「動補構造」に関する研究はすでに半世紀余り経っている。現在尚中国語研究の重要な課題として、数多くの研究者の関心を集めている。例えば、「日本中国語学会」の学会誌である『中国語学』には、1966 年に発表された大内田三郎の「補語構造を示す"个"について」から始まり、2016 年まで補語に関する論文が 45 本以上収められている。なお、中国やそのほかの地域で発表された論考は枚挙に暇ない。これらの研究によって、動補構造に関する重要な問題が次々と解明された。

例えば、通時的観点からみれば、動補構造は現代中国語には存在するが、上古漢語(殷～前漢)には存在しないという事実は、古代語と現代語の構造面で大きな差異の一つとみなされている。上古漢語では、主に能格動詞(ergative verb)の他動詞的用法を用いて、動作主体が対象に何らかの状態変化(結果)を起こさせるという使役的な事態を表すが、その結果を引き起こす手段や方式に関する意味内容は欠けている。中古初期(後漢)以降に成立したとされる動補構造はある動作に内

[1]「動補構造」という命名は品詞レベルと意味レベルの混交であるため、「述補構造」という用語を用いる学者もいる(陆俭明 1990, 袁毓林 1999 など)。また、そもそも「補語」という用語は当該構造の文法的機能の本質を反映しきれないため、「二次的述語(secondary predication)」という用語を提案した学者もいる(金立鑫 2009)。だが、多くの研究者に共有されている現状を考慮し、本論文は、「動補構造」という伝統的な用語を採用する。

包される cause-effect という二つの意味素を別々に叙述するようになった。さらに、動補構造の研究は、他の文法表現の歴史的形成の解明にも役に立つと思われる。例えば、現代中国語におけるアスペクト接辞“了”、“着”、“过”および情態助詞“得”の文法化、“把”構文、動詞コピー構文、新型話題構造の成立などは、動補構造と深く関わっている。(石毓智 2002)

類型論的観点からみれば、動補構造の発展は、中国語の動詞を総合性の高いものから分析性の高いものへ転換を促進させた。また、現代中国語は日本語や、フランス語などのような動詞枠付け言語(Verb-framed language)と異なり、英語やドイツ語などの言語と同様、衛星枠付け言語(Satellite-framed language)であるという主張の根拠の一つとして、動補構造はしばしば取り上げられる。(Talmy2000, 柯里思 2003，ラマール 2008 など)

共時的観点からみれば、動補構造は現代中国語において重要な文法構造の一つである。それは語(e.g.“提高(高める)”)、フレーズ(e.g.“洗干净(きれいに洗う)”)、構文(e.g.“他把苹果吃完了。(彼はリンゴを全部食べた)”)など、様々な文法レベルに生起する。なお、邵敬敏(1982)が指摘した中国語の 6 つの基本的動詞文――V, VO，VOiOd，VC，VOC，VCO のうちの三つにも動補構造が関与している。[2]

上述のような研究によって、我々は動補構造の発生過程や文法化のメカニズム、及び現代中国語における位置づけなどの問題に対する認識が深まりつつあるが、動補構造の個別的な下位カテゴリーに関する研究はまだ十分とは言えない。現代中国語における動補構造についていえば、何れも［動作―結果］という意味構造を持つと分析されうるが、その下位カテゴリーは決して一枚岩ではない。例えば、結果補語、方向補語、程度補語などは「結果」の表現方法が異なるため、前項動詞との結合の緊密さ、目的語との統語的位置関係、他の文法成分との共起関係などの面において、異なる特徴を呈している。動補構造の下位カテゴリーに対する記述・分析なしでは、これらの文法現象の解明は不可能である。そして、動補構

[2] 邵敬敏(1982)はそれぞれ次のような具体例を挙げている。V(e.g. “敌人失败了(敵が失敗した)”)，VO(e.g.“学过汉语(中国語を習ったことがある)”)，VOiOd(e.g. “教我数学(私に数学を教える)”)，VC(e.g. “走了出去(歩いて出ていった)”)，VOC(e.g. “放了两本书在桌子上(二冊の本をテーブルの上に置た)”)，VCO(e.g. “学了三年中文(中国語を三年間習った)”)

造下位カテゴリーの研究を通じて、中国語動補構造の体系化に貢献することも期待される。

本論文は動補構造の下位カテゴリーの中の VR 構造を研究対象とする。理由は以下の 2 点が挙げられる。

（ⅰ）VR 構造は動補構造のプロトタイプと位置づけられており、VR 構造の特徴を明らかにすることで、動補構造全体像の解明も可能になると思われる。実際のところ、従来動補構造に関する研究のうち VR 構造を中心に扱うものがその大半を占めているという現状が VR 構造研究の重要性を示唆している。

（ⅱ）VR 構造に関する研究(通時的研究を含む)には夥しい蓄積があり、関連する成果や調査データが豊富に存在し、本格的な研究を行う条件が整っている。

本論の本題に入る前に、議論の前提として現代中国語の「補語」を概観し、そして動補構造における VR 構造の位置づけについて確認しておきたい。

0.2.「補語」についての概観

「補語」の細部の定義及びその分類については、研究者間で出入りがある。以下は代表的なものを紹介しておく。

0.2.1.「補語」の定義

丁声树他(1963)は、“补语是动词或形容词后面的补充说明成分(補語は動詞或いは形容詞の後に置かれる補足説明する成分である)”と定義づけ、補語と前項動詞とは「補足説明」の意味関係を成していると指摘している。しかし、朱德熙(1982)は“补语只能是谓词性成分，不能是体词性成分。从意念上说，……补语的作用在于说明动作的结果或状态。(補語は述詞性成分でなくてはならず、名詞性成分であってはならない。意味からいえば、……補語の役割は、動作の結果あるいは状態を説明することにある。)”と定義しており、補語成分の品詞上の性質、補足説明する内容などにも言及している。朱德熙(1982)のこの定義は後の学者らに受け継がれている。本論文もこの定義が妥当だと考え、従うこととする。

0.2.2.「補語」の分類

0.2.2.1.朱德熙(1982)の分類

朱德熙(1982)は主として動補構造の形式に着目し、“得”を伴うか否かによって、動補構造を“粘合式述补结构(粘着型動補構造)”と“组合式述补结构(統語型動補構造)”に大別する。

前者について、朱德熙(1982)は“补语直接粘附在述语后头的格式(補語が直接動語の後に付加されている形式を指す)”と定義しており、具体例として“抓紧”(しっかりとつかむ)、“写完”(書き終える)、“说清楚”(はっきり言う)”などを挙げている。後者については、“带‘得’的述补结构(“得”を伴う動補構造を指す)”と定義しており、具体例として“走得快(歩くのが早い)”、“看得多(たくさん見る)”、“写得很清楚(はっきり書いてある)”などを挙げている。

更に“粘合式述补结构(粘着型動補構造)”の下位カテゴリーとして、結果補語構造、方向補語構造及び“到”字補語構造があり、“组合式述补结构(統語型動補構造)”の下位カテゴリーとして可能を表す動補構造と、状態を表す動補構造があると指摘している。前者には“看得见(見える)”などがあり、後者は“看得多(たくさん見ている)”などがある。さらに、程度補語を伴う動補構造は粘着型動補構造である可能性もあれば(e.g.“好极了(すごく素晴らしい)”、“暖和极了(すごく暖かい)”、“可笑透了(おかしくて仕方がない)”)、統語型動補構造である可能性もある(e.g.“好得很”(とてもよい)、“闷得慌(息苦しい)”、“喜欢得不得了(好きでたまらない)”と述べている。

上記の記述を踏まえ、朱德熙(1982)における分類を以下のようにまとめることができるだろう。

【表 1】

動補構造						
粘着型動補構造(“得”を伴わない)				統語型動補構造(“得”を伴う)		
結果補語構造	方向補語構造	程度補語構造(一部)	“到”を伴う補語構造	可能補語構造	状態補語構造	程度補語構造(一部)

尚、朱德熙(1986)は、結果補語構造、方向補語構造の殆どは可能補語構造への変

換が可能であり、また補語が形容詞である場合、結果補語構造が状態補語構造にも変換できるという言語事実を指摘している。

0.2.2.2. 刘月华他(1983/2001)の分類

刘月华他(1983/2001)は朱德熙(1982)の分類を踏まえ、主として補語と前項動詞との意味関係を分類基準とし、補語を結果補語、方向補語、可能補語、様態補語、程度補語、数量補語、介詞フレーズ補語と 7 つに分類している。現在、刘月华他(1983/2001)の分類が広く採用されているため、以下はすこし詳しく紹介しておきたい。(以下の用例(0-1)～(0-15)は刘月华他 1983/2001 より引用したものである。日本語訳は筆者によるものである)

0.2.2.2.1. “结果补语”(結果補語)

“表示动作或状态的结果——引起动作者或动作受事的状态发生变化。结果补语由形容词和动词充任。”(動作または状態の結果——動作主或いは受動者の状態に変化が引き起こされることを表す。結果補語は形容詞と動詞によって担われる。)

(0-1) 你看完这本杂志了吗?

(あなたはこの雑誌を読み終えましたか)

(0-2) 这篇文章写好了，交给你吧。

(この文章はもう書きあがったから、あなたに渡しましょう。)

0.2.2.2.2. “趋向补语”(方向補語)

“表示人或事物通过动作以后，在空间位置移动的结果。”(動作によって人や事物が生じた空間位置の移動の結果を表すものである。)

(0-3) 小明从图书馆借来一本书。

(小明は図書館から本を一冊借りてきた。)

(0-4) 谁有问题请把手举起来。

(質問のある人は、手を挙げてください。)

0.2.2.2.3. “可能补语”(可能補語)

“表示主客观条件是否允许(某种结果、趋向，某种情况发生)。”(主観的条件また

は客観的条件がある結果、方向、ある状況の発生を許すかどうかを表す。）

(0-5) 我只学了几个月汉语，看不懂《人民日报》。

（私は中国語を何ヶ月しか習っていないので、『人民日報』は読めない。）

(0-6) 我去书店看看，你要的书也许买得到。

（私は本屋へ行ってみてみる。あなたのほしい本が買えるかもしれない。）

0.2.2.2.4. “情态补语”(様態補語)

“指动词或形容词后用‘得’连接的表示动作的结果状态的补语。”(動詞または形容詞に後接する、「得」によって導かれ、動作の結果状態を表す補語を指す。）

(0-7) 他急得哭起来。

（彼はせっぱつまって泣き出した。）

(0-8) 李老师每天睡得很晚。

（李先生は毎日遅くまで起きている。）

0.2.2.2.5. “程度补语”(程度補語)

“从意义上来说是表示程度的，在形式上有用‘得’连接和不用‘得’连接两种。”(意味からみれば程度を表すものである。形式上は「得」によって導かれるものと「得」を伴わないもの２種類がある。）

(0-9) 这本书我喜欢极了。

（この本は私は大好きです。）

(0-10) 外边热得快要死了，别出去了。

（外は死ぬほど暑いから、出かけないでください。）

0.2.2.2.6. “数量补语”(数量補語)

“在动词后表示有关动作变化的数量的成分叫数量补语。”(動詞の後につき、動作・変化の数量を表す成分のことを数量補語と呼ぶ。）

(0-11) 这本书你看过几遍了？

（この本は、何回読みましたか。）

(0-12) 去年他在北京住过几天。

（去年彼は北京に数日滞在しました。）

0.2.2.2.7. “介词短语补语”(介詞フレーズ補語)

“由介词‘于’、‘向’、‘自’组成的介词短语可以用在动词或形容词后作补语，叫介词短语补语。”(介詞“于”、“向”、“自”によって導かれる介詞フレーズは動詞または形容詞の後に置かれ補語として用いることができる。(これを)介詞フレーズ補語と呼ぶ。)

(0-13) 鲁迅出生于一八八一年。

(魯迅は 1881 年に生まれた。)

(0-14) 这是发自内心的喜悦。

(これは内心より発せられた喜びだ。)

(0-15) “大爷!”她欢快地叫了一声，扑向田大爷。

(「おじいさん！」彼女はうれしそうに声をあげ、田おじいさんに抱きついた。)

以上の記述を図示すると次のようになる。

【表 2】

補　語						
結果補語	方向補語	可能補語	様態補語	程度補語	数量補語	介詞フレーズ補語

0.2.3. 本論文の立場

前節で紹介したように、朱德熙(1982)と刘月华他(1983/2001)の分類は基本的に同じであるが、後者は意味関係に基づくより細かい分類を行なっている。本論文は意味上の問題を議論するため、刘月华他(1983/2001)の分類を採用することとする。ただし、いくつか補足点を付け加えておきたい。

(ⅰ) 刘月华他(1983/2001)で“情态补语(様態補語)”と称されているものは、研究者によって、呼び方が異なる場合がある。例えば、朱德熙(1982)は“状态补语(状態補語)”という名称を用いているが、杉村(1992)では「程度補語」と呼んでいる。本論文では、刘月华他(1983/2001)の用語を採用することにす

る。

（ⅱ）前述した刘月华他(1983/2001)の補語分類は朱德熙(1982)との違いの一つは、「数量補語」を個別の項として立てるか否かというところにある。これは動詞の後にくる数量詞を補語と見なすか、目的語と見なすのかという問題に対する両者の意見が分かれていることに起因していると思われる。玄幸子(2001)にも指摘されているように、朱德熙(1982)や房玉清(1992)などの研究は、このような数量詞が目的語と同様に動詞に後接するという統語的特徴に注目し、「目的語」と見なす立場を取っているが、胡裕树(1962)、刘月华他(1983/2001)などのように、動詞の後の数量詞はその動作及ぶ対象を示すのではなく、動作に対する補足説明であるという「意味上の特徴」に基づき、数量補語として捉えるのが一般的であるため、本論文もこの立場に立つ。

（ⅲ）「方向補語」について、述語動詞と補語成分との意味関係は結果補語と同様、「動作―結果」と捉えられるため、方向補語を結果補語の下位範疇と見なす学者もいる。本論文は、両者を区別する立場に立ち、主に結果補語構造について考察するが、本論の第 6 章で結果補語構造“V 到”の比較対象として、「方向補語構造」も取り扱う。

0.3. 本論文の構成

本論文の構成は以下のようである。

第 1 章では、まず VR 構造に関する先行研究を振り返る。主として、先行研究の議論の焦点、これまで明らかになった VR 構造に関する統語的・意味的特徴、及び本論文の観点について述べる。さらに、本論文の分析の基盤となる VR 構造の下位分類を行う。

第 2 章では、VR 構造が従属節(“VR(了)的 N”構造)に生起する場合、“了”の生起条件はいかなるものかという問題について検討を加え、VR 構造に〈限界性〉の程度という意味的要素が深く関与していることを指摘する。

第 3 章では、VR 構造が主節のうちの動詞コピー構文に生起する状況を考察する。具体的には、まず動詞コピー構文の構文機能を解明したうえで、VR 構造の下位カテゴリーが動詞コピー構文に生起する条件を明らかにする。

第 4 章では、VR 構造の下位カテゴリーの一つ――〈完成相〉を表す VR 構造――における“V 完”“V 过 $_1$”“V 好”を考察の対象とする。三者の意味機能について個別研究を行い、VR 構造における R の「限界化」の実現条件について検討する。

第 5 章では、非プロトタイプ的な VR 構造の代表例として“V 到”をとりあげ、移動事態を表す場合、方向補語構造との機能差異について考察する。そしてここにおいても〈限界性〉の程度が関与することを指摘する。

最後に、第 6 章において本論文の結論と今後の展望について述べる。

第1章　VR構造に関する先行研究

本章では、まず結果補語の定義を確認した上で、結果補語構造(VR構造)に関する先行研究においてどのような問題が議論されてきたのかを振り返ってみたい。その後、先行研究によって明らかになったことを整理し、更にその不足な点を指摘しておきたい。

1.1. 結果補語(R)の定義

王力(1943/1979)は、「結果補語」を“末品補語”と呼び、前項動詞との関係について、“前项动词为中心，补语成分是限制前项动词的。(前項動詞が中心であり、補語成分は前項動詞に対し制限を加えるのである)”と述べている。王力(1943/1979)でいう「制限」関係は、刘月华他(1983/2001)では次のようにより詳しく記述されている。

> “结果补语主要表示动作或状态的结果——引起动作者或动作受事的状态发生变化,如‘打破了一个杯子’意思是由于动作‘打’，动作的受事‘杯子’发生了变化：破了；有些结果补语表示对动作的评价、判断，如‘功课做完了’中的结果补语‘完’的作用是对动作‘做’的判断评价。”(結果補語は主に動作或いは状態の結果を表す——(ある結果補語は)動作主或いは被動作主の状態に変化を引き起こすことを表す。例えば、“打破了一个杯子(コップを一つ割った)”は動作“打(打つ)”により、受動者である“杯子(コップ)”に次のような変化が生じた——“破了(割れた)”。ある結果補語は動作に対する評価、判断を表す。例えば、“功课做完了(宿題はやり終えた)”における結果補語“完(終わる)”は動作“做(する)”に対する判断・評価を表す。)

上記の先行研究を踏まえて、本論文は結果補語について、次のように定義しておく。すなわち、「結果補語は、前項動詞が表す動作行為あるいは状態の結果を補足説明する文成分のことを指しており、動詞や形容詞によって担われる」とする。

1.2. VR構造に関する先行研究

1.2.1. 先行研究の焦点

VR構造について、これまで意味論的、統語論的な側面から研究が進められて

きた。議論されてきた重要な研究課題を整理すると、次のようになる。

1.2.1.1. 形成レベルの問題

VR 構造がいったい複合語なのかフレーズなのかは複雑な問題である。VR 構造は語彙レベルにおいて形成されたと主張する研究者がいれば(Thompson1973、湯廷池 1989、沈力 1993、申亜敏・望月 2006)、統語レベルにおいて形成されると主張する研究者もいる(山口 1991、Sybesma1999)。更に、石村(2011)は統語的に形成されるが、VR 構造の文中での振る舞いには語彙的性格が濃厚に認められると主張している。

1.2.1.2.「主要部」の位置の問題

前述の丁声树他(1963)、朱德熙(1982)と王力(1943/1979)のほかに、黎锦熙(1924/1954)、张志公(1953)などの先行研究は、VR 構造を含む動補構造の前項動詞が構造の中心部であり、補語は付属成分であるという見解を持つのに対し、李临定(1984)、马希文(1987)は動補構造の統語構造主要部は前項動詞ではなく、補語であるという反対の意見を持つ。現在、一般的に VR 構造の意味主要部が補語であるという説は主流になりつつあるが、統語構造の中心部は V なのか、R なのか、学者間で尚意見が分かれている。

1.2.1.3. 使役義の由来の問題

VR 構造には、V と R はともに自動詞であるにもかかわらず、使役義を持つものがある。例えば、“他哭湿了手帕(彼は泣いてハンカチが濡れた)”における述語動詞“哭(泣く)”は自動詞であり、結果補語“湿(濡れる)”も自動詞である。本来はそれぞれ目的語を取らないのに、動補構造を形成する場合それが可能となる。このような使役義の獲得の仕組みに関する研究も盛んに行われている。例えば、秋山(2010)は認知言語学の観点から検討を加え、「V が他動詞／非能格動詞で、R が目的語の状態変化を表していると解釈される場合、主語が使役主、目的語が被使役主に解釈され、VR 構造が使役義を獲得し、使役他動詞の役割を務める。V と R が何れも非対格動詞／形容詞の場合、“把”などの導入により、VR 構文が使役義を獲得する」と主張する。また、石村(2011)は、動詞連続構造とヴォイス体系の角

度から検討を行い、中国語 VR 構造の使役義は、「語順」を利用した統語的な型の力によってもたらされると主張する。

また、以上の三つの課題のほか、VR 構造と中国語の他の構文との転換関係(李临定 1980, 马希文 1987 など)、他の言語との対照研究(彭国真 2007, 黄春玉 2009, 鈴木 2004 など)や、VR 構造の結合価(Valency)(郭锐 1995, 王红旗 1995, 申亜敏・望月 2006 など)といった問題も議論されている。

このように、研究者たちは様々な視点から VR 構造の研究に取り組んできた。これらの研究によって VR 構造に関する重要な問題が次々と解明されたと言ってよい。以下において本論文の議論と直接的にかかわる研究成果の一部を紹介していく。

1.2.2. 先行研究の成果

本論文は朱德熙(1982)、荒川(1982)、刘月华他(1983/2001)、Tai(1984)、望月(1990、沈力(1993)、马真・陆俭明(1997)、石村(2000)、XuDan(2006/2008)などの先行研究に基づき、これまでの先行研究によって明らかになった VR 構造の統語的特徴及び意味的特徴を以下のようにまとめる。

(ⅰ)V は自然な開始点を持つが、終結点を持たない動作や過程を表す。よって、能願動詞(e.g.该(～すべきである), 得(～しなければならない), 敢(～する勇気がある), 会(～できる), 要(～する必要がある))や感情動詞(e.g.爱(愛する), 贪(むさぼる), 嫌(嫌う), 怨(憎む), 恨(恨む))などのような開始点と終結点を持たない動詞は V の位置に生起しない。

(ⅱ)R は〈＋非対格性〉〈＋非意志性〉の意味特徴を有する形容詞や動詞によって担われる。そのうち、結果補語となる動詞は限られているが、常用の形容詞はほとんどが補語になれる。具体例は次のように挙げておく。

【補語になる動詞】

e.g. 走(いなくなる), 跑(消え去る), 通(通じる), 病(やむ), 疯(気が狂う), 死(死ぬ), 倒(倒れる), 成(成る), 懂(理解する), 透(しみとおる), 动(動く), 翻(ひっくり返る), 见(見える), 完(終わる), 穿(突き抜ける), 过

（終わる）

【補語になる形容詞(一部)】

e.g. 矮(低くなる)，笨(不器用になる)，馋(食べたくなる)，臭(臭くなる)，红(赤くなる)，长(長くなる)，潮(湿っぽくなる)，苦(苦くなる)，烂(腐る)，冷(冷たくなる)，宽(幅広くなる)，旧(古くなる)，浓(濃くなる)，胖(太る)，平(平らになる)

尚、马真・陆俭明(1997)の調査によると、168 個の単音節形容詞のうち、153 個が結果補語になれる。しかし、790 個の二音節形容詞のうち、結果補語になれるのはわずか 63 個しかない。更に、結果補語になれる形容詞の内部でも、補語になる能力に強弱の差が見られる。例えば、形容詞“破(破れる・壊れる・割れる)”は数多くの動詞と結合して VR 構造を形成することができるのに対し、形容詞“横(横暴になる・理不尽になる)”は動詞“变(変わる)”としか結合しない。

(ⅲ)VR 構造は限界的事象を表すため、〈実現済み/完了〉を表すアスペクト接辞“了”と〈経験〉を表すアスペクト接辞“过”を後接させることはできるが、動作や状態の持続を表すアスペクト接辞“着”を後接させることはできない。

(ⅳ)VR 構造の多くは V と R の間に“得”あるいは“不”を挿入し、〈可能〉の意味を表す可能補語を作ることができる。

(ⅴ)VR 構造にも動詞と同様に自他の区別がある。VR 構造の自/他の違いは、V と必然的な関係はない。

(ⅵ)VR 構造は他の動補構造と同じように、新たな動詞を産出する文法手段の一つである。V と R の組み合わせがきわめて自由であり、生産性が高い。

(ⅶ)VR 構造の否定形は、“没(有)＋VR”である。例えば、“说清楚(はっきり言う)”の否定形は“没说清楚(はっきり言わなかった)”であり、“看见(見える)”の否定形は“没看见(見えなかった)”である。

このように、VR 構造に関する議論や研究が盛んに行われているため、VR 構造の多様な側面が捉えられ、VR 構造に対する認識は深まりつつある。しかし、上述した研究の殆どは VR 構造の一部を考察の対象とするものであり、それによって得られた結論は一部の VR 構造にしか適用し得ないものである。例えば、本論文で後述する〈完成相〉を表す VR 構造は、〈使役義〉を持たないことと、他の VR 構造と比べて「閉じたクラス」を形成し、生産性が高くないことを理由に、研究対象から除外する先行研究が多い。よって、VR 構造に包括的な研究は決して十分とは言えない。

また、VR 構造に下位カテゴリーの存在を想定しなければ解決できない文法現象も数多くある。例えば本論文で取り上げる連体修飾構造の“VR(了)的 N”構造においては、VR 構造の下位分類によって、“了”の生起状況が異なる。また、VR 構造の下位分類によって、動詞コピー構文との整合性に差が生じることがある。更に、同じく〈完成相〉を表す“V 完”、“V 过 1”、“V 好”については、いずれも動作の〈完成〉を表すものの、それぞれ〈完成義〉の実現条件が異なる。これらの文法現象を合理に説明するには、VR 構造に下位カテゴリーを立てたうえで、記述と分析を行っていくことが必要である。

1.3.〈限界性〉の観点

本論文は、アスペクトの主要な意味特徴である限界性という観点から VR 構造を考察する。

限界とは簡潔にいうと、一般的には言語的に表現された動作の、時間的な展開における仕切りである。動作の展開における時間的なしきりとなるのは、動作の展開の過程がつきはて、それ以上展開することのできないような動作の臨界点である。臨界点がある動詞は「限界動詞」、限界点がない動作は「非限界動詞」と呼ばれる。(工藤 1995, 三原 1998 など)

限界性は継続性と共に英語の動詞のアスペクト的分類の基準として導入された研究には、Vendler(1967)、Smith(1991)などがある。Vendler(1967)の動詞(句)分類に関する詳細な記述は本論文の第 5 章に譲るが、ここでは、三原(2004)における Vendler(1967)の分類に関するまとめを以下のように引用しておく。

「Vendler 分類は、まず状態性の基準によって状態(state)動詞を取り出し、次に限界性の基準によって動作に必然的な終わりがない活動(activity)動詞を孤立させる(終わりがない動詞を非限界動詞、終わりがある動詞を限界動詞という)。そして、限界動詞を瞬間性の基準によって、動作が瞬間的に遂行される到達(achievement)動詞と、動作を行うのに時間を要する達成(accomplishment)動詞に区分する。」

a.状態動詞
b.活動動詞
c.到達動詞
d.達成動詞　　(三原 2004)

しかし、多くの研究者が指摘したように、〈限界性〉は一つの動詞に固定されたものではなく、文中の動詞以外の要素によって変わり得る。例えば、三原(2004)は日本語の動詞の〈限界性〉は語彙的アスペクトだけでは決定できない現象として、次の例文を挙げている。

(1-1) a.『罪と罰』を {2 日間/2 日で} 読んだ。
　　b.川岸を {30 分ほど/鉄橋のところまで 30 分ほどで} 歩いた。

上記の例について、三原(2004)は(1-1)a の「2 日間読んだ」と(1-1)b の「30 分ほど歩いた」は〈限界性〉を有しないが、「2 日で読んだ」「鉄橋のところまで 30 分ほどで歩いた」は〈限界性〉を有すると述べている。この例から、〈限界性〉を持たない活動動詞が述語となる文に、付加詞をつけることによって、動詞に限界点を設定し、〈限界性〉を有する達成動詞に転換させることができるということを示唆している。

同じような現象が現代中国語においても見受けられる。陈平(1988)は、現代中国語の事象タイプを分析する際に、決定要素は動詞の語彙アスペクトのみならず、ほぼすべての文法成分が関与していると述べている。

有必要再次强调指出句子在情状类型方面的归属，并不单纯取决于谓语动词本身，而是由动词和其他句子成分共同决定的。动词的重要作用在于，它的语义性质为句子的情状归属提供了数量不一的可能性，而其他句子的成分所起的作用则是在有关可能性中进行选择，具体确定了句子的情状类别。

陈平(1988:405-414)

(改めて強調したいのは、文がどの事態タイプに属するかについて、単に述語動詞そのものだけではなく、動詞と他の文法成分と共同で決定されるものだということである。動詞の重要な機能としては、その語彙的意味性質は文の事象タイプを決めるには、複数の可能性を提供するのである。一方、他の文法成分は、その複数の可能性の中から選択し、文の事象タイプを具体的に決める働きを果たすのである。)

このような、ある動作・行為に限界点(開始点と完結点)を設置する機能は、「限界化機能」と呼ばれ、現代中国語では「限界化機能」を有する文法成分は、結果補語、アスペクト接辞、動詞の重ね型、介詞フレーズ、時間詞、名量詞、動量詞などがあるとされている。(石毓智 2002:190) (以下の例(1-2)～(1-8)は石毓智 2002 から引用)

Ⅰ. 結果補語

(1-2) 看完书再玩。(本を読み終えてから遊ぶ)

Ⅱ. アスペクト接辞

(1-3) 看了书再玩。(本を読んだら遊ぶ)

Ⅲ. 動詞の重ね型

(1-4) 看看电视再睡。(すこしテレビを読んでから寝る)

Ⅳ. 介詞フレーズ

(1-5) 书放在书架上再走。(本を本棚においてから行く)

Ⅴ. 時間詞

(1-6) 看一个小时书再玩。(本を一時間読んでから遊ぶ)

Ⅵ. 名量詞

(1-7) 看一本书再玩。(本を一冊読んでから遊ぶ)

Ⅶ. 動量詞

（1-8）看一遍书再玩。（本を一回読んでから遊ぶ）

以上のように、現代中国語において、述語動詞を限界化する文法手段はさまざまなものが存在するという指摘があるものの、これらの文法手段は如何に〈限界化機能〉を果たすのか、各文法手段の間に如何なる差異があるのか、更に同じ文法手段の内部にある下位成員は果たして全く同じように機能するのか、といった問題に対する研究は未だに不十分である。

本論文はその試みの一環として、〈限界化機能〉を有する結果補語に対する研究によって、〈限界性〉という研究観点からのアプローチの可能性と有効性を提示してみたい。

ここで、注意しておきたいのが、〈限界性〉にせよ、〈継続性〉にせよ、動詞によってその度合いが違うということである。河上(1996:28-32)によれば、伝統的・古典的カテゴリー論では、「カテゴリーとは必要かつ十分な属性の集合によって定義される」と考えられ、「カテゴリーは客観的かつ普遍的な根源的意味(これを意味素性(semantic feature)という)の集まりによって定義される。意味素性は明確で輪郭のはっきりしたものであり、カテゴリーの成員か否かはある意味素性を持つか持たないかで判断される。」という考えを主張する。しかし一方、プロトタイプ理論(prototype theory)では、「カテゴリー内ではその成員らしさの度合いは一定ではなく、プロトタイプ効果の差が生じている」。このような立場に立つとすれば、ある文法カテゴリーの中の典型的な成員とそうでないものが共有する意味特徴が、程度の概念を含む相対的なものであることになる。

以上の分析を踏まえ、本論文は〈限界性〉という概念について次のように定義しておく。すなわち、〈限界性〉とは、「動作行為の時間軸上の内的展開における限界点の明確度」のこととする。

本論文は具体的に以下の二つの問題点をめぐって、議論を進めていきたい。

① RはVに対して如何に限界化するのか、すなわち、Rの限界化がどのような条件のもとで実現されるかという問題。
② R の限界化機能は、VR 構造の文法的振る舞いにどのような影響を与えるの

か、という問題。

なお、本論文は〈限界性〉という概念に程度の違いを認めることが、文法研究において有意義であるか否かについても論じる。

1.4. VR 構造の下位分類

前述のように、現代中国語の補語は多様な内容を含み、VR 構造の内部も同じように決して均質的なものではない。したがって、VR 構造を細分化し、記述する必要がある。本章ではまず VR 構造の分類を行った先行研究を紹介し、問題点を指摘した後、本論文で使われる分類について述べておく。

1.4.1. 先行研究における VR 構造の下位分類

筆者の管見の限りでは、従来の研究の中で、VR 構造について、最も早く分類を行ったのは、王力(1943/1979)である。以下(1.4.1.1～1.4.1.2)は王力(1943/1979)における分類である。

1.4.1.1.形容詞が結果補語になる場合

1.4.1.1.1.一般例

ある動作行為によって、引き起こされる状況を表す。例えば、“推倒(押し倒す)”、“弄坏(壊す)”などの例がある。

1.4.1.1.2. 特殊例

動作主の行為をある状況に変化させることを表す。例えば、“踢错(蹴り間違う)”の“错(間違う)”は“踢(蹴る)”という行為が間違ったという意味を表す。

1.4.1.2.動詞が結果補語になる場合(この種類の動詞自身が自動詞である)

ある行為によって引き起こされた状況を表す。

1.4.1.2.1 前項動詞が他動詞である場合

結果補語と結びついた後、〈他動性〉を持つ述語になる。この場合、この行為により引き起こされる状況は、即ち受動者が被るものである。

1.4.1.2.2. 前項動詞が自動詞である場合

結果補語と結合した後、〈自動性〉を持つ述語になる。この場合、行為により引き起こされる状況は、即ち動作主が被るものである。

王力（1943/1979）は上述の VR 構造は述語動詞 V と補語の間に因果関係があるとし、“使成式(causative form)"と呼んでいるが、しかし、後の王力(1958/1980)では、1.4.1.2.2.で述べられた VR 構造、すなわち、補語が意味的に動作主に指向する VR 構造には因果関係は存在しないとし、“使成式”から除外した。

王力氏の分析は以下の 2 点において評価すべきである。

(ⅰ)一部の VR 構造に〈使役義〉という意味特徴を備えていることを指摘した点である。

(ⅱ)「意味指向」という観点から VR 構造に対して分類を行ったという点である。

しかし、王力(1958/1980)における「補語が意味的に動作主を指向する VR 構造は因果関係がない」という主張に反する例もある。例えば、“饿死(餓死する)”、“看惯(見慣れる)”、“站累(立ち疲れる)”等の例についていえば、いずれも前項動詞が表す動作の遂行によって、後項補語が表す結果状態が発生すると解釈できるため、「因果関係」が成り立つと考えたほうが妥当であろう。ただし、補語が被動者を指向する VR 構造にある「因果関係」(e.g.“他打碎了玻璃(彼はガラスを割った)”)と比較すれば、前者の方が間接的であることが明白である。なお、“吃完(食べ終わる)”、“做成(やり遂げる)”などのような補語が前項動詞の完成の局面を表すタイプについて、王力(1943/1979, 1958/1980)では言及されていないが、本論文では、それを VR 構造の下位分類の一つとして取り扱う。

1.4.2. 本論文の分類

本論文は范晓(1985)、山口(1991)、王红旗(1996)、施春宏(2008)などの分類を踏まえ、結果補語の「意味指向」(他の文法成分との意味関係)に基づいて、R がどのように限界化するのか、つまり、限界化の仕方の差異を基準に、次のように下位分類する。

[A 類] R が前項動詞を指向しており、前項動詞が表す動作行為の完成の局面を表

す。本稿では〈完成相〉を表すVR構造と呼ぶ。

e.g.V完$_1$[3]，V过$_1$[4]，V好，V着(zhao2)，V住，V见

[B類] Rが受動者を指向しており、VR構造はVが表す動作行為により、受動者に何らかの状態変化が生じることを表す。

e.g.V完$_2$，V破，V碎，V肥，V红，V干净，V走，V坏，V净，V光，V没，V绝，V败，V胜，V赢

[C類] Rが動作主を指向しており、VR構造はVが表す動作行為により、動作主に何らかの状態変化が生じることを表す。この状態変化の多くは感情・感覚もしくは心理的なものが多い。

e.g.V醉，V腻，V够，V烦，V累，V疼，V晕，V麻，V懂，

[D類] Rが受動者、動作主以外の名詞成分を指向しており、VR構造はVが表す動作行為により、受動者・動作主以外の名詞成分が表す第三関与者に何らかの状態変化が生じることを表す。

e.g.(把鞋)走破了，(他脸都)气黄了，(他砍柴)砍断了(两把斧头)

[E類] Rが前項動詞を指向しており、Vの表す動作行為の結果状態に対する話者の評価を表す。

そのうち、“快(速い)，慢((速度が)遅い)，早(早い)，晚(遅い)，久((時間が)長い”などのような、Rが動作行為に対する評価を表すものがあれば、“长((長さが)長い，短(短い)，高(高い)，矮((身長が)低い，低(高さが)低い”などのような、受動者が生じた結果に対する評価を表すものもある。いずれも「何等かの基準となる状態からずれているという意味を表す」ため、陆俭明(1989,

[3] 中国語の結果補語“完”は二つの意味がある。一つは、動作行為の完結を表す。もう一つは「事物がなくなる」という結果状態を表すものがある。両者を“完$_1$”と“完$_2$”に区別し、前者を［A類］に、後者を［B類］に分類する。

[4] 後述(4.1.)のように中国語における“V过”の“过”にはその意味機能によって〈経験〉を表すアスペクト接辞の“过”と結果補語の“过”に分けられる。本論文では、後者のみを考察の対象とし、“V过$_1$”と記す。

2001)、岩崎(1990)などでは「過分義現象」と呼ばれている。なお、このタイプの〈過分義〉を表すVR構造のRは〈中性〉形容詞であり、「量」を表すという特徴を有する。[5]

e.g.V长，V短，V高，V矮，V低，V大，V小，V重，V轻，V宽，V窄，V远，V近，V早，V晚，V胖，V肥，V瘦，V稠，V稀，V硬，V软，V紧，V松

なお、马真・陆俭明(1997)にも指摘されているように、結果補語の意味指向は必ずしも不変なものではない。前項動詞との意味関係によって、Rの意味指向が変わることがある。

(1-9) a.把球踢坏了。((サッカーをして、)サッカーボールが壊れた)(马真・陆俭明 1997 から引用)

b.把鞋踢坏了。((サッカーをして、)靴が壊れた。)(同上)

結果補語“坏”は例(1-9)a においては、意味的に受動者の“球(サッカーボール)”を指向しているが、例(1-9)b においては、道具の“鞋(靴)”を指向している。したがって、本論文では、VR構造のRの意味指向を判断する際に、前項動詞及び他の成分との意味関係を十分に考慮するうえで行う。

続いて、2章(第2章と第3章)に分け、VR構造が従属節の“VR(了)的N”構造に生起する場合、主節のうちの動詞コピー構文に生起する場合、VR構造の下位カテゴリーがどのような異なる統語的振る舞いをするのかを考察し、更にRの限界化の仕方との関連性についても考えてみたい。

[5] 陆俭明(1989、1990)では「量度形容詞」と称する。

第 2 章　従属節に生起する VR 構造[6]

――“VR(了)的 N”における VR 構造――

本章では、VR 構造の下位カテゴリーが連体修飾構造に生起する場合(“VR(了)的 N”構造と記す)、“了”との共起関係について考察してみたい。従来の研究において、動詞(V)が連体修飾語になって名詞成分を修飾する場合(“V(了)的 N”構造と呼ぶ)の“了”の生起条件に関するものが数多くあるが、VR 構造が連体修飾語になる場合、“了”がどのような条件のもとで生起するのかという問題に触れる研究は少ないようである。本章は先行研究を踏まえ、“VR(了)的 N”構造における“了”の生起条件を解明し、更に各タイプの VR 構造における R の限界化の仕方との関係について考えてみたい。

2.1. 問題提起

VR 構造が“的”構造を形成し、連体修飾語になる場合、“了”の生起条件の問題を最も早く取り上げたのは、Chao(1968)である。当該の著作において“了”の使用可否について、Chao(1968)は次のように指摘している。

“In a V-R compound used attributively in a subordinative position, the suffix –leis optional if the center is the goal but is not used as a rule if it is the actor or instrument.”(VR 構造が従属的な位置に置かれており、連体修飾語なる場合、もし中心語 N が V の対象であれば、“了”の使用は自由であるが、N が V の動作主あるいは道具であれば、“了”は用いられない)

しかし、上記の記述はあくまで一部の言語事実しか当てはまらず、幅広い解釈力を持たない。例えば、“吃腻了的菜(食べ飽きたおかず)→？ *吃腻的菜”や“买大了的鞋(買った大きすぎた靴)→*买大的鞋”の例では、N が V の対象であるにも関わらず、“了”の使用は随意的ではなく、義務的である。一方、“闹累了的士兵(騒い

[6] 本章は楊(2016)の議論を骨子として加筆・修正をしたものである。

で疲れた兵士)→？*闹累的士兵”、“切折了的刀(折れた包丁)→切折的刀”などの例のように、NがVの動作主あるいは道具であるが、“了”の使用が義務的であったり、随意的であったりする用例がたくさん見受けられる。

また、王占華他(2008)は木村(1982)、三宅(1989)などと同じく、“VR(了)的 N”構造には触れず、“V(了)的 N”構造における“了”の生起条件のみを検討している。仮に、“VR(了)的 N”構造を、“V(了)的 N”構造の下位カテゴリーと見なし、後者における“了”の生起条件を前者にそのまま当てはまらせようすれば、不都合が生じる。

王占華他(2008)は“V 了的 N”構造における“了”の生起には、語用論的な要因が絡み合っており、話者が意図的に「不可逆転」な状態だと認識する場合に限り、“了”が生起すると主張している。しかし、上述した“闹累了的士兵→*闹累的士兵”、“买大了的鞋→*买大的鞋”などの現象をやはりうまく説明できない。よって、“V(了)的 N”構造と“VR(了)的 N”構造は、意味的、構造的類似性があるものの、両構造における“了”の生起問題について検討する場合、両者を異なる構造とみなしたほうが妥当であろう。

この問題について詳しく分析を行った先行研究は、管見の及ぶ限り、三宅(1991)のみである。以下は三宅(1991)における問題点を指摘したうえで、“了”の生起条件について再検討する。

2.2. 三宅(1991)における考察および問題点

2.2.1. 三宅(1991)の考察

三宅(1991)は、“VR(了)的 N”構造における“了”の生起条件ついて次のように分析している。(以下2.2.1.1.～2.2.1.2.は三宅1991における分析のまとめである)

2.2.1.1. “了”が省略可能な場合

Ⅰ.“R”が意味上“V”を指向しており、直接動詞の表す動作行為を説明する場合、“VR(了)的 N”構造における“了”は省略できる。(例(2-1)～(2-7)及び日本語訳は三宅1991から引用)

(2-1) 她给我作饭，问我身上怎样，还常常偷看我，象妈妈看睡着了的小孩那样。

（彼女は私にごはんを作ってくれたり、体の調子はどうかと聞いてくれたり、またしょっちゅう私の様子をうかがって、まるで母親が寝付いた子供をみるようだった。）

睡着了的→睡着的

(2-2) 打完了的时候，胜家便说："完了，对不起呀！"

（けんかが終わったら，勝った方が「終わりだ。すまなかったな！」と言う。）

打完了的→打完的

Ⅱ．"R"が前項動詞"V"以外の名詞性成分と意味上主述関係を成し、且つ"V"と"R"の間に強い因果関係が存在しており、"V"が表す動作行為が不可避的に"R"が表す状態を生み出す場合は、"了"は省略できる。

(2-3) 现在他非常的安静，像个跑乏了的马，连尾巴也懒得动。

（今や彼は非常に静かで、走り疲れた馬のように、しっぽさえ動かすのがおっくうであった。）

跑乏了的→跑乏的

(2-4) 当我对她说的时候，每个字都象烧红了的煤球烫着我的喉。

（私が彼女に話す時，その言葉一言一言が，まるで焼けて赤くなった豆炭のように私ののどを熱していた。）

烧红了的→烧红的

2.2.1.2. "了"が省略不可の場合

Ⅰ．"R"が前項動詞"V"以外の名詞性成分と意味上主述関係を成し、且つ"V"と"R"の間の因果関係が弱く、"R"の表す状態が"V"の表す動作行為の偶然の結果に過ぎない場合、"了"は省略できない。

(2-5) 她由一进门，嘴便开了河，直说得李太太的脑子里象转疯了的留声机片。

（彼女は入り口を入ると，口を開けてしゃべりまくるので，李おばさんの頭の中は狂ったように回転するレコードのようになった。）

转疯了的→*转疯的

(2-6) 这在外片中也是用烂了的“英雄救美人”的套路，在此翻版为“美人救英雄”，实在让人感到别扭。

(この、外国映画でも使い古された「英雄が美女を救う」というパターンは，ここでは、「美女が英雄を救う」と焼き直されており、実にすっきりしない。)

用烂了的→*用烂的

Ⅱ. “V”と“R”には強い因果関係が存在するが、「度を越した」意味を表す場合、“了”は省略できない。

(2-7) 她的脸红起来，黑红，加上半残的粉，与青亮的灯光，好像一块煮老了的猪肝，颜色复杂而难看。

(彼女の顔は赤くなってきた。赤黒い上にまだらに白粉が残り、青白い灯りの下で、まるで煮えすぎた豚のレバーのようで、複雑で醜い色をしていた。)

煮老了的→*煮老的

以上の分析を通して、三宅(1991)は“了”の生起条件について、「“V”の表す動作・行為から最も自然に予想される結果からはずれた状態“R”がおこったものである場合には、“了”は省略できない」と主張する。

2.2.2. 三宅(1991)の問題点

三宅(1991)の主張はこの現象に対する最も有力な解釈だと思われる。しかしそれによってうまく説明できない言語事実も見受けられる。

(2-8) 记者找到该服装店，店主表示他们会尽快将洗坏的衣服送往上海总部修补。(CCL・《楚天金报》)

(記者はその服の販売店を見つけた。店主は洗ってぼろぼろになった服を上海の本店まで送り、できるだけ早く直してもらうと答えた。)

(2-9) 飞天号之所以没有出现险情的主要原因是装反的齿轮所处位置承受的压力不大。(CCL・《新华社新闻报道》)

(「飛天号」は無事であった主な原因は、逆さに据え付けられたギヤの位置から受ける圧力が強くなかったからだ)

(2-10) 基多大学联队队长奥夫雷贡是惟一将点球射偏的球员。(CCL・《新华社新闻报道》)

(LDU キト大学サッカーチームのキャプテンアルフォンソ・オブレゴンはPK のときに唯一外した選手であった。)

(2-11) 晚饭后，她做完当天的家务，就开始检查他们的功课，帮助他们分析做错的原因。(CCL・《作家文摘》)

(夕飯後、彼女は当日の家事を済ませてから、彼らの授業をチェックし始め、間違った原因を分析してあげる。)

上述の例(2-8)における VR 構造“洗坏”では、“洗(洗う)”という動作行為による必然的な結果は通常“坏(壊れる)”ではなく、“干净(きれいになる)”であるが、しかし、何らかの原因で「クリーニングに出した服が破れる」という予測と相反する事態は、現実世界に十分に起こりうる。同様に例(2-9)における“装反(取り付ける＋さかさになる)”も、例(2-10)の“射偏(シュートする＋外れる)”及び例(2-11)における“做错(する＋間違える)”も動作行為からもっとも自然に予想される結果からはずれた結果が生じたことを叙述している。しかし、このような VR 構造が“VR(了)的 N”構造に生起する場合、“了”の付加が必ず義務的とは限らない。

また、三宅(1991)がいう「結果補語“R”が前項動詞“V”以外の名詞性成分と意味上主述関係を成し、且つ“V”と“R”の間に強い因果関係が存在しており、“V”が表す動作行為が不可避的に“R”が表す状態を表す場合、“了”は省略できる」という結論に当てはまらない例も少なくない。

(2-12) 这些欢乐场上闹累了的疲兵，竟然铺成了人肉地砖，密密麻麻地，一直延伸到九月七日路口。(CCL・朱邦复《巴西狂欢节》)

(これらの「歓楽場」で騒いで疲れた兵士たちは、意外にも地面のレンガのように横たわり、(びくともせず)、九月七日の入り口まで伸びていった。)

闹累了的→？ *闹累的

(2-13) 思嘉听见外面有低语声，便走到门口，只见几个吓怕了的黑人站在后面穿堂里，迪尔茜吃力地抱着沉甸甸的正在睡觉的小博。(CCL・玛格丽特・米切尔著/陈良廷译《乱世佳人》)

(スカーレットは外から低い声を聞いたので、入り口に行って見たら、怯えている黒人が何人か裏の路地に立っていた。ディルシーはずっしりと重く眠っているボニーを必死に抱いていた。)

吓怕了的→？ *吓怕的

(2-14) 气疯了的孙有元竟然去追赶逃跑的狗，他追赶时的破口大骂无疑影响了他的速度。(CCL・余华《在细雨中呼喊》)

(頭に血がのぼった孫有元はなんと逃げた犬を追いかけていった。彼は走りながら罵声をあげ、それは間違いなく彼の速度を妨げた。)

气疯了的→？ *气疯的

なお、下記の例(2-15)～(2-17)のように、VR 構造における“V”が表す動作行為から、自然に予想される結果が定かではないため、“R”の表す結果状態が最も自然に予想される結果からはずれた状態であるか否か、判断し難い例も少なからずある。

(2-15) 如果上面的分析不错，那解决政府发言把人听糊涂的药方，不在于提高官员的语言表达水平，而在于打造透明政府，撕掉政府脸上的面纱，让人民直接看到真相。(CCL・《中国青年报》)

(もし上述の分析が間違っていなければ、訳わからない政府の発言をやめさせる「処方」は、官僚の言語能力を高めることではなく、透明な政府を作り、政府の「顔」のベールを剥がし、人民に直接真相を見せるということである。)

(2-16) 在我国，产妇要吃鸡蛋来滋补身体，生了孩子要向亲友们赠送染红的鸡蛋。(CCL・《中国儿童百科全书》)

(わが国では、妊婦は卵を食べて体に栄養を補給しなければならないし、出産後は、親友に赤く染めた卵を送らなければならない。)

(2-17) 阿纳托利在多洛霍夫家里吃中饭，和他商议怎样挽回这件给弄糟了的事。

(CCL・[俄]列夫・尼古拉耶维奇・托尔斯泰著/ 董秋斯译《战争与和平》)
(アナトーリイはドロホフの家で昼食を食べながら、ミスをして失敗してしまったことをいかに取り戻すのかについて彼と相談している。)

例(2-15)における動詞“听(聞く)”が表す動作行為は、既に設定されているある目的に向かって行われるものではないため、その実行により、なんらかの必然的な結果が生じることも想定し難いのである。仮に“听糊涂(聞いてわからなくなる)”を予想はずれの結果として捉えられるならば、“听明白(聞いてわかる)”は“听”が表す動作行為が、不可避的に“明白”という状態を生み出すとは限らない。また例(2-16)の“染(染める)”は、目的(ある色に染める)が動詞の意味概念に内在しているが、しかし、動作行為により引き起こされる結果は、“红，绿，黑，白……”のように数多くある。どれが自然の結果なのか、どれが自然の結果からのはずれなのか、判断し難いといわざるを得ない。更に、例(2-17)における“弄糟”の“弄”は対象物への働きかけを表すが、それがどのような動作行為なのかははっきりしない。[7]この場合、動作行為から最も自然に予想される結果は具体的にどのようなものなのか、想定し難い。

よって、“了”の生起条件について、「V の表す動作・行為から最も自然に予想される結果からはずれた状態 R が起こった場合、“了”は省略できない」という条件についてはまだ検討する余地があると思われる。

2.3. VR 構造の二次的分類

本節では、1.4.2.で述べた VR 構造の分類に基づき、更に状態変化の〈±可視的〉という意味特徴の基準を加えて、次のように二次的分類を行う。

【タイプ A】

R が動作行為の〈完成相〉を表すタイプ。このタイプは 1.4.2.で述べた［A 類］に相当する。

[7] 石村(2011:81)では、動補構造における前項動詞となる“弄(する/いじる)”、“搞(する/いじる)”などのような動詞は「状態変化使役を表すために V の位置に導入されたダミー動詞」と指摘されている。

e.g. V 完 1，V 过 1，V 好，V 着，V 住，V 见（再掲）

【タイプ B】

R が可視的な結果状態を表す。VR 構造は V が表す動作行為により、受動者或いは第三関与者に R が表す客観的な結果変化が生じることを表すタイプ。その中に 1.4.2.で述べた［B 類］と［D 類］が含まれる。

e.g. V 完 2，V 破，V 碎，V 肥，V 红，V 干净，V 走，V 坏，V 净，V 光，V 没，V 绝，V 败，V 胜，V 赢（再掲）

【タイプ C】

R が非可視的結果状態を表す。VR 構造は V が表す動作行為により、主に動作主に R が表す感情・感覚もしくは心理的状態変化が生じることを表すタイプ。これは 1.4.2.で述べた［C 類］に相当する。

e.g. V 醉，V 腻，V 够，V 烦，V 累，V 疼，V 晕，V 麻，V 懂（再掲）

【タイプ D】

R が前項動詞を指向しており、V の表す動作行為の結果状態に対する話者の評価を表すタイプ。このタイプは 1.4.2.で述べた［E 類］に相当する。

e.g.V 早，V 晚，V 短，V 高，V 矮，V 低，V 大，V 小，V 重，V 轻(再掲)

2.4. “VR(了)的 N”構造における“了”の生起状況についての調査

2.4.1. 生起可否についてのインフォーマント調査

本節では、2.3.で得られた分類に基づき、上述の各タイプの VR 構造が“的”構造を形成し連体修飾語になる場合における“了”の生起状況についてインフォーマント調査を行う。なお、当該の VR 構造がそもそも“了”が生起し得ない事態を表す用例を考察の対象から除外する。[8]

[8] 例えば、“容易打碎的(玻璃)(壊れやすい(ガラス))”のような属性を表す連体修飾語や、“没有看准的(事情)(はっきり見えなかった(こと))”のような未然の事態を表す連体修飾語などである。

【タイプ A】

(2-18) 我在打扫屋子时发现不少吃完了的桂圆壳积在床底。(CCL·马兰《桂圆干》)
(私は部屋の掃除をしていたとき、食べ残したリュウガンの殻がベッドの下にたくさんたまっていたことに気付いた。)

吃完了的→吃完的

(2-19) 孟姜女想到丈夫在关外修长城，一定十分寒冷，便启程亲送早就做好了的寒衣。(CCL・《中国儿童百科全书》)
(孟姜女は夫が関外で長城の建造に行ったので、さぞ寒いだろうと思って、早くから作ってあった冬着を届けに旅に出た。)

做好了的→做好的

(2-20) 这功夫他伸手再去拿他扔掉了的那把菜刀。(CCL・刘流《烈火金刚》)
(このとき、彼は捨てた包丁を取ろうとして手を伸ばした。)

扔掉了的→扔掉的

(2-21) 里根也可能不会记得那次采访，而我记住了的也只是在我的采访生涯中又添了一个内容。(CCL・《作家文摘》)
(レーガンはあの取材を覚えていないかもしれないが、私が覚えているのもまた私の取材生涯において取材経歴がひとつ増えたにすぎなかった。)

记住了的→记住的

(2-22) 因为他的父母亲友早都死了，所以没有人认得出这睡着了的年轻人是谁，也没人知道他的悲剧。(CCL・《读者》(合订本))
(彼の両親や親戚が早く死んだので、この眠っている若者が誰なのか誰にもわからない、彼の悲劇を知る人もいない。)

睡着了的→睡着的

上記の例に示すように、VR 構造の R が動作行為の〈完成相〉を表す場合、“了”の生起は随意的である。

【タイプ B】

(2-23) 至于将来如何重组三级架构，那是中国的内政，将由香港特别行政区筹委会作出决定，这也是早就讲清楚了的事情。(CCL・《人民日报》)

(将来は如何に「三級行政」を構築するかについては、それは中国の内政であり、香港特別行政区準備委員会により決定されることになる。これも以前からはっきりと述べていることである。)

讲清楚了的→讲清楚的

(2-24) 我们可以从他那握紧了的拳头上看到一柄象征社会力量的宝剑的寒光。(CCL・[法]维克多・雨果著/李丹、方于译《悲惨世界》)

(我々は彼がしっかり握りしめた拳から、社会の正義の力が見て取れる。)

握紧了的→握紧的

(2-25) 我们首先要充分认识国际市场的竞争形势，看准了的事情就不要过多的瞻前顾后，也不要怕肥水外流。(CCL・《报刊精选》)

(我々は国際市場の競争の形勢を十分に認識しなければならい。決めたことは、考えすぎず、利益が外に流れることを恐れずに実行しなければならない。)

看准了的→看准的

(2-26) 早晨，在她卧室门外的地面上，发现了一只打破了的花瓶，那是摆在过道里一张桌子上的花瓶。(CCL・[美]西德尼・谢尔顿著/孙家新・马清文译《镜子里的陌生人》)

(朝、彼女の寝室の外の床に、割れている花瓶を発見した。それは廊下にあるテーブルの上に置いてあったものだった。)

打破了的→打破的

(2-27) 当细心的护士从刘英贴胸的内衣口袋里发现被血染红了的库房和保险箱钥匙时，在场的１０多名医护人员止不住落了泪。(CCL・《报刊精选》)

(注意深い看護婦が劉英の上着のポケットから血で赤く染まったガレージと金庫の鍵を見つけたとき、現場にいる 10 名あまりの医療人員は涙を流した。)

染红了的→染红的

(2-28) 家庭存放面粉，可把洗干净的面袋在花椒水中浸泡两小时，晾干后装入面粉，扎紧袋口。(CCL・《市场报》)

(家庭で小麦粉を保存するときは、きれいに洗った袋をカショウ入りの水に 2 時間浸し、干した後、小麦粉を入れて、袋の口をしっかり締める。)

洗干净的→洗干净了的

(2-29) 每年“蛇节”，家家将喂肥的蛇放到大街爬行，以示庆贺。(CCL・《读者》(合订本))

(毎年「ヘビ祭り」では、どの家も太く育てた蛇をまちに放し、お祝いをする。)

喂肥的→喂肥了的

(2-30) 由于每年有 1 亿立方的泥沙沉积在洞庭湖，垒高的堤防赶不上泥沙淤积和水位抬高的速度。(CCL・《报刊精选》)

(毎年一億立方メートルの泥や砂が洞庭湖の底に堆積しているので、高く築かれた堤防は泥砂の堆積速度と水位が上昇する速度に追いつかない。)

垒高的→垒高了的

(2-31) 把本钱吃光的小贩或是失业的工匠，到了卖无可卖，当无可当的时候，咬着牙，含着泪，上了这条到死亡之路。(CCL・老舍《骆驼祥子》)

(資金を使い切った物売り、あるいは失業した職人は売るものがなくなったり、質に入れるものがなくなったりするとき、歯を食いしばって、涙を浮かべながら死の道を選んだ。)

吃光的→吃光了的

(2-32) 当你擦那早已擦净的地板和一点灰尘也没有的衣柜时，谁也不会发现你为此花费了劳动。(CCL・《读者》(合订本))

(すでにきれいに拭いてある床とほこりが微塵もないクローゼットを拭いても、あなたが労力を費やしたことに誰も気付かないはずだ。)

擦净的→擦净了的

(2-33) 秦妙斋愣住了，闭了一会儿眼，睁开眼，他象条被打败了的狗似的，从小道跑进去。(CCL・老舍《不成问题的问题》)

(秦妙斎は驚いた。しばらく目を閉じて、また目を開いて、喧嘩に負けた犬のように、小道から走って入っていった。)

打败了的→打败的

(2-34) 对抗曹操也有两种结果，一种是打赢了，一种是打败了，打赢了的好处诸

葛亮说了，是什么呢？(CCL・易中天《品三国》)

(曹操と対抗することには、二つの結果がある。ひとつは勝つ。もうひとつは負ける。勝った場合のメリットについて諸葛亮はもう話したが、それはなんですか？)

打赢了的→打赢的

上述の“清楚，紧，破，碎，肥”等の R は事物の具象的な、可視性の高い性質や特徴を表す点において共通している。これらの具象的な、可視的な性質の変化は知覚しやすいものである。これらの VR 構造が“的”を伴い、連体修飾語になる場合、“了”の生起は随意的である。

【タイプ C】

(2-35) 姥爷猛地冲了进来，扑向姥姥，挥手就是一巴掌，甩着打疼的手叫喊。(CCL・[俄]高尔基著/杨实译《童年》)

(祖父が突然飛んできて、祖母を押し付け、ビンタを食らわした。その後、痛くなった手を振りながら叫んだ。)

打疼的→打疼了的

(2-36) 费克斯先跳下雪橇，活动一下冻麻了的四肢。(CCL・[法]儒勒・凡尔纳著/陈筱卿译《八十天环游地球》)

(フィークスは先に雪ゾリを飛び降りて、寒さでしびれている手足を動かした。)

冻麻了的→冻麻的

(2-37) 远行走累了的商人和放牲口的牧人三三两两地偎依在门旁和城墙边歇息。(CCL・《圣经故事》)

(長い旅で疲れた商人と放牧する牧人が三々五々、門と城壁の横で休んでいる。)

走累了的→？走累的

(2-38) 他觉得做出听懂了的样子，比听不懂这么漂亮的一个女孩子的话，自然要好看些。(CCL・谌容《梦中的河》)

(彼はこんなに可愛い子の話を聞き取れたふりをしたほうが、聞き取れないより、当然面目が立つと思っている)

听懂了的→？听懂的

(2-39) 当斯大林看到餐桌上摆着的是他吃腻了的烧鸡时，竟抑制不住不满的心情，一手抓起烧鸡就从气窗口扔了出去。(CCL・《读者》(合订本))

(スターリンは食卓においてある彼が食べ飽きた焼き鳥を見たとき、不満の気持ちを抑えきれず、焼き鳥をつかんで天窓から投げた。)

吃腻了的→？*吃腻了的

(2-40) 从人们看腻了的样板戏中的主角，成了大家听烦了的讲用会上的明星。(CCL・李国文《危楼记事》)

(人々が見飽きた「様板劇」の主役から、みんなが聞き飽きた「批判会」のスターになった。)

听烦了的→？*听烦的

上述の諸例に用いられている結果補語“累，疼，麻，腻，烦”はいずれも主観感情・感覚形容詞によって担われている。[9]タイプ B と比べ、主観的色彩が強い。そのうち、“累(疲れる)，疼(いたい)，麻(しびれる)”は、生理的な現象を表す類であるのに対し、例(2-38)、(2-39)、(2-40)の“懂(理解する)，腻(飽きる)，烦(うんざりする)”は動作主の感情を表す類である。前者より、後者のほうは“了”が省略し難い傾向が見られる。

【タイプ D】

(2-41) 今春挖浅了的鱼沟还得再重新挖。(CCL・《新文化网》)

(今年の春掘った浅い養魚池はもう一度掘りなおさなければならない。)

挖浅了的→*挖浅的

(2-42) 老王看了看垒低了的猪圈，一脸的不高兴。(CCL・《读者》(合订本))

[9] 中国語の形容詞は日本語のような主観感情・感覚と客観属性のような分け方はないが、両言語にはこの意味特徴において共通しているため、本論文では日本語の用語を援用する。

(王さんは低く建てられたブタ小屋を見て、不機嫌な顔になった。)

垒低了的→*垒低的

(2-43) 前不久，有位有一定级别的领导号召大家要“迎接ＷＴ。挑战”，大庭广众之下闹了笑话。后来才知道，他以为那个“Ｏ”是个写大了的句号。(CCL・《新闻周刊》)

(つい最近、あるそこそこ偉い幹部は「ＷＴ。の挑戦を引き受けよう」と呼びかけて、みんなの前で恥をかいた。彼が「Ｏ」を大きく書いたコンマだと勘違いしていたことが後になってわかった。)

写大了的→*写大的

(2-44) 我心想我没买新裤子啊，仔细一看才发现原来穿的是乐乐买大了的一条女裤。(CCL・《新闻周刊》)

(新しいズボンを買っていないなと思って、よく見てみたら、穿いているのは楽楽が買った(あの)大きかった婦人ズボンだってことに気付いた。)

买大了的→*买大的

(2-45) 在进行月度总结归纳时，可把当月感觉买得最值的放在“省钱”栏里，而把那些买贵了的放在“浪费”栏里。(CCL・《新文化网》)

(月末の総括をするとき、その月に買い得だと思うものを「節約」という欄に入れ、高く買ったものを「浪費」という欄に入れておく。)

买贵了的→*买贵的

上記の5例におけるVR構造はいずれも「ある基準を超す」、すなわち〈過分義〉を表す。これらのVR構造は連体修飾語になる場合、“了”の生起は義務的となる。

以上、4つのタイプのVR構造が“的”を伴い、連体修飾語になる場合、“了”の省略が可能か否かについて考察してきた。考察の結果は以下のようにまとめることができる。すなわち、タイプA、タイプBおよびタイプCが“的”を伴い連体修飾語を形成する場合、“了”の生起は随意的であるが、一方、タイプDが連体修飾語になる場合、“了”の生起は義務的である。

タイプD以外の3タイプはいずれも“了”の生起は随意的であるという結果が得られた。しかし、実際の言語応用の中で、“了”の使用は果たして全く同様なのかという疑問が生じる。そこで、VR構造が“的”構造を形成し連体修飾語になる場合、

各タイプによって、“了”の生起頻度にどのような傾向を見られるのかという問題を明らかにするため、本論文は用例調査の範囲を広げて“了”の生起状況を調べる。

2.4.2. 生起頻度についてのコーパスによる用例調査

本論文は CCL コーパスを利用し、“VR(了)的 N”構造における“了”の生起する用例数と生起しない用例数を統計した。その結果を下記の【表 3】にまとめる。

【表 3】

分類	具体例	“了”を伴わない例	“了”を伴う例
タイプ A	(吃)**完**的	12	2
	(做)**好**的	62	13
	(扔)**掉**的	45	2
	(扣，套，问，拦，压，锁，迷)住的	70	14
	(睡)着	205	48
	小　　計	394	79
	(%)	**83.3%**	**16.7%**
タイプ B	(洗)**干净**的	16	1
	(喂)**肥**的	5	1
	(吃)**光**的	12	3
	(染)**红**的	59	17
	(弄，砸)**坏**的	10	4
	(打)**败**的	27	9
	(打)碎的	60	7
	(打)**破**的	32	8

	小　　計	205	49
	(%)	**80.7%**	**19.3%**
タイプ C	(打，勒，摔，揪)**疼**的	4	1
	(喝)醉的	50	48
	(走，绑，冻)**麻**的	1	4
	(走，写，看，玩，哭)**累**的	3	18
	(听，看)**懂**的	5	3
	(等，逼，输，饿)**急**的	5	12
	(吃，看，玩，跳)**腻**的	2	30
	(读，弄，惹，听，缠)**烦**的	1	5
	(吓，穷，饿，整，炸)**怕**的	1	21
	(打，比，气，渴，饿，逼，跳，愁，急)疯的	6	22
	小　　計	78	164
	(%)	**32.2%**	**67.8%**
タイプ D	(垒)**低**的	0	2
	(挖)**浅**的	0	1
	(写)**大**的	1	3
	(买)**大**的	0	3
	(买)**贵**的	0	3
	小　　計	1	12
	(%)	**7.7%**	**92.3%**

【表 3】から、VR 構造が“的”を伴い連体修飾語になった場合、“了”との共起関係には以下のような傾向が見られる。

① タイプＡが連体修飾語になる場合、“了”を伴わない用例数は“了”を伴う用例数を大きく上回っている。

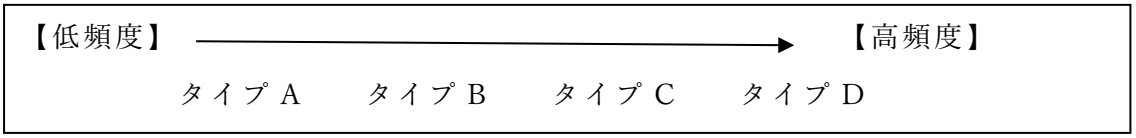
② タイプＢが連体修飾語になる場合、“了”を伴わない用例は“了”を伴う用例より多い。

③ タイプＣが連体修飾語になる場合、タイプＡとＢタイプと比べ、“了”を伴う用例数は大幅に上がる。とりわけ、“腻(飽きる)”、“烦(うんざりする)”“急(あせる)”を表す心理状態を表す形容詞が結果補語になる場合、“了”の生起への要請が強くなる。

④ タイプＤが連体修飾語になる場合、ほぼすべての用例には“了”が生起している。“了”を伴わない用例はゼロに等しい。

以上①～④の考察の結果に基づき、“了”の生起頻度が次の**【図 1】**に示されるように、上述の４タイプによって段階的に異なっていることがわかった。

【図 1】VR 構造が連体修飾語になる場合、“了”の生起頻度



2.5.“VR(了)的 N”構造における“了”の生起条件に関与する要因

本論文は、“VR(了)的 N”構造における“了”の生起条件は VR 構造が表す事象の〈限界性〉と深く関わると考える。

第１章で述べたように、認知言語学の観点から見れば、〈限界性〉は〈相対性〉を有する意味概念である。現代中国語の研究の中で、沈家煊(1995)は、認知言語学意味論におけるの〈限界的／非限界的〉という対概念を、中国語におけるさまざまな文法現象の分析に取り入れている。当該の論文において、〈限界的／非限界的〉の違いは主として人間の認知の仕方によって規定されており、相対的なものであると述べている。例えば、“吃(食べる)”，“写(書く)”などの動作動詞は“像(似る)”，“姓(～という苗字である)”など未完了の意味を表す動詞と比較する場合、

前者は〈限界的〉であるが、後者は〈非限界的〉である。一方、“吃了(食べた)”、“吃好(食べて満足する)”といった複雑形式を伴う動詞と比較すれば、“吃(食べる)”, “写(書く)”は〈非限界的〉であるということである。また、张黎(2012：302)では次のような例を取り上げ、〈限界性〉には程度が含まれる意味概念であると指摘する。

(2-46) a.读书(本を読む)→ b.读中国作家的书(中国人作家の本を読む)→ c.读鲁迅的书(魯迅の本を読む)→ d.读《阿Q正传》(『阿Q正伝』を読む)

上記の(2-46)における動目構造(動詞＋目的語)の〈限界性〉について、张黎(2012)は、“如果以有无自然的时间终结点为有界和无界的标准的话，那么a是无界的，d是有界的，从a到d是从无界到有界逐渐过渡。显然，从a到d之间有一个‘界度’的问题。(もしも自然の時間的終結点の有無を〈限界的／非限界的〉の判断基準とするならば、aは〈非限界的〉であり、dは〈限界的〉である。aからdは〈非限界的〉から〈限界的〉へと次第に変化していくのである。明らかにaからdの間に「界度」の問題がある。)”と指摘している。この指摘は動目構造に関するものであるが、本論文は中国語におけるVR構造にも適用すると考える。以下は、张黎(2012)でいう「界度」という用語を〈限界性〉の程度に変え、4タイプのVR構造におけるRの限界化の仕方を分析しつつ、VR構造の〈限界性〉の程度の差異が存在する理由について検討していきたい。

AタイプのVR構造(e.g.“V完”)における結果補語Rは前項動詞Vが指し示す動作行為の完了の局面を示す。R自体が動作行為の終結点を明示する役割を担う。このようなVR構造が表す事象が限界的であることは容易に認識される。

BタイプのVR構造(e.g.“V干净”)における結果補語Rは直接に動作行為の完了の局面を表すものではなく、前項動詞Vが指し示す動作行為が終了後、受動者又は第三参与者に新たな状態変化が生じるという結果を表すことによって、間接的に前項動詞を限界化する。しかし、Rによって表される結果状態は可視的なものが多いため、VR構造の〈限界性〉は知覚されやすい。

CタイプのVR構造(e.g.“V累”)における結果補語Rは、間接的に前項動詞を限界化するという点において、上述のBタイプと同じであるが、Rが表す結果状態

は可視的なものではなく、“累(疲れる)”、“腻(飽きる)”“烦(うんざり)”といった主体の生理的、心理的状態が生じることを表す。これらの状態変化は、非可視的であり、感知されるほど顕著な兆候が見られない。よって、C タイプの VR 構造が表す事象の〈限界性〉の程度は B タイプより低い。

そして、D タイプの VR 構造(e.g.“买贵(…を買って、(予想より)高かった)”)における R が表す結果状態は前述の三タイプと異なり、R が表す結果状態は現実世界において実在するものではなく、動作が実現したあとに出現した状態と事前に予想されていた状態との比較によって話者の心理的な落差を表す。4 タイプの VR 構造の中で、〈限界性〉の程度が最も低いと思われる。

以上の分析によって、VR 構造の〈限界性〉の程度の差異は実は R の限界化の仕方の違いに起因していることが分かった。

ここで、なぜ連体修飾語構造(“的”構造)において VR 構造の〈限界性〉の程度が“了”の生起に関与するかという疑問が生じる。本論文は“的”構造の意味機能に起因していると考える。陆丙甫(2003)は、“的”構造の基本的な意味機能は〈描写性〉であり、〈指示性〉は〈描写性〉から派生した意味機能であるため、描写性の強弱が指示性の強弱に影響をもたらすと指摘している。それを裏付ける言語現象として、陆丙甫(2003)は次の例(2-47)を取上げている。

(2-47) a. ？一条狗跑进屋里来了。(一匹の犬が部屋に入ってきた)
b. 一条白白胖胖的狗跑进屋里来了。
(一匹の白く太っている犬が部屋に入ってきた)

陆丙甫(2003)によれば、中国語では通常不定名詞句が主語の位置に生起し難いため、例(2-47)a は不自然であるが、例(2-47)b では、不定名詞句“一条狗(一匹の犬)”は描写性の強い連体修飾語“白白胖胖”によって修飾されており、「定」の読み、つまり指示性が強くなったため、主語の位置に生起しやすくなるということである。言い換えれば、描写性の度合いは指示性の度合いとは比例している関係にある。これは認知言語学における参照点能力という観点からも説明できる。参照点とは目的の対象となるターゲットを同定するために話し手が利用する情報全般を指す概念として規定されている。参照点は一般的に固定しており、且つ際立っている

事物が担う(沈家煊 2000，2009)。“VR(了)的 N”構造についていえば、VR 構造を参照点として、N はターゲットとして認知されるのが一般的である。この場合、参照点となる VR 構造が指し示す結果状態の際立ちが顕著になるほど、ターゲット N へのアクセスが容易になる。つまり、上述の 4 タイプの VR 構造のうち、A タイプ(e.g.“V 完”)と B タイプ(e.g.“V 干浄”)における R が表す結果状態は客観的で、認識されやすいのに対し、C タイプ(e.g.“V 腻”)と D タイプは(e.g.“V 贵”)における R は主観性の強い結果状態を表すため、それが実現済みであるか否かは、比較的に認知されにくい。よって、C、D タイプに「結果状態がすでに実現済み」であるという話者の断定を表す“了”を付与する必要がある。

2.6. 第 2 章のまとめ

本章は従来の研究を踏まえたうえで、“VR(了)的 N”構造における“了”の生起問題について検討を加えた。VR 構造における R の限界化の仕方によって、VR が表す事象の〈限界性〉の程度は異なる。更に、VR 構造が表す事象の〈限界性〉の程度が高いほど、“了”は生起し難く、〈限界性〉の程度が低いほど、“了”は生起しにやすいという逆比例の関係を持つことを明らかにした。上述の結論を表にまとめると次のようになる。

【表 4】

VR 構造における R の限界化の仕方	**VR 構造の〈限界性〉の程度（弱→強）**	**“了”の生起頻度（低→高）**
R が V の完成相を表す(タイプ A) R が受動者や第三関与者の可視的な状態変化を表す(タイプ B) R が動作主の非可視的な状態変化を表す(タイプ C) R が V の結果に対する評価を表す(タイプ D)	↑	↓

第 3 章　主節に生起する VR 構造

――動詞コピー構文における VR 構造――

第 2 章では、本論は VR 構造が従属節構造――「“VR(了)的 N”構造」――に生起した場合の“了”の生起条件について検討を行い、“了”の生起が VR 構造における R の限界化の仕方の違いと深く関わっていることを明らかにした。すなわち、R の限界化の仕方の違い――例えば R が V の相を表すか、R が V に対する話者の評価を表すかといった違い――が VR 構造の〈限界性〉の程度を決定づけており、さらに〈限界性〉の程度の差異が“了”の生起頻度に影響を与えるという結論を得た。第 2 章に続き、本章では、動詞コピー構文[10]の述語として生起する場合における VR 構造下位カテゴリーの相違について考察していく。

動詞コピー構文は中国語において常用される構文の一つである。同一の文の内部において、動詞が重複して生起し、かつ前項動詞の後に目的語が後接し(V_1O と示す)、後項動詞の後に補語成分が後接する(V_2C と表記する)という統語的特徴を持つ(「SV_1OV_2C」と表記する)。この構文に関しては、王力(1944)によって初めて言及されて以来、多くの研究が蓄積されているものの、この構文の意味機能などの問題について未だに統一した見解が見られない。そこで、本章では、まずこれまでの先行研究における問題点や不足点を指摘し、動詞コピー構文の意味機能について検討する。その後、VR 構造が動詞コピー構文に生起する状況を考察していく。

3.1. 先行研究における問題点

3.1.1. 動詞コピー構文における目的語(V_1O の O)の指示性(semantic referentiality)に関する問題

Li&Thompson(1981)、项开喜(1997)、李讷・石毓智(1997)などの研究では、動詞コピー構文における目的語(O)は一般に非指示的(nonreferential)でなければならず、“这/那＋(量詞)＋名詞”、“領属性定語＋名詞”、“限定性定語＋名詞”、“数詞＋(量詞)＋名詞”のような指示的名詞句(定指名詞)は目的語になれないとされて

[10] この文法現象について、他に“复动句”(范晓 1993)、“复制动词句”(高更生・王红旗 1996)、“动词拷贝结构”(李讷・石毓智 1997, 施春宏 2010)等の名称も使用されている。

いる。(例(3-1)の諸例は项开喜 1997 から引用)

(3-1) a.*喝这瓶酒喝醉了。(この瓶のお酒を飲んで酔った。)
b.*喝他的酒喝醉了。(彼のお酒を飲んで酔った。)
c.*喝昨天买的酒喝醉了。(昨日買ったお酒を飲んで酔った。)
d.*喝四瓶酒喝醉了。(お酒を四瓶飲んで酔った。)

しかし、王灿龙(1999)などが指摘するように、指示的名詞句が動詞コピー構文の目的語を担う例もないわけではない。(例(3-2)は王灿龙(1999)から引用)

(3-2) a.明明吃这种饼干吃上了瘾。
(ミンミンはこの種類のビスケットを食べて病みつきになった。)
b.她等她丈夫等了十年。
(彼女は夫を十年待った。)
c.我用学校的电脑用惯了。
(私は学校のパソコンを使い慣れている。)
d.他吃三顿饭就吃掉了半个月的工资。
(彼はたった 3 回の食事で、半月の給料を使ってしまった。)

上記の例において、動詞コピー構文の目的語が指示的な名詞成分によって担われているにも関わらず、いずれも成立している。なお、上記の例のような目的語が指示的名詞成分である動詞コピー構文はある特定な意味を持つと王灿龙(1999)は指摘しているが、しかし、この「特定な意味」とは一体何なのかについて、王灿龙(1999)には詳しい説明が見当たらない。また、王灿龙(1999)、曾传禄(2007)、钟小勇(2010)などの研究によれば、上記の例(3-2)のような例外があるものの、動詞コピー構文の目的語は非指示的であり、形式上「裸名詞」である場合が圧倒的に多いとされている。

3.1.2. 動詞コピー構文における動詞「重複」に関する問題

戴浩一(1994)は動詞コピー構文の動詞〈重複(繰り返し)〉の形式に注目しており、概念と言語記号間の「イコン性」の観点から、動詞コピー構文の動詞の反復形式は、動作自身の〈重復(繰り返し)〉を反映しているものであり、もし動詞句(V_1O)が瞬時的な変化を表す場合、動詞コピー構文との整合性が低いと指摘する。本論文はこの観点を支持する立場を取る。更に、3.3.2 において下記のような例からなぜ動詞の〈重複〉の意味が読み取れないのかという問題についても検討していく。

(3-3) a.老张跳水跳得脚抽筋了。

(張さんは飛び込みをして、足が攣った。)

b.奶奶穿衣服穿反了。

(おばあさんは服を裏返しに着ていた。)

c.他掏鸟窝掏出来一条蛇。

(彼は鳥の巣にいたずらをしたら、蛇が出てきた。)

3.1.3. 動詞コピー構文の意味機能に関する問題

项开喜(1997)は動詞コピー構文の意味機能について「重动句突出强调动作行为的非预期性结果(動詞コピー構文は動作行為の予期せぬ結果を強調する)」と指摘している。しかし、王灿龙(1999)、刘培玉(2012)などは次のような例を挙げ、動詞コピー構文の中には「予期する結果」を表すものもあると反論している。

(3-4) a.张三追李四追累了。(刘培玉 2012)

(張三は李四を追いかけて、疲れた。)

b.他抽大烟抽上瘾了。(王灿龙 1999)

(彼は鴉片を吸って、依存症になった。)

c.狗撵鸭子撵得鸭子呱呱叫。(王灿龙 1999)

(犬はアヒルを追いかけて、アヒルがガーガーと鳴いていた。)

d.他招商招来了很多投资。(施春宏 2010)

(彼は外資導入に取り組み、投資をたくさん集めた。)

e.他唱歌唱红了。

（彼は歌を歌って、売れっ子になった。）

例(3-4)a についていえば、動作主“张三(張三)”が“追(追いかける)”という動作行為を行ったのであるが、それによって生じた結果“累了”(疲れた)は予期せぬ結果ではなく、むしろ動作が実現された時点において、想定され得るものである。同様に例(3-4)b では“抽大烟(鴉片を吸うこと)”と“上瘾(依存症なること)”という二つの事象の間に「因果関係」が見てとれるため、行為の実現から予期できる結果である。他の例も同じことが言える。上述の諸例はいずれも项开喜(1997)の「予期せぬ結果を強調する」という結論に不利であると言えよう。

なお、動詞コピー構文には例(3-4)のような「因果関係」を持つもののほかに、次の例(3-5)のような「因果関係」を持たないものもある。

(3-5) 他写作文写得很好。

（彼は作文を書くのが上手である）

例(3-5)における“写得很好(書くのが上手である)”における補語“(得)很好(上手である)”はV“写(書く)”が表す動作行為によって引き起こされる結果ではなく、V に対する評価を表す。このような「因果関係」を持たない動詞コピー構文については、项开喜(1997)の「予期せぬ結果を強調する」という主張ではうまく説明できない。

以下、本論文は先行研究を踏まえ、動詞コピー構文の類型を整理したうえ、動詞コピー構文の意味機能について検討していく。

3.2. 先行研究における動詞コピー構文の分類

赵新(2001)は動詞コピー構文の統語的形式に着目し、動詞コピー構文を以下の5つのタイプに分類している。(下記の例(3-6)～(3-17)は赵新 2001 から引用)

A. V+O+V+了/过＋T(T＝数量詞)

(3-6) 我们坐车坐了两天。(私たちは 2 日間車に乗っていた。)

(3-7) 我去北京去过两次。(私は北京に 2 回行ったことがある。)

B. V+O+V+到+N

(3-8) 他送货送到火车站。(彼は貨物を列車の駅まで届けた。)

(3-9) 他们聊天聊到半夜两点。(彼らは夜中 2 時までお話をしていた。)

C. V+O+V+得+C

(3-10) 他写字写得飞快。(彼は字を書くのがとても速い)

(3-11) 他踢球踢得忘了时间。(彼は時間を忘れるぐらいサッカーをしていた。)

(3-12) 他吃西瓜吃得肚子发胀。(彼はスイカを食べて、お腹がきつくなった。)

(3-13) 他游泳游得快极了。(彼は泳ぐのがきわめて速い。)

D. V+O+V+了+个+C

(3-14) 他们吵架吵了个天翻地覆。(彼らは大喧嘩した。)

(3-15) 我们喝酒喝了个痛快。(我々は思う存分にお酒を飲んだ。)

E. V+O+V+R

(3-16) 他挖坑挖浅了。(彼は穴を掘ったが、(穴は)浅かった。)

(3-17) 我做饭做糊了。(私はご飯を焦がした。)

赵新(2001)の分類は動詞コピー構文の形式の違いを基準にして行われたものにすぎず、動詞コピー構文の本質には触れていない。動詞コピー構文の内部には意味的差異が存在することを明らかにしたのは唐翠菊(2001)である。当該論文は前項動詞句(V_1O)が表す事象と後項動詞句(V_2C)が表す事象の間に「因果関係」が存在するか否かを基準に、動詞コピー構文を「使役義動詞コピー構文」と「非使役義動詞コピー構文」に分類する。(下記の例(3-18)は唐翠菊 2001 から引用)

(3-18) a.他吃中餐吃胖了。

(彼は中国料理を食べて、太った)

b.他吃中餐吃多了。

(彼は中国料理を食べすぎた)

唐翠菊(2001)によれば、例(3-18)a は“吃中餐(中国料理を食べること)”と“胖(太ること)”との間に「因果関係」が存在するため、「使役義動詞コピー構文」である。

一方、例(3-18)b は“吃中餐”と“多了((食べ)すぎた)”の間には「因果関係」が成り立たないため、「非使役義動詞コピー構文」であるということになる。この分類は、動詞コピー文の意味機能の解明には大いに貢献しているが、「非使役義動詞コピー構文」と「使役義動詞コピー構文」という 2 タイプの動詞コピー構文の間に如何なる関連性があるのかという問題について触れていない。以下、本論文はこの問題について検討していく。

3.3. 本論文の分析

3.3.1. 本論文の動詞コピー構文の分類

本論文は赵新(2001)と唐翠菊(2001)を踏まえつつ、動詞コピー構文の類型を独自の観点から整理していく。

3.3.1.1. 非使役義動詞コピー構文

このタイプの動詞コピー構文は〈使役義〉を持たない。補語成分(C)の意味指向と意味特徴に基づき、さらに次のように 4 タイプに分けることができる。

3.3.1.1.1. C が動作や受動者の〈量〉を表すもの

3.3.1.1.1.1. C が V を指向しており、C が表す動作は反復的にあるいは持続的に行われた量を表す場合(C は数量補語)

(3-19) a.我们坐车坐了两天。(前掲例(3-6))
b.我去北京去过两次。(前掲例(3-7))

例(3-19) a では、補語“两天(二日間)”は動作“坐(座る)”が持続的に行われた時間の量を表す。例(3-19)b では補語“两次(二回)”は動作“去(行く)”が繰り返し行われた回数、すなわち動作の反復の量を表す。

3.3.1.1.1.2. C が O を指向しており、受動者の量を表す場合

(3-20) a.老张买大米买了 100 斤。(張さんは米を 50 キロ買った)
b.他们喝酒喝了一箱。(彼らはお酒を一箱飲んだ)

3.3.1.1.2. C が V を指向しており、V が繰り返し行われて達した〈程度〉を表す場合(C は“得”を伴う程度補語)

(3-21) a.他写字写得很好。(彼は字を書くのがとてもうまい。)
b.他游泳游得快极了。(彼は泳ぐのがきわめて速い。)
c.老人耍把戏耍得炉火纯青。(老人は手品をするのが非常にうまい。)
d.他佩服老师佩服得五体投地。(彼は先生に非常に感服している。)

上の諸例における補語 C はいずれも〈程度〉という意味的特徴を有しており、動詞コピー構文は動作行動が繰り返されて展開し、C の領域に入っているという意味を表す。

3.3.1.1.3. C が V を指向しており、個別の動作行動が行われた後、V に対する〈評価〉を表す場合(C は結果補語)

(3-22) a.你找我找对了。(私に頼んだのは正解だった。)
b.他上班上晚了。(彼は出勤するのは遅かった。)
c.他买东西买贵了。(彼は買い物をして、(値段が)高かった。)

3.3.1.1.4. C が動作主が潜在的にある動作行為を実行する〈能力〉や〈可能性〉を表す場合(C は可能補語)[11]

(3-23) a.李岩找工作找不着。(李岩は仕事探ししても見つからない。)
b.琳琳写作业写不完，急得直哭。(リンリンは宿題(が多くて)書き終わらないので、あせって泣いていた。)
c.祖父嚼东西嚼不动了。(祖父は食べ物を噛みきれなくなった。)
d.我扳腕子扳不过他。(私は彼と腕相撲しても勝てない。)

[11] 屈承熹(1999)では、このような“能/不能(できる／できない)”という意味を表す可能補語を“潜能補語(potential complement)”と呼んでいる。

以上の例における可能補語は動作主の潜在的な属性を表す。この用法は実は動作の重復(繰り返し)を表す用法と密接な関係がある。鈴木(1965)や高橋(2010)に指摘するように、〈可能〉と〈繰り返し〉はともに動詞のポテンシャルな用法であり、動作行為や状態の実現する個々の特定の時間が捨象され、その動作主がポテンシャルに動作行為や状態を持っていることを表す点において共通している。また、中国語の可能補語の機能について、杉村(1992)は“V 得/不 R”は非完了性の性格を備えており、意味的機能は形容詞に近いと指摘する。この指摘からは、中国語の可能補語が表す〈可能義〉は〈程度〉、〈評価〉と同じく動作の重複義を基盤に拡張したものであることが窺える。

ここで上述の非使役動詞コピー構文における C の意味特徴をまとめると、次のようになる。すなわち、それぞれ〈量〉、〈程度〉、〈評価〉、〈可能〉という意味特徴を表す。この四つの意味概念は認知的領域において必然的な関連性を有しており、非動態的事態、すなわち静態的事態を表す点において共通している。[12]そのうちの〈量〉の概念は最も基本的な概念であり、〈程度〉、〈評価〉、〈可能〉の三つの意味概念は〈量〉という概念から拡張しものであると考えられる。

続いて〈使役義〉を持つ動詞コピー構文にはどのようなものがあるのかを見てみよう。

3.3.1.2. 使役義動詞コピー構文

このタイプの動詞コピー構文は〈使役義〉を持つ。つまり V_1O と V_2C の間に「動作行為の実行により、ある対象に何らかの状態や位置の変化が引き起こされる」という因果関係を有している。その状態や位置の変化が生じる名詞句の意味役割によって、更に以下のように分類することができる。

3.3.1.2.1. C が S を指向しており、V_1O が表す動作行為の繰り返しによって、引き起こされた動作主の状態変化を表す場合(C は“得”を伴う様態補語、結果補語)

[12] 場所理論では、状態、属性、判断は〈＋静止〉、〈－運動〉という意味特徴を持ち、変化状態を伴わない点において、いずれも一種の状態として捉える。

3.3.1.2.1.1. C が“得”を伴う様態補語である場合

(3-24) a.他踢球踢得忘了时间。(前掲例(3-11))

b.他喝酒喝得不知道东南西北了。(彼は方向が分からなくなるぐらい酒を飲んだ。)

c.小李赔钱赔得直想哭。(李さんは泣きたいほど商売で損した。)

3.3.1.2.1.2. C が結果補語である場合

(3-25) a.张三追李四追累了。(前掲例(3-4)a)

b.他抽大烟抽上瘾了。(前掲例(3-4)b)

c.她吃大闸蟹吃腻了。(彼女は上海蟹を食べ飽きた。)

上述の例(3-24)と(3-25)における C が表す動作主の状態変化は、V_1O が指し示す動作行為の繰り返しによって引き起こされたものである。例えば、例(3-24)a は、動作主“他”が「サッカーをした」結果、時間を忘れたという事態を表している。結果の実現には動作の繰り返し〈量〉の実行が前提となる。例(3-25)a は、「張三は李四を追いかけた」結果、「張三が疲れた」という因果関係の事態を叙述している。ここにも「張三は疲れた」という結果に至るまで、動作“追(追いかける)”がしばらく持続することが容易に想起されうる。同じく動作の〈量〉という意味特徴が含意されている。

3.3.1.2.2. C が O を指向しており、V_1O が表す動作行為の繰り返しによって引き起こされた受動者の状態変化を表す場合(C は“得”を伴う様態補語、結果補語)

3.3.1.2.2.1. C が“得”を伴う様態補語である場合

(3-26) a.她洗衣服洗得干干净净。(彼女は服をとてもきれいに洗った。)

b.服务员收拾房间收拾得非常利索。(従業員は部屋を非常に清潔に掃除した。)

c.他敲门敲得咚咚响。(彼は「トントン」とドアをノックした。)

上記の 3 例における C はいずれも〈程度性〉という意味特徴を持つ。具体的にいうと、例(3-26)a における C は状態形容詞である。张国宪(2000)は、状態形容詞

の意味機能について、「状態形容詞は事物や動作の状態を表す。…(略)…性質形容詞は「属性」の差異を表すのに対し、状態形容詞は「程度」の差異を表す」と指摘する。例(3-26)b における“利索(清潔である)”自体は性質形容詞であるが、程度副詞“非常”に修飾されているため、〈程度性〉を持つ。また例(3-26)c では、C 補語成分は象声詞であり[13]、後接動詞“响(音が立つ/響く)”が表す動作行為の様子・状態を描写する。大河内(1969)によれば、現代中国語の擬音・擬態語は重畳形式の一種であって、状況描写性、状語(本論でいう「連用修飾語」相当する筆者注)機能ともに形容詞重畳形式と等しいということである。つまり、同じく〈程度性〉を持つと考えられる。このような〈程度性〉を持つ結果状態を引き起こす動作行為は繰り返し行われたものであるということも想起しうるだろう。

3.3.1.2.2.2. C が結果補語である場合

(3-27) a.我做饭做糊了。(前掲例(3-17))

b.奶奶穿衣服穿反了。(前掲例(3-3)b)

例(3-27)に示すように、動詞コピー構文に生起する結果補語が受動者の状態変化を表す場合、その結果状態は〈意外性〉、つまり项开喜(1997)でいう「予期せぬ」というニュアンスを伴う。この場合なぜ〈意外性〉というモーダルな要素が付与されるかということ、つまり、結果状態の〈意外性〉と動作行為の重複(繰り返し)との関係ついては、本論文は後の 3.3.2 に詳述する。

3.3.1.2.3. C が意味上、主語と目的語以外の名詞成分に指しており、V_1O が表す動作行為の繰り返しによって引き起こされた第三関与者の状態変化を表す場合(C は“得”を伴う様態補語、結果補語、方向補語)

3.3.1.2.3.1. C が“得”を伴う様態補語である場合

(3-28) a.他讲相声讲得台下哄堂大笑。(彼が漫才を披露すると、観客は爆笑した。)

b.爷爷砍柴砍得两把斧头都钝了。(祖父が芝刈りをすると、斧が二つも切れ味が悪くなった。)

[13] 日本語の「擬音語」に相当する。

3.3.1.2.3.2. C が結果補語である場合

(3-29) a.他们卖货卖丢了一辆三轮车。(彼らは物売りしているうちに、一台の三輪車をなくしてしまった。)

b.琳琳砸核桃砸废了一把锤子。(リンリンはクルミを割ったとき、一本のハンマーを壊してしまった。)

3.3.1.2.3.3. C が方向補語である場合

(3-30) a.他掏鸟窝掏出来一条蛇。(前掲例(3-3)c)

b.她捞鱼捞上来一堆海草。(彼女は魚とりをしているうちに、海草をすくいあげてしまった。)

C が動作主、受動者以外の第三関与者の状態変化を表す動詞コピー構文において、C が結果補語や方向補語である場合、結果の〈意外性〉の読みが強い。

以上、動詞コピー構文の類型をまとめた結果、動詞コピー文に生起する補語 C は「結果補語」、「方向補語」、「可能補語」、「様態補語」、「程度補語」と広範囲にわたることが分かった。そして、補語 C が表す状態変化は何れも〈量〉の概念と密接に関係していることも窺える。

3.3.2.「非使役義動詞コピー構文」と「使役義動詞コピー構文」の関連性

3.3.1 の分析に基づき、本論文は「非使役義動詞コピー構文」と「使役義動詞コピー構文」の意味機能及び両者の関連性について次のように考える。すなわち、「非使役義動詞コピー構文の構文的意味は、動作行為それ自体或いは動作行為に関する事物の〈多量性〉を表す。使役義動詞コピー構文の構文的意味は動作行為者にとってなんらかの〈多量性〉を備えた動作行為によってある結果状態がもたらされるという因果関係を表す」ということである。両者はいずれも動作行為〈多量性〉を表すという共通性を持つ。後者は動詞コピー構文のプロトタイプである前者から、動作行為の〈多量性〉を表すという意味的共通性を基盤として、構文的意味の拡張により生成されたものであると主張する。

ただし、以下のような一回性の事態を表す動詞コピー構文が、なぜ動作の〈量〉の多さを表しうるかという問題について説明しておく必要がある。

(3-31) a.老张跳水跳得脚抽筋了。(前掲例(3-3)a)

（張さんは飛び込みをして、足が攣った。）

b.奶奶穿衣服穿反了。(前掲例(3-3)b)

（おばあさんは服を裏返しにきていた。）

c.他掏鸟窝掏出来一条蛇。(前掲例(3-3)c)

（彼は鳥の巣にいたずらをしたら、蛇が出てきた。）

上記の例は動作の繰り返しの〈量〉の意味が顕在化していない。むしろ、一回きりの動作行為の実行によって、V_2C が表す結果状態が生じるという意味合いが強い。例えば、例(3-31)a でいえば、動作主“老张(張さん)”が一回の“跳水(飛び込み)”をした結果、“脚抽筋(あしが攣った)”という事態が発生したと解釈したほうが自然である。また例(3-31) b について、動作主の“奶奶(祖母)”は何回も“穿衣服(服を着る)”という動作を繰り返して、とうとう“穿反了(裏返しにきた)”という結果を至らしめたという理解は明らかに不自然である。しかし、たとえそうであっても、このような動詞コピー構文は他と同様、動作行為が繰り返し行われることを認知の前提としていると本論文は考える。理由は次のように考える。上述した結果事象は通常、個別の動作行為によるものとして捉えられるが、これらの結果事象はいずれも〈意外性〉というニュアンスを持つもの、つまり偶然なものである。一般的に、偶然とは必然との対比のことであり、偶然か否かに対する判断は通常想定される必然的な「因果関係」との関係に基づいてなされる。必然的な「因果関係」から逸脱するものが通常偶然性があると認識されるのである。ここでいう必然的な「因果関係」は「ある動作が行わると、同じ結果が生じる」という法則的な関係性を持っており、「因‐果」の複合事象の度重なる発生を前提とする。言い換えれば、この重複の〈量〉こそ、意外性結果として認知される背景的知識だと考えるのである。

3.3.3. 使役義動詞コピー構文の〈使役義〉について

周知のように、多くの言語において、〈使役義〉を表す使役表現は一つに限らな

い。統語的手段、分析的手段、形態的手段、語彙的手段があるとされている(Comrie1989:172)。中国語も同じことが言える。古代中国語では主に「語彙的手段」を用いて使役概念を表すが、現代中国語では「分析的文法手段」を用いて使役概念を表す場合が多い。例えば、現代中国語では“把”構文、“被”構文，“让/使”構文など様々な分析的文法手段が存在している。無論、その中には、典型的な使役構文とそうでないものがある。

パルデシ(2007:186)では、「典型的な使役表現[14]においては、主語が意図した目的を達成するために、意志を以て行動を起こし、その目的は成就される。…このような事象は主語の意図的な行為を表す事象(E_1)と結果事象(E_2)で構成される。E_1 と E_2 の間に因果関係があり、出来事の結果部分は主語のコントロール下にあるものと把握される」と指摘している。この指摘に基づいて、使役義動詞コピー構文における行為事象と結果事象の関係についてみてみよう。

(3-32) 他踢球踢得忘了时间。(彼はサッカーをしていて、時間を忘れた)(例(3-11)a 再掲)

(3-33) 她洗衣服洗得干干净净。(彼女は服をとてもきれいに洗った)(例(3-13)a 再掲)

(3-34) 爷爷砍柴砍得两把斧头都钝了。(例(3-28)b 再掲)

上記の3例における補語Cはそれぞれ、動作主の状態変化、受動者の状態変化、そして第三関与者の状態変化を表す。例(3-32)が表す複合事象における動作事象“他踢球”では主語“他(彼)”が踢球(サッカーをする)”という行動を起こす目的としては「運動をしたい」や「サッカーを楽しみたい」などが挙げられるが、決して、結果事象で述べられる“忘了时间(時間を忘れた)”ことではない。E_1 と E_2 の間に因果関係は存在するものの、結果部分は主語のコントロール下にないものである。つまり、“忘了时间(時間を忘れた)”という結果は動作主にとって〈制御性〉の低いものである。なぜならば、「時間を忘れる」ことは外部による影響を間接的に受けているうちに次第に現れる主観的な状態変化であり、主語自身の意志によって

[14] パルデシ(2007)の原文では「他動節」という用語を用いている。

制御できないのである。例(3-33)は、動作主“她”が動作“洗”を行う目的は、“衣服”が“干净(きれい)”になることであるという解釈が可能であるが、しかし、上記の文において、“得”と共に様態補語を構成しているのは、性質形容詞“干净(きれい)”ではなく、状態形容詞“干干净净(とてもきれい)”である。沈家煊(1995)は中国語の性質形容詞は事物の一般的な性質や属性を表すのに対し、状態形容詞は特定の状況の中で知覚された様子を生き生きと描き写す働きを持つこと、そして後者は描写性が強く、程度性も含意されていると指摘している。前述のように、〈程度〉は主観的概念であり、認知主体の感覚によって規定されており、状態の固有の属性ではない。言い換えれば、例(3-33)における補語“干干净净(とてもきれい)”は動作主が目標としていた結果状態を超えているものであり、非制御的な結果とみなしたほうが妥当であろう。なお、もしも例(3-33)における状態形容詞を性質形容詞に置き換えれば、文自体は成立するが、意味が変わってくる。

(3-33)’她洗衣服洗得干净。

上記の例文は「彼女は服をきれいに洗う」という動作の恒常的な特徴を表しており、非使役動詞コピー構文に属するものである。これも〈－制御性〉の事象を表すと捉えられる。

また、例(3-34)では、結果状態を表す“钝(鈍くなる)”はそもそも動作主の“爷爷(おじいさん)”でもなく、受動者の“柴(しば)”でもなく、動作行為の道具、すなわち第三関与者の“斧头(斧)”に関するものであるため、他の例と同様に、〈制御性〉という意味特徴が含まれないと考えられる。

以上の観察から明らかになったのは、使役義動詞コピー構文の〈使役義〉は〈－制御性〉であり、プロトタイプではないということである。

ここで注意されたいのは、〈制御性〉と〈予期性〉は関連性があるものの、異なる概念であるということである。〈制御性〉とは動作主が受動者にその動作を、責任をもって、遂行する程度のことである。制御性は動作に影響を及ぼす程度を含むだけではなく、受動者に影響を及ぼす程度をも含む。〈予期性〉とは話者は事象間に「因果関係」が成立するか否かという判断のことを指す。事象 E_1 と E_2 の間に「因果関係」が成立する場合、結果事象 E_2 は〈＋予期性〉であると判断される。

一方、E_1 と E_2 の間「因果関係」が成立しない場合、E_2 は〈－予期性〉であると判断される。〈－予期性〉の結果は必ず〈－制御性〉であるが、一方、〈－制御性〉の結果には〈－予期性〉のみならず、〈＋予期性〉の結果もある。例えば、前掲の例(3-4)b“他抽大烟抽上瘾了(彼は鴉片を吸って、依存症になった)”についていえば､結果事象の実現が行為者の意向や気持ちに反しており､〈－制御性〉であるが、話者は、“抽大烟(アヘンを吸うこと)”と“上瘾(依存症になること)”の二つの事象の間に「因果関係」が存在するという背景的知識を持つため、話者は〈＋予期性〉の結果と認識する。この場合〈制御性〉と〈予期性〉は一致しない。

前述のように、非使役義動詞コピー構文の構文的な意味は動作行為或いは動作行為に関する事物の〈多量性〉を表す。一方、使役義動詞コピー構文の構文的意味はある結果状態が〈多量性〉を備えた動作行為によってもたらされたものであるという因果関係を表す。〈制御性〉の有無という観点からみれば、両タイプは〈－制御性〉という点において共通性を持つ。

3.4. VR 構造が動詞コピー構文に生起する状況

本章の最後に、VR 構造が動詞コピー構文に生起する状況を考察した。結果を下記の【表 5】にまとめる。

【表 5】

R の限界化の仕方	VR 構造が動詞コピー構文に生起する状況	代表例
RがVの完成相を表す［A 類］	－	(3-35)*王大爷卖书卖完了。(王お爺さんは本を売り切った。) (3-36)*老张吃饭吃过了。(張さんはご飯を食べた。)
Rが受動者の状態変化を表す[B 類]	±	(3-37)*他洗衣服洗干净了。(彼は服をきれいに洗った。) (3-38)*她画圈儿画圆了。(彼女は円を丸く描いた)

		(3-39)他养花养死了。(彼は花を育てているうちに、花が枯れてしまった) (3-40)他炒菜炒糊了。(彼は料理を焦がしてしまった。)
Rが動作主の状態変化を表す[C類]	＋	(3-41)老师吃饺子吃腻了。(先生はギョウザを食べ飽きてしまった。) (3-42)他喝啤酒喝上瘾了。(彼はビールを飲んでいるうちに、病みつきになってしまった)
Rが第三関与者の状態変化を表す[D類]	＋	(3-43)他讲笑话讲乐了所有人。(彼は冗談を言って、すべての人を笑わせた。) (3-44)爷爷砍柴砍钝了两把斧头。(祖父が芝刈りをしてしまうと、斧が二つとも切れ味が悪くなった。)
RがVに対する話者の評価を表す[E類]	＋	(3-45)他来学校来晚了。(彼は学校に来るのが遅かった。) (3-46)我买东西买贵了。(私は買い物をしたが、高かった。)

※上記の表における「＋」は生起する、「-」は生起しない、「±」はある条件のもとでのみ生起することを意味する。

上記の表から、VR 構造が動詞コピー構文に生起する傾向を以下のようにまとめることができよう。

(ⅰ)VR 構造における R が V の完成相を表す場合、動詞コピー構文には生起し難い。

(ⅱ)VR 構造における R が受動者の状態変化を表す場合、その状態変化は〈意外性〉を持つものであれば、動詞コピー構文に生起するが、〈意外性〉を持たなければ動詞コピー構文に生起難い。

(ⅲ)VR 構造における R が動作主の状態変化、第三関与者の状態変化及び動作行

為の結果に対する評価を表す場合、VR 構造は動詞コピー構文に生起する。

なぜ上記のような生起傾向を呈しているのかについては､次のように分析できる。

R が V の〈完成相〉を表す場合、V の表す動作それ自体の展開の仕方を表す。よって前項動詞Vが表す動作は個別的なものでなければならないことを意味する。これは、まず動作行為の〈多量性〉を含まれる動詞コピー構文の意味機能と矛盾するため、生起しないのである。また〈制御性〉の観点から見れば、動作主は自ら行う動作行為に対し、いつ頃終了させるかはある程度制御できるため、非制御的な事象を表すという動詞コピー構文の機能と整合性が低いのである。

VR 構造における R が受動者の〈＋意外性〉の状態変化を表す場合、意外的な結果は通常制御不可能なものであるため、動詞コピー構文に生起しうる。一方、もし受動者に〈－意外性〉の状態変化が生じる場合、動作主による〈制御性〉が強まると解釈される。例えば、“他洗衣服洗干净了”という文では､「服がきれいになること」は動作主が「服をあらう」目的であり、望む結果でもある。この場合、特別な事情がない限り、動作主が「服を洗う」という動作行為を遂行すれば、受動者に“干净(きれい)”という状態を引き起こせる。つまり、動作主が受動者に影響を及ぼす程度はかなり高いといえる。このような〈制御性〉が高い VR 構造は動詞コピー構文には生起し難いのである。

最後に、VR 構造における R が動作主の状態変化、第三関与者の状態変化及び動作行為の結果に対する評価を表す場合は、何れも動作主自身の意志によって制御できる結果ではないため、動詞コピー構文に生起できることになる。

3.5. 第 3 章のまとめ

以上の分析を図示すると、次のようになる。

【表 6】

VR 構造における R の限界化の仕方	VR 構造の 〈制御性〉の程度 （弱→強）	動詞コピー構文との 適合性 （低→高）
R が V の完成相を表す R が受動者の正常な状態変化を表す R が受動者の意外的な状態変化を表す R が動作主の主観的な状態変化を表す R が第三関与者の状態変化を表す R が V の結果に対する話者の評価を表す		

第４章　VR 構造の個別研究[15]

――〈完成相〉を表す VR 構造“V 完”、“V 过”、“V 好”を例に――

本論の第 2 章では、VR 構造が従属節レベル(“VR(了)的 N”構造)に生起する場合における“了”の生起条件について考察した結果、“了”の生起に VR 構造の下位カテゴリーにおける R の限界化の仕方の差異が関与することを明らかにした。続いて、第 3 章では、VR 構造が主節のうちの動詞コピー構文に生起する条件について検討した結果、やはり VR 構造の下位カテゴリーにおける R の限界化の仕方の差異が関与することを明らかにした。

以上は VR 構造の下位カテゴリー間に差異が存在しており、しかも、それぞれの統語機能に関与していることを確認したものである。しかしながら、同一の下位カテゴリーの成員の間にも限界化の仕方に差異があるのか、またこの差異は統語機能にいかに関与するのか、といった問題がまだ残っている。本章では、よりミクロな視点から中国語の VR 構造の具体例を幾つか考察することで、これらの問題について検討する。具体的には、第 1 章で述べた[A 類]――〈完成相〉を表す VR 構造の下位カテゴリーを考察の対象として取り扱う。

〈完成相〉を表す VR 構造には“V 完”, “V 过$_1$”, “V 好”, “V 着(zhao2)”, “V 住”, “V 见”などがある。これらの VR 構造は次のような点において、他の VR 構造と異なる。

(ⅰ) 使役義を持たない。

(ⅱ) R が主語や目的語とは直接かかわりなく、動詞 V の表す動作それ自体の展開の仕方を表している。

(ⅱ) R は他の VR 構造より文法化が進んでおり、〈完了〉を表すアスペクト接辞“了”に近い機能を有するため、“准时态助词(アスペクトに準ずる助詞)”或いは“第二次时态助词(二次的なアスペクト助詞)”と呼ばれている。

〈完成相〉を表す VR 構造は上述のような特殊性を持つため、多くの研究者は

[15] 本章は楊(2011, 2012)の議論を骨子として加筆・修正を加えたものである。

様々な視点から研究を行っている。そのうち、とりわけ“V 完”、“V 过 1”、“V 好”の 3 つの VR 構造に関する研究は多い(吕叔湘 1942/1982、王力 1943/1979、王松茂 1981、木村 1982 など)。それにもかかわらず、まだ解明されていない問題が残っている。本論では、“V 完”、“V 过 1”、“V 好”を代表例として取り上げ、三者の統語機能を再整理し、〈完成相〉を表す VR 構造の〈完成義〉、すなわち〈限界化〉がどのよう実現するのかという問題について検討を加える。

具体的には 4.1.では“V 完”と“V 过 1”の機能差異について考察する。続く 4.2.では“V 好”と“V 完”の意味機能の差異、とりわけ“V 好”の〈完成義〉が顕在化する条件について検討する。4.3 では三者の意味機能をまとめる。

4.1. “V 完”と“V 过 1”の機能の相違

“V 完”、“V 过 1”についての研究は盛んに行われてきた。とりわけ、“V 过 1”については、すでに数多くの研究が蓄積されている。しかし、“V 过 1”が具体的にどのような意味機能を有するか、そして“V 过 1”と“V 完”の意味機能の相違は何なのか、未だ説得力のある説は提出されていない。そこで、本章では“V 完”と対照しつつ、“V 过 1”の意味機能及びその生起条件を明らかにすることにより、両者の意味機能の相違について検討することを目的とする。

なお、中国語文法界では、動補構造“V 过”における“过”を、〈完成義〉を表す結果補語“过 1”と経験アスペクトを表す“过 2”に分ける学者が多い。両者は統語機能の側面において、その後にアスペクト接辞“了”(動詞或いは動補構造に直接後接する“了 1”)が付加し得るかどうかによって区別される。一方、両者を同一の形態素とみなすべきだと主張する学者もいる(吕叔湘 1980/1999、石毓智 1992 など)。本論では“过 1”と“过 2”とは二つの異なる形態素であるという立場をとる。以下においては議論の便宜上、従来の慣習に従い、前者を“过 1”、後者を“过 2”と表記することにする。本論では、このうち結果補語“过 1”のみを考察対象として取り扱う。また、方向補語の“过”も考察の対象に含めないこととする。

4.1.1. “V 完”と“V 过 1”の意味機能に関する先行研究と問題点

4.1.1 ではまず“V 完”と“V 过 1”の意味機能に関する先行研究を振り返って、そ

の問題点を指摘しておきたい。

4.1.1.1. 朴鐘漢(1997/2000)

朴鐘漢(1997/2000)は認知理論の観点から多義語である“过”を分析したものである。このうち“过$_1$”について、次の例(4-1)を挙げ、この例において“过$_1$”のみが生起するのは、「一定の時間及び空間的な経由過程」を表す連用修飾語の意味特徴にマッチするが、“完”は「単にできごとの終了を示す」からだと説明する。そして、このことから、「“V 过$_1$”は動作の完結を意味するとともに、その背後では動作の進行過程を含意している」と分析している。

(4-1) a.他们把原稿一页一页地看过了。(朴鐘漢 1997/2000)(一部表記を修正)
(彼らは原稿を一枚一枚目を通した。)
b.*他们把原稿一页一页地看完了。(朴鐘漢 1997/2000)
(彼らは原稿を一枚一枚見終わった)

しかし、その一方で、「経由過程」の意味が常に文脈上に現れるわけではないとし、次のような例文の場合は、「純然と動作の完結のみを表している」としている。

(4-2) 吃过了吗?(朴鐘漢 1997/2000)
(もうご飯を食べましたか。

更に、朴鐘漢(1997/2000)は“过$_1$”について、「語彙的な意味が虚化して動作の〈完結〉を表す働きをする。そして，完結したできごと全体をかたまりと認識するようになる」と整理する。

朴氏の説は、“过$_1$”の意味特徴について「一定の時間および空間的な経由過程」を表す連用修飾語との共起関係に注目するなど重要な指摘を含むものであるが、どのような場合に経由過程の意味が現れ、どのような場合に動作の完結のみを表すのかという問題は明らかにされておらず、“过$_1$”の意味特徴を十分に解明したものとは言えない。

なお、朴氏は“完”は単に出来事の終了を示すだけであり、“一页一页”などのよ

うな連用修飾語とは意味が整合しないため、共起できないとして、上記の例(4-1)bを非文としている。しかし、この例はとても自然な文である。例(4-1)bだけでなく、“完”は動作の進行過程の状態を表す連用修飾語と共起する例は他にも多く見受けられる。

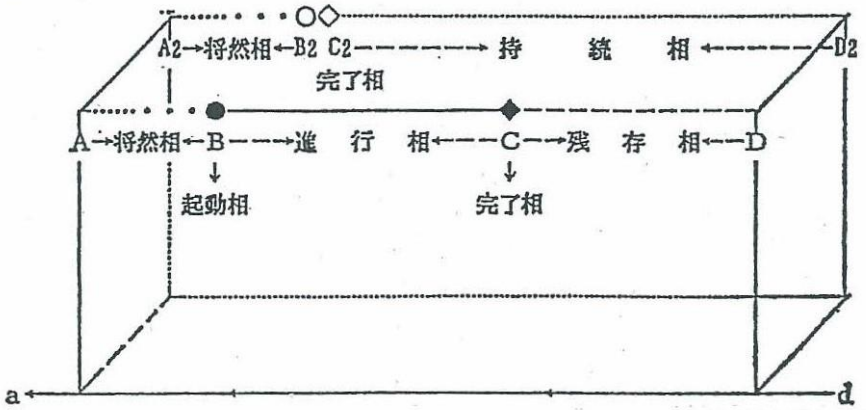
(4-3) 他一个字一个字地读完了《安妮日记》。
(彼は一字一字『アンネの日記』を読み終えた。)
(4-4) 老汉一笔一划地写完了诉状。
(老人は一画一画丁寧に訴状を書き終えた。)
(4-5) 他一字不漏地转达了妻子的话。
(彼は妻の話を一字も漏れずに伝えた。)
(4-6) 小妹一道题一道题地做完了习题集。
(妹は一問一問練習集の問題をやり終えた。)
(4-7) 妈妈含着泪水讲完了自己的身世。
(お母さんは涙ぐみながら、自分の身の上の話を言い終えた。)

上述の用例はいずれも自然な文である。そして、下線部の連用修飾語である“一个字一个字(一字一字)”、“一笔一划(一画一画)”、“含着泪水(涙ぐみながら)”はそれぞれ述語動詞“读完(読み終える)”、“写完(書き終える)”、“讲完(言い終える)”の進行状態を表している。よって、“完”は単に出来事の終了を示すだけではなく、動作の完成の一瞬を含め、動作の進行状態の完成を表すと考えられる。したがって、朴鐘漢(1997/2000)の説は説得力に欠けると言わざるをえない。

4.1.1.2. 朱継征(1999)

朱継征(1999)は朱継征(1993)に従い、アスペクトの概念を〈動相〉と呼び、動詞の時制を〈将然相〉、〈起動相〉、〈進行相〉と〈完成相〉に分けている。更に、朱継征(1999)は〈起動〉・〈進行〉・〈完成〉という三つの相からなる「線」状過程を持つ動詞を〈継続動詞〉と呼び、〈起動〉・〈進行〉・〈完成〉という三つの相が一つの「点」で重なる動詞を〈瞬間動詞〉と呼んでいる。そして、具体的な関連性について、朱継征(1999)は以下の図を用いて説明している。

【図２】



（朱継征 1999:120 より）

朱継征(1999)は「A2～C2 は瞬間動詞の過程を表す。A2～B2 は「将然相」であり、起動点 B2 と完成点 C2 がほぼ重なっている。C2～D2 は「持続相」を表す。図における B～C の過程は「線」の形をしているが、完成相 C はこの「線」状過程の「終点」として捉えられている。瞬間動詞の完成相 C2 は起動相 B2 と重なっているが、実際には、視点を変えれば継続動詞の完成相 C は起動相と重なる「点」として捉えられる場合もある」と分析する。また“V 完”と“V 过 $_1$”に関して、両者はともに動作の完成を表すが、次のような相違があると指摘する。すなわち、「“V 完”と“V 过 $_1$”の文法的用法は、動作の起動から完成までの過程をどのように捉えるかによって制約され、完成点を動作の起動から完成までの「線」状過程の〈終点〉として捉えた場合、“V 完”を用い、その過程を一つのまとまった「点」として捉えた場合、“V 过 $_1$”を用いる」と説明している。しかし、それによって説明できない用例も少なからずある。

(4-8) a.满满的一瓶酒精都蒸发完了。(朱継征 1999)

（一瓶のアルコールが全部蒸発した。）

b.*满满的一瓶酒精都蒸发过了。

(4-9) a.水桶里的水一滴一滴地漏完了。(朱継征 1999)

（水桶の中の水が少しずつ漏れてしまった。）

b.*水桶里的水一滴一滴地漏过了。

朱継征(1999)は例(4-8)と(4-9)について、「動作完了の物量を総括する状語の“都”と動作完了の様態を描写する状語の“一滴一滴”の介在によって、同様に動詞の起動から完了までの過程は「線」として捉えることになるため、“V 完”と共起できるが、“V 过 $_1$”とは共起できない」と分析する。しかし、連体修飾語の“都”や“一滴一滴”のような修飾成分が介在しない場合には、どのように使い分けるのか、明確な基準が朱継征(1999)においては見当たらない。また朱氏の解釈は例(4-8)と(4-9)については説得力があるようであるが、同じく動作完了の様態を描写する連用修飾語が生起する下記の例については、朱継征(1999)の説は合理的に説明できない。

(4-10) a.这些材料我们已经一页一页都看完了。
(これらの資料をわれわれはもう全部見終えた。)
b.这些材料我们已经一页一页都看过 $_1$了。
(これらの資料をわれわれはもう全部見た。)
(4-11) a.一桌子菜我一盘一盘全都吃完了。
(テーブルの上の料理を全部食べ終えた。)
b.一桌子菜我一盘一盘全都吃过 $_1$了。
(テーブルの上の料理を全部食べた。)

例(4-10)、(4-11)は例(4-8)、(4-9)と同じように、動作完了の物量を総括する連用修飾語(“都”、“全都”)と動作の様態を描写する連用修飾語(“一页一页”、“一盘一盘”)が文中に生起している。そして主語の“这些材料(これらの資料)”、“一桌子菜(一つのテーブルの料理)”はいずれも物量を表す。朱氏の結論に基づけば、例(4-10)と例(4-11)に生起する動詞が表す動作行為の起動から完了までの過程を「線」として捉えることになるため、いずれも“V 过 $_1$”と共起できないはずであるが、しかし、例(4-10)b と(4-11)b は問題なく成立する。

4.1.1.3. 張岩紅(2006)

張岩紅(2006)は連語の観点から“V完”と“V过$_1$”の意味機能の相違について以下のように主張する。[16](下記の【表 7】は張岩紅 2006 から引用)

【表 7】

“V完” ——— 出来事の運動終了の局面
　　└— 全体量の運動終了の局面

“V过$_1$” ——— 出来事の経過終了の局面
　　├— 部分量の経過終了の局面
　　└— 全体量の経過終了の局面

上記の表における「出来事」という用語について、張岩紅(2006)は「文中に数量の現れない「動詞＋客体」の関係である」とし、また「全体量」と「部分量」について[17]、「文中に数量の現れる「動詞＋客体」の関係である」と説明している。しかし、「運動終了」と「過程終了」という二つの用語の違いは何なのかについて、張岩紅(2006)には具体的な分析が見当たらないため、“V完”と“V过$_1$”の意味機能を十分に解明したとは言い難い。

また、張岩紅(2006)では、“V完”と“V过$_1$”がいずれも生起しうる文における両者のニュアンスの違いに注目し、前者は「部分量」を表す数量詞と共起できないのに対し、後者は「部分量/全体量」を表す数量詞と共起できると主張する。確かに、“V完”を用いる場合は、受動者の「全体量」が終了するニュアンスが含まれるのに対し、“V过$_1$”を用いる場合は受動者の「部分量」が終了するニュアンスが含まれる。とはいえ、“V完”と“V过$_1$”の生起は統語上数量詞の制約を受けると断言するのは妥当であろうか。例えば、張岩紅(2006)では、“V完”は「部分量」を表す数量詞と共起できないという主張を立証するために、根拠として、以下の例

[16] 張岩紅(2006)では“～完”、“～过$_1$”という表記を用いているが、本論では“V完”、“V过$_1$”と統一する。

[17] 張岩紅(2006)には「量」についての概念は動作動詞の受動者の量を指す。

を非文として挙げている。(以下の例(4-12)～(4-15)及び日本語訳は張岩紅 2006 から引用)

(4-12) *刚才吃完了点儿/几片/几口面包。
(4-13) 刚才吃过了点儿/几片/几口面包。
　　(さっきパンを少し/何枚か/何口か食べた。)
(4-14) *这本书我看完了一些/几页。
(4-15) 这本书我看过了一些/几页。
　　(この本を私は少し/何ページか読んだ。)

上記の例について、張岩紅(2006)は“点儿/几片/几口(少し/何枚か/何口か)”、“一些/几页(少し/何ページか)”などの不定量詞は受動者(パン、本)の一部の量を表すので、全体における終了の局面を表す“V 完”と矛盾し、同じ文に用いることができない。一方、“V 过 1”は受動者であるパンか本の数量を終えたということで、全体にわたる部分量の終了の局面を表し、文としては成立すると分析している。

しかし、張氏が「部分量」として捉えた“点儿/几片/几口(少し/何枚か/何口か)”、“一些/几页(少し/何ページか)”などの不定量詞に関しては、受動者の「全体量」、つまり、動詞“吃(食べる)”や“看(読む)”の受動者そのものとして捉えても全く不自然ではない。例(4-12)、(4-14)はいずれも成立する。仮に、“V 完”は「部分量」を表す数量詞と共起できないという主張が正しいならば、下記の例について説明できないことになる。

(4-16) 我吃完了一个苹果。
　　(私はリンゴを一個食べ終えた)
(4-17) 十个苹果中我吃完了一个。
　　(十個のリンゴのうち、私は一つを食べ終えた)

上記の例(4-16)における“一个(一個)”は通常受動者“苹果(リンゴ)”の「全体量」と捉えられるのに対し、例(4-17)における“一个”は受動者“苹果”の「全体量」ではなく、「部分量」と捉えるのが自然である。張岩紅(2006)の説に従えば、例(4-17)

は非文法的であるはずであるが、実際はそうではない。

以下、両者の機能の相違を明らかにしていきたい。

4.1.2. 本論文の分析

4.1.2.1. “V完”と“V过$_1$”の統語機能の相違

前述したように、VR構造の“V完”と“V过$_1$”は統語機能の面、及び意味機能の面において、どのような相違点を持つのか、まだ不明な点が残っている。本論文は両者の相違に着目し、まず以下の2点を取上げ、両者の統語機能の相違を考察してみたい。

4.1.2.1.1.“得”または“不”の挿入の可否

第1章で述べたように、VとRの間に“得”または“不”を挿入することによって、可能・不可能の意味を表す可能補語構造に転換することができる。“V完”と“V过$_1$”はどうであろう。

(4-18) a.你写的报告我看完了。

（あなたが書いたレポートをもう読み終えた。）

b.你写的报告我看得完。

（あなたが書いたレポートは読み終えることができる。）

c.你写的报告我看不完。

（あなたが書いたレポートは読み終えることができない。）

(4-19) a.你写的报告我看过$_1$了。

（あなたが書いたレポートをもう読んだ。）

b.*你写的报告我看得过$_1$。

c.*你写的报告我看不过$_1$。

例(4-18)では“V完”は“得”の挿入によって、可能補語構造の肯定形の“看得完(読み終えることができる)”となり、また“不”を“完”の前に置くと、可能補語構造の否定形の“看不完(読み終えることができない)”となる。一方、“V过$_1$”の場合、例(4-19)bと(4-19)cに示すように、“得”または“不”を挿入しても、可能・不可能の

意味を表す可能補語に転換させることができない。たとえ“得”または“不”が“过 1”と結合できるとしても、それは、〈完成義〉を表す結果補語“过 1”ではなく、〈方向義〉を表す方向補語の“过”である。例えば、以下のような例がそうである。

(4-20) 他的饭量真大,我吃不过他。
(彼の食べる量は本当に多い、私は彼ほど食べられない。)
(4-21) 你口才好,肯定说得过他。
(君は弁が立つ、きっと彼を説得できるだろう。)
(4-22) 那件事我还是想拜托你,小王跟我说她想做,但我信不过她。
(例の件はやはり君に頼みたいのだ。王さんは「私にやらせてください」といっていたが、彼女のことを信頼できない。)

以上の 3 例の“过”はいずれも〈完成義〉を表す“V 过 1”ではなく、方向補語の“过”とみなすべきである。

4.1.2.1.2.“V 完”と“V 过 1”の否定形の相違

VR 構造の否定形は、V の前に、否定副詞の“没”(或いは“没有”)を付加することによって作られる。“V 完”と“V 过 1”についてみてみよう。

(4-23) a.我吃完饭了。
(私はご飯を食べ終えた。)
b.我没吃完饭。
(私はご飯を食べ終えていない。)
(4-24) a.我吃过 1饭了。
(私はご飯を食べた。)
b.*我没吃过 1饭。

例(4-23)b の下線部は(4-23)a の下線部の否定形であるということに関しては疑問がないようであるが、しかし例(4-24)の b は a の否定文ではなく、かつ非文

である。[18]

以上の分析によって、“V 完”と“V 过 $_1$”の統語機能の相違点が明らかになった。すなわち、“V 完”は典型的な〈完成義〉を表す VR 構造であるのに対し、“V 过 $_1$”は“V 完”とは異なる特殊性があることを確認した。

次の 4.1.2.2 では意味機能の側面から“V 完”と“V 过 $_1$”を比較してみたい。

4.1.2.2. “V 完”と“V 过 $_1$”の意味機能の相違についての仮説

本論文は、“V 完”と“V 过 $_1$”の意味機能の相違については、次のように仮説を立てる。すなわち、“V 完”は「一つの動作・行為の内的展開の全過程が終結する局面」を表し、“V 过 $_1$”は「発話のコンテクストによって規定される上位イベントを構成する下位イベントのひとつが実現する局面」を表す。

この仮説について、「発話のコンテクストにおいて規定される上位イベント」が語用論レベルで規定される場合と、構文論レベルで規定される場合に分けて検証を試みる。

4.1.2.2.1. 語用論レベルで規定される場合

本稿では、柴谷他(1982)に従って、語用論を「言葉の使い方、つまり発話とコンテクストおよび伝達目的の関係を取り扱う分野である」のように定義する。言語の使用条件は構文上の文法規則だけに制約されるのではなく、コンテクストや場面に大きく依存するのである。以下はいくつかの用例を考察し、“V 完”と“V 过 $_1$”がそれぞれ生起するコンテクストの特徴を明らかにする。

4.1.2.2.1.1. “V 完”は生起するが、“V 过 $_1$”は生起しないコンテクスト

以下の例を見てみよう。

(4-25) A:你还在吃啊？大家都在等你呢。

（まだ食べているの？みんなあなたのことを待っているのに。）

B_1:等我吃完这两口就去啊。

[18] 同じような考察は孔令达(1995)にもみられる。

（これを食べてからすぐ行くよ。）

B_2:#等我吃过$_1$这两口就去啊。

(4-26) A_1:刚刚看你进食堂，这么快就吃完了？

（今食堂に入ったところを見たが、もう食べ終わったの？）

A_2: #刚刚看你进食堂，这么快就吃过$_1$了？

B_1:那还不快啊？几口就吃完了。

（それは早いよ、何口で食べ終えたのだから。）

例(4-25)では、次のような会話場面が想定される。すなわち「A は多くの人と B を待っていたが、B はなかなかこない。そこで、A が B の様子を見に行くと、B はまだ食事中であった」といった会話場面である。B は返事する時、無論自分の“吃(食べる)”という動作がすでに A に見られていることわかっている。つまり、両者とも動作“吃”が「起点」からスタートして、現時点で「進行中」にあることを意識した上で発話している。A に“吃”という動作をいつ終結させるかという返事を求められている B は、“V 完”を用いて動作行為の内的過程の終結の局面を明示するしかない。一方、“V 过$_1$”は「発話のコンテクストによって規定される上位イベントにおける下位イベントのひとつが実際に実現した」か否かに注目するため、B_2 はこの文脈において不適格となる。

そして例(4-26)も同様の状況だと考えられるであろう。A は B が食堂に入っていたところを目撃していることから、B の動作“吃(食べる)”がすでに開始していると予想していた。A は食堂以外の場所で再び B と出合った時、B の“吃”という動作の展開の終結が早いということに驚いたのである。よって、“V 完”を用いて質問するのが最も自然であろう。また、“快(早く)”という修飾成分にも注目されたい。“快”は動作展開のスピードが速いという意味を表す。これは“V 完”の動作展開の終結の局面を表す機能と合致するため、“V 完”と共起することが可能である。一方、“V 过$_1$”は動作行為の内的展開に焦点をあてるものではないため、“快”とは共起し難い。よって、“很快吃完(早く食べ終えた)”という文は成立するが、“很快吃过$_1$”は非文となる。

要するに、例(4-25)と例(4-26)のテクストにおいて、「語用論的に規定される上位イベント」と「上位イベントを構成する下位イベント」という二重イベント構

造が成立しないため、“V 过 $_1$”の生起条件が満たされず、“V 过 $_1$”が生起しないのである。

4.1.2.2.1.2. “V 过 $_1$”は生起するが、“V 完”は生起しないコンテクスト

以下の用例を見てみよう。

(4-27) A:近两年的气候很不正常。去年五月份樱花才开,今年怎么样?
(近年の気候は異常よね。去年は五月になってやっと桜が咲いた。今年はどうだった？)
B$_1$:今年还比较正常,四月份就开过$_1$了。
(今年はわりと例年通りで、四月にもう咲いたよ。)
B$_2$:#今年还比较正常,四月份就开完了。

(4-28) A:又到冬天了,这一年四季冬天最没意思,没什么可看的。
(また冬が来たね。一年の季節の中で、冬が一番おもしろくない。見るべきものがなにもないから。)
B$_1$:是啊,这樱花也开过$_1$了,桃花也开过$_1$了,红叶也看过$_1$了,……不过,还有梅花没开呢。
(そうですね。桜も咲いたし、桃の花も咲いたし、紅葉も見た。…でも、梅はまだだよ。)
B$_2$: #是啊,这樱花也开完了,桃花也开完了,红叶也看完了,……不过,还有梅花没开呢。

例(4-27)は具体的なコンテクストが設定された例文である。ここでは“樱花开”(桜が咲く)という上位イベントはコンテクストによってすでに規定されている。A と B は“樱花开”という話題について会話のやり取りを行っている場面である。発話者 A は例年の桜の咲く時期を知っており、去年の桜の咲いた時期は気候異常のため例年より遅かったのだと考え、今年は例年と比べ、桜の咲いた時期が早かったのか、遅かったのかという新情報を求めている。つまり、毎年「桜が咲く」という上位イベントにおいて、「今年の桜が咲く」ということが、ほかの下位イベント(「去年の桜が咲いたこと」など)と比べ、実現した時間が早かったのか遅か

ったのか、ということを尋ねている。動詞“开(咲く)”がいつ開始し、いつ終結するかといった動詞の内的展開についての情報は求められていない。

会話のやり取りの「関係性の原則」によれば、人々が話をする時には「当面の状況と直接関連性のあることを話さなければならない」ため、[19]B はこの上位イベントにおける下位イベント――「去年の桜の咲いた時期」、「今年の桜の咲いた時期」などの流れを念頭に入れて応答することによって、はじめて語用論的に適格となる。前述のように、“V 过 $_1$”は「発話のコンテクストによって規定される上位イベントを構成する下位イベントのひとつが実現する局面」を表す意味機能を持つため、上記のコンテクストにおいては生起する。一方、“V 完”は「一つの動作・行為の内的展開の全過程が終結する局面」を表しており、コンテクストによって規定される上位イベントにおける位置づけではなく、一つの動詞の内的展開に焦点を当てているため、“V 完”が生起し難い。しかし、次のようなコンテクストにおいては、“V 完”と“V 过 $_1$”の生起状況は逆転する。

(4-29) A:我想去北海道看樱花，什么时候去比较合适？
(私は北海道に桜を見に行きたいです。いついったらいいですか。)
B_1:北海道的樱花一般四月中旬开始开，五月初就开完了。所以你四月底来最好。
(北海道は大体四月の中旬から咲き始め、五月の初めぐらいに咲き終わります。ですから、四月の末ごろ来るほうが一番いいと思います。)
B_2:#北海道的樱花一般四月中旬开始开，五月初就开过 $_1$ 了。所以你四月底来最好。

上記の例では、A は北海道の桜の満開の時期について聞いている。つまり、“开(咲く)”という動作の“开始开(咲き始める)”から“开完(咲き終わる)”までの展開過程における「満開」の時期を尋ねている。この場合、“开(咲く)”という動作の内部の展開に焦点が置かれているため、“开完”を用いて返答するのが適切であるが、“开过 $_1$”を用いて返答すると不適格となる。

[19] 柴谷方良等(1982:130)を参照

例(4-28)は例(4-27)と似たようなコンテクストである。つまり、A は「一年の四季における見るべきもの」という上位イベントを会話の主題として持ち出した。B は A から得た情報を発話の起点とし、主題の一貫性を保ちながら、返答しなければならない。つまり、「一年の四季における見るべきもの」という上位イベントにおける幾つかの下位イベント(四季の自然の景色)の関連性を認めたうえで、時間の順序に沿って、どんな自然の景色が見る価値のあるのか、を新情報として伝達することがコンテクストによって要求される。その下位イベントの一つが実現したという意味を表すには、“开过 $_1$”を用いるのが適切であろう。一方、“开完”が生起する場合は「コンテクストによって規定されている上位イベント」が想定しにくく、単に前置された動詞“开”が表す動作の内的展開の終結の局面を表すため、“开完”で応答すると不適格となる。

続いて以下の例を見てみよう。

(4-30) a.*石油烧过 $_1$了。(石油は燃やした)

b.他试了很多办法。木头也烧过 $_1$了，煤也烧过 $_1$了，石油也烧过 $_1$了，还是没有找到一种理想的燃料。

(彼はいろんな方法を試した。木も燃やしたし、石炭も燃やしたし、石油ももやしたが、理想の燃料はやはりみつからなかった。)

(4-31) A:吃面包啊？你没吃晚饭吗？

(パンを食べているの？晩御飯食べていないの？)

B_1:吃过 $_1$了，可是肚子又饿了，还想吃。

(食べたけど、またおなかがすいたから、また食べたくて。)

B_2:#吃完了，可是肚子又饿了，还想吃。

例(4-30)a と(4-30)b を比較されたい。前者は単文である。受動者“石油(石油)”が認知的には細分化できないとき、一つのまとまりとして捉えることになる。そうすると、動作“烧(燃やす)”はひとつの〈持続性〉を持つ動作行為とみなされ、「起点」から「終点」まで、内的展開が如何に終結するかが注目される。そのような〈終

結〉の意味を表すには、通常“完”との共起が要請される。[20]一方、(4-30)b は意味的につながりのある複数の文から構成されるテクストである。このテクストにおいては、一つの上位イベント(理想の燃料を探すこと)におけるいくつかの下位イベント(順序によっていろんな方法を試すこと)が行われることが規定されている。この場合には、動作“烧(燃やす)”の展開の在りかたに関してはすでに関心の対象外であり、“烧石油(石油を燃やすこと)”がたくさんの方法の一つとして捉えられる。そうすると、“完”の意味機能との整合性が低いため、共起できなくなる。一方、“V 过 $_1$”は動作の展開ではなく、各下位イベント間のつながりが意識されつつ、そのうちの一つのイベントの実現の局面を表すため、“V 过 $_1$”は生起しうる。

例(4-31)は、B がパンを食べているところを見た A が、「晩御飯を食べたか食べていないか」が気になり、B に確認する場面である。「晩御飯」はほかの一日の出来事と同じように、決まった時間帯において済ませるのが一般常識である。言い換えれば、一日の日常的生活行動が一つの上位イベントとして捉えられ、朝からの具体的な生活行動(例えば、顔を洗う、歯を磨く、朝ごばんを食べる、昼ごはんを食べる、晩御飯を食べる、寝るといった動作行為)が下位イベントとして行われると認識される。その下位イベントの一つの実現の局面を表す際には、“V 过 $_1$”を用いるのが適切であろう。例(4-31)について具体的にいうと、「晩御飯を食べること」が一日の生活行動における下位イベントのひとつとして捉えられる。A からすれば、「晩御飯を食べる」時間はすでに経過している。発話時間において、「晩御飯を食べること」と同じく下位イベントとなる次の行動(寝ることなど)の実行に移るべきだと思っている際に、B がパンを食べているところを見た。当然ながら、A は驚くと同時に疑問が生じる。よって「晩御飯を食べていないの？」と質問する。それに対して、B はもちろん A が疑問に思う原因がわかっている。従って、B は“吃过了”(食べた)と返事してから、“肚子又饿了”(またおなかがすいた)という理由を説明することによって会話を成立させる。しかし、もしもこの場合、“吃完了”(食べ終えた)と返答すれば、動作“吃”の内的展開(いつ食べ始めたか、どのように食べるか、いつ食べ終わったかといった“吃”の内的展開)に焦点を置くことになるため、A の発話の焦点とはずれが生じる。よって、発話のやり取りが

[20] 構文レベルにおいては、“V 过 $_1$”の生起はほとんど名詞成分の性質と関与する。この点については、詳細な分析は 4.1.2.2.2.1.に譲る。

不自然となり、B_2は不適格となる。

以上取り上げた用例はいずれも具体的な発話のコンテクストが設定されている。このコンテクストにおいて、当該の文が「コンテクストに規定される一つの上位イベントにおける下位イベントの一つ」として捉えられる場合、“V 过 $_1$”が生起する。

上述した「語用論的に規定される上位イベントと下位イベント」というのは次のような状況をも含む。

(4-32) A:吃了吗？
（食べましたか？）
B:吃过 $_1$了。
（食べました。）

この会話においては、具体的なコンテクストはないにも関わらず、“V 过 $_1$”が生起している。これは、会話の双方が同様な生活経験によって生じた共有の認識に基づき、長い生涯において「食事をすること」を上位イベントとして、そのうちの一回の「食事すること」を下位イベントとしてとらえるからである。この場合、下位イベントのうちの一つが実現する局面を表すには、“V 过 $_1$”を用いるのが適切であろう。なお、郭春贵(1988:86)が指摘する「“V 过 $_1$”の主題は既知の情報(日常生活における規則的な動作を含む)でなければならない」という点についても、上の例と同様に分析できるであろう。すなわち、主題が既知の情報である場合、上位イベントと下位イベントが容易に想起されやすいため、“V 过 $_1$”が生起しやすくなるということである。

4.1.2.2.2. 構文レベルで規定される場合

4.1.2.2.2.1.“V 完”、“V 过 $_1$”と名詞成分の性質の関与性

“V 完”、“V 过 $_1$”がいずれも生起する場合に、R が意味的指向している対象の性質との関与性について考察してみよう。

(4-33) a.满满的一瓶酒精都蒸发完了。(朱継征 1999:120)

（一瓶のアルコールが全部蒸発した。）

b. *满满的一瓶酒精都蒸发过$_1$了。

(4-34) a.水桶里的水一滴一滴地漏完了。（朱継征 1999:120）

（桶の中の水が少しずつ漏れてしまった。）

b.*水桶里的水一滴一滴地漏过$_1$了。

(4-35) a.一桌子菜我一盘一盘全都吃完了。

（テーブルの上の料理は一皿一皿全部食べ終えた。）

b.一桌子菜我一盘一盘全都吃过$_1$了。

（テーブルの上の料理は一皿一皿全部味見した。）

(4-36) a.这些材料我们已经一页一页都看完了。

（これらの資料は我々はもう一ページ一ページ読み終えた。）

b.这些材料我们已经一页一页都看过$_1$了。

（これらの資料は我々はもう一ページ一ページ読んだ。）

朱継征(1999)が挙げている例と筆者が挙げている例は一見非常に似ているようであるが、実際には重要な違いがある。例(4-33)では、結果補語“完”と“过$_1$”が意味的に指向している対象は“一瓶酒精(一瓶のアルコール)”であり、それは再分割のできないものであるため、ひとつのまとまりとしてしか捉えられない。そうすると、“蒸发”という動作について、その一部分を取り出すことは認知的にあり得なくなるため、ひとつの動作行為と認知し、その内的展開の全過程に焦点を置かねばならない。また、例(4-34)の“水桶里的水(水桶の中の水)”も、それぞれ独立する部分によって構成される総合体と捉え難いため、一つのまとまりと捉えることとなる。

一方、例(4-35)では“完”と“过$_1$”が意味的に指向している“一桌子菜(一つのテーブルの料理)”と例(4-36)の“这些材料(これらの資料)”に関しては、一つのまとまりとして捉えることが可能であるし、また細分化することも可能である。一つのまとまりとして捉える場合、動作“吃(食べる)”或いは“看(読む)”もまたひとつの〈持続性〉を持つ動作行為とみなされ、起点から終点まで、内的展開が如何に終結するかが注目されているため、“V 完”が生起する。

また、例(4-35)と例(4-36)における名詞成分が表す対象を細分化してそれぞれ

独立する部分として捉えることも可能である。前者についていえば、“麻婆豆腐(マーボー豆腐)、青椒肉丝(チンジャオロース)……”に分割できる。後者についていえば、“資料 1、資料 2……”と細分化することが可能である。関連対象を細分化できるということは、本来一つである上位イベントをいくつかの下位イベントに分けて実現できるということを意味する。(4-35)を例にとると、“吃一桌子菜(一つのテーブルの料理を食べること)”という一つ上位イベントは“吃麻婆豆腐(マーボー豆腐を食べること)”、“吃青椒肉丝(チンジャオロースを食べること)”、“吃八宝菜(八宝菜を食べること)”など、少なくとも二つ以上の下位イベントに分けて実現できる。また、各下位イベントの間は全くかかわりがないというわけではない。必ず一つの上位イベントの枠におさまっており、順次に実現していく。そうすると、一つの下位イベントと他の下位イベントとの間につながりが生じ、下位イベントによって構成される上位イベントが成立する。この時、動詞“吃”の内的展開ではなく、下位イベントが実現するか否かというところに焦点が当てられる。ゆえに、「一つの上位イベントを構成する下位イベントのひとつが実現する局面」を表す“V 过 1”とは共起できる。ここで強調せねばならないことが一つある。それは〈実現〉と〈終結〉は意味が違うということである。〈終結〉の場合、動作が開始から終結までの過程に沿って進行しなければならない。つまり、動作の終点まで辿りつかないと〈終結〉とは解釈できない。しかし、〈実現〉というのは動作が発生した時点からもう「実現した」と言える。例(4-35)について、具体的にいうと、動作が発生した時点から、たとえ“吃一口(一口食べる)”であっても、“吃过(食べた)”と言えるが、“吃完(食べ終えた)”とは言えない。従って、例(4-35)a は「料理を全部食べ終えた」という意味を表すのに対して、(4-35)b は、「料理をすこしずつ味見をした」という意味合いとして捉えられることが多いという現象については、以上の分析によって説明できるだろう。例(4-36)も同じように分析することができる。すなわち、“这些材料(これらの資料)”が細分化された後、もともと一つの上位イベントである“看这些材料(これらの資料を読むこと)”は“看材料 1(資料 1を読むこと)”、“看材料 2(資料 2を読むこと)”など、更に細かい下位イベントに分けて実現することができる。細分化されたどの部分でも“看这些材料(これらの資料を読むこと)”という上位イベントを構成する一つの下位イベントとして捉えることができるため、“过 1”と共起できる。

4.1.2.2.2.2.動作の内的展開過程における状態を表す連用修飾語が生起する場合

以下の用例を見られたい。

(4-37) a.女儿含着泪水读完了这本书。

(娘は涙ぐみながらこの本を読み終えた。)

b.*女儿含着泪水读过了这本书。

(4-38) a.山西省政协主席郭怀玉流着泪听完了报告。

(山西省政協主席郭懐玉は涙を流しながら演説を聴き終えた。)

b.*山西省政协主席郭怀玉流着泪听过了报告。

(4-39) a.(她)终于以顽强的意志和高度的责任感坚持站完了这班岗。

(彼女は強い意志と強い責任感を持って最後まで歩哨に立ちつづけた。)

b.*(她)终于以顽强的意志和高度的责任感坚持站过了这班岗。

(4-40) a.家住安定门的 57 岁的张大娘由女儿扶着看完了升旗。

(安定門に住んでいる 57 歳の張ばあさんは娘の手に支えられながら、国旗の掲揚式を見終えた。)

b.*家住安定门的 57 岁的张大娘由女儿扶着看过了升旗。

(4-41) a.一口气读完了《西游记》。

(一息に『西遊記』を読み終えた。)

b.*一口气读过了《西游记》

(4-42) a.好不容易看完了这本小说。

(ようやくこの小説を読み終えた。)

b.*好不容易看过了这本小说。

例(4-37)～(4-42)には、一つの動作の内的展開の過程中の進行状態(どのような状態を伴うのかということ)を表す状態状語が現れている。例(4-37)の“含着泪水(涙ぐみながら)”は“读(読む)”という動作の進行状態を表し、例(4-38)の“流着泪(涙を流しながら)”は“听(聞く)”という動作の開始から終結までの進行状態を表す。例(4-39)の“以顽强的意志和高度的责任感坚持(粘り強い意志力と強い責任感を持つ)”は“站岗(歩哨に立つ)”という事象の開始から終結までの状態を表す修飾成分である。そして、例(4-41)の“一口气”は“读”という動作の展開が終結するまでの

状態を表す。いずれも「動作の内的展開」に焦点が当てられている。このように、「一つの動作行為の進行状態」のみを表す文においては、「上位イベント―下位イベント」が構成され難いため、“V 过 1”は生起し難い。それとは対照的に、“V 完”は「ひとつの動作行為の内的展開の全過程が終結する局面」を表すため、展開過程中の状態を表す連用修飾語と共起しうる。

4.1.2.2.2.3.動作の「量」を表す文法成分が生起する場合

朱德熙(1982:79)によれば、動作の量は、動作の持続時間からみることができれば、動作の繰り返される回数からみることもできる。前者は「時量」と呼ばれ、後者は「動量」と呼ばれる。[21]本論は上述の「時量」と「動量」を表す文法成分が文中に生起する用例について考察してみたい。

まず、「時量」を表す文法成分が生起する用例を見られたい。

(4-43) a.一顿饭花了半个小时才吃完。
(30 分もかかってご飯を食べ終えた。)
b.*一顿饭花了半个小时才吃过。

(4-44) a.《红楼梦》三天就看完了。
(『紅楼夢』は 3 日間で読み終えた。)
b.*《红楼梦》三天就看过了。
(『紅楼夢』は 3 日間で読み終えた。)

例(4-43)と(4-44)にはそれぞれ“半个小时(30 分)”と“三天(3 日間)”いわば「時量」を表す文法成分が生起している。動作行為“吃(食べること)”と“看(見ること)”が発生した時点から終了した時点までの所要時間を表す。例に示されるように、「持続時間量」を表す文法成分が生起する場合、“V 完”は生起しうるが、“V 过 1”は生起し難い。理由については、次のように考えられる。“V 完”と“V 过 1”は両者とも動作の〈完成〉の意味を表すが、しかし具体的な意味機能が異なる。前述のように“V 完”は、「動作行為の内的展開の全過程の終結の局面」を表す。つまり、動作

[21] 原文は次の通りである。「“所谓动作的量可以从动作延续的时间长短来看，也可以从动作反复次数的多少来看。前者叫做时量，后者叫做动量。”」

動詞が実現したあと、更に展開してゆき、最後に終結するまでの全過程を表す。この特徴は「30分」や「3日間」などのような動作行為の持続時間を表す「時量」の意味と合致するため、文が成立する。一方、“V过$_1$”は、「動作の内的展開」ではなく、「語用論的に規定される上位イベントを構成する下位イベントのひとつが実現する局面」を表す。持続時間量を表す成分が生起する文においては、「上位イベント―下位イベント」が成立し難いため、“V过$_1$”は「時量」を表す文法成分と共起し難いである。

続いて動作が繰り返される回数、いわば「動量」を表す文法成分が生起する場合を考えてみたい。次の例を見てみよう。

(4-45) a.这本小说我看过一遍了。
（この小説は一回読んだ。）
b.这本小说我看完一遍了。
（この小説は一回読んだ。）
(4-46) a.这本小说我看过两遍了。
（この小説は二回読んだ。）
b.*这本小说我看完两遍了。
（この小説は二回読んだ。）

上記の2例に示すように、動作の回数を表す数量補語が“一遍”である場合に、“V完”と“V过$_1$”はいずれも成立するが、“两遍”の場合、“V过$_1$”とは共起するが、“V完”とは共起し難い。理由は次のように考えられる。“V完”は「一つの動作行為の起点から終点までの内的展開過程」に焦点が当てられているため、同じ動作の繰り返しを表す文法成分とは相性が悪い。よって、“一遍”とは共起するが、“两遍”とは共起し難いのである。それと対照的に、“V过$_1$”は、上位イベントを構成する下位イベントの成立を前提とし、その「下位イベントのひとつが実現する局面」を表すため、動作の〈重複性(反復性)〉という意味特徴と矛盾しない。ゆえに、“V过$_1$”は“两遍”と共起しうるのである。

4.1.3. まとめ

本論は 4.1 において、〈完成相〉を表す VR 構造“V 完”と“V 过 $_1$”を考察の対象として、両者の統語機能と意味機能の相違について考察した。結論は以下のようにまとめられる。

両者は動作行為の〈完成〉を表す点において共通しているが、統語機能においては、“过 $_1$”は“完”とは異なる特徴を持つ。そして意味機能の面においては、“V 完”は「一つの動作・行為の内的展開の全過程が終結する局面」を表すのに対し、“V 过 $_1$”は「発話のコンテクストにおいてに規定される上位イベントを構成する下位イベントのひとつが実現する局面」を表す。すなわち“V 过 $_1$”の生起条件は語用論レベルで規定されていることになり、「生起条件の語用論志向」という特殊性が明らかになった。

続く 4.2 において同じく〈完成相〉を表す“V 好”も視野に入れ、“V 完”との対照を通じて、“V 好”の〈完成義〉の顕在化条件について検討していく。

4.2. “V 好”と“V 完”の機能の相違

従来の研究において、“V 好”の“好”は、しばしば動作行為の〈完成〉を表す動相標識(phase marker)のひとつとされてきた。しかし、藤田(1993)、鲁晓琨(1995)などが指摘するように、“V 好”は単に〈完成義〉のみではなく、いわゆる〈評価義〉(動作行為が望ましい状態に達することを表す意味」をも有している。[22]しかし、“V 好”における〈完成義〉と〈評価義〉は、どのような関係にあり、それぞれどのような文法条件のもとで顕在化するのかという問題については、未だ明らかにされてない。

---

[22] 鲁晓琨(1995)にも言及されているが、〈評価義〉を表す“V 好”の否定形は“没 V 好”であるのに対し、〈完成義〉が顕在化する“V 好”の否定形は“还”“没 V 好(呢)”などのような副詞や語気助詞の付加が必要である。鲁晓琨(1995)における以下の 2 例を見てみよう。

(ア) a. 晚饭没做好，菜都咸了。〈評価義〉
(晩御飯は出来が悪かったので、おかずが全部塩辛かった。
b. 晚饭还没做好(呢)，你快写作业吧。〈完成義〉
(晩御飯はまだできていないよ、あなたは早く宿題をやりなさい)

このように、〈完成義〉が顕在化する場合、〈評価義〉の場合と異なる否定形式を有するため、完全ではないながらも、すでに〈評価義〉から独立しつつあると考えられる。よって、〈評価義〉と〈完成義〉を区別して論ずる言語学的根拠があると考える。

本節では先行研究を踏まえる上で、“V 完”と比較しながら、“V 好”の有する〈完成義〉の顕在化条件について検討し、更に“V 好”と“V 完”の機能差異を明らかにすることを目的とする。

4.2.1. “V 好”の〈完成義〉の顕在化条件に関する先行研究と問題点

“V 好”の意味機能については、1980 年代に出版された多くの文法書(吕叔湘 1980/1999、刘月华他 1983/2001、刘珣他 1986)において、〈完成義〉のみを有する説と、〈完成義〉と〈評価義〉両方を有する説が見られる。〈完成義〉と〈評価義〉両方を表す説の中には、両者の関係について、「同時に存在する」というものと、「〈評価義〉を表すが、条件によっては〈完成義〉を表すこともある」というものの二つの見解がある。しかしながら、〈完成義〉と〈評価義〉がどのような文法条件のもとで顕在化するのかという問題については、いずれも明確には言及されていない。

90 年代以降、研究者の間では“V 好”は〈完成義〉だけではなく、〈評価義〉をも表すという点において、意見が一致するようになり、そして両者の統語的使用条件の異同を究明することが研究の中心となっている。本論は、まずその中の代表的な論考である藤田(1993)と鲁晓琨(1995)という二つの先行研究を取り上げ、それぞれの問題点を指摘しつつ、論を進めてゆく。

4.2.1.1.藤田(1993)

藤田(1993)は“V 好”を「動作行為の結果の出来不出来」を表すものと、「終わる、完成する」という意味に強く傾くものに二分している。そのうえ、“V 好”の意味的ニュアンスと統語的特徴との関係にも注目して、以下の三点を指摘する。

(ⅰ)結果の出来不出来を表す“好”は、“V 得好”・“V 不好”の可能形をとることが多い。一方、〈完成〉を表す場合、“V”と“好”の間に“得/不”が入る例が少ない。

(ⅱ)時点・時量を表す語が“V 好”に前置されると「～し終わる」という意味に強く傾く。

(ⅲ)〈完成義〉に重点が置かれる場合、次のような文型をとり得る。ひとつは、受動者が文頭に置かれる場合であり、このとき、“V 好了”という形式をとり、

意味的には被動文となる。もう一つは、受動者が動詞の後ろに来る場合であり、このとき受動者に数量詞がつく例が目立つ。

しかし、後で述べるように、藤田(1993)の上記の指摘はあくまで傾向にすぎず、〈完成義〉を表す“V 好”が生起している文は必ずしも上述の統語的特徴を持つとは限らない。

4.2.1.2.鲁晓琨(1995)

鲁晓琨(1995)は刘珣等(1986)の分類方法に従って、“好”を 2 種類に分けている。そのうち、「動作が望ましい状態に達すること」を表すものを“好(1)”とし、「動作の完成」を表すものを“好(2)”と呼んでいる。更に両者を区別する手掛かりとして、鲁晓琨(1995)は以下の 6 つの文型を提示している。

A.受動者＋“V 好(2)”了
B.動作主＋把＋受動者＋“V 好(2)”了
C.動作主＋“V 好(2)”了
D.動作主＋“V 好(2)”了＋受動者
E.時間詞＋“V 好(2)”
F.動作行為の順序を表す文(ただし、動作行為によって新たな事物が現れる場合に限られる)

鲁晓琨(1995)は上記の 6 つの文型に生起する“V 好”における“好”は〈完成義〉を表すと主張するのである。上記の分析は〈完成義〉と〈評価義〉を区分する直観的な手がかりを提示したが、しかし、上述のような統語的形式に基づく分析には限界がある。次の例を見てみよう。

(4-47) 我改好这两篇稿子就回去，你再等一会儿。
(私はこの 2 本の原稿を修正し終えたら、すぐ帰るので、もうすこし待っていて。)
(4-48) 老王花了毕生的精力，终于画好了水墨画,获得了业界的一致认可。

（王さんは生涯の精力を注ぎ、やっと水墨画をうまく描けるようになり、業界に認められるようになった。）

例(4-47)は上の６つの文型のいずれも当てはまらないにも関わらず、述語“改好”の意味について、「(二本の原稿を)きちんと修正し(たら)」という解釈より、「(二本の原稿を)修正し終え(たら)」という解釈が適切である。言い換えれば、この文に生起している結果補語“好”は〈評価義〉を表す“好(1)”ではなく、〈完成義〉を表す“好(2)”である。なお、例(4-48)について、統語的形式から見れば、鲁氏が提案したＤの「動作主＋“V 好(2)”了＋受動者」という条件に当てはまるが、述語“画好”は「水墨画という絵画のジャンルのひとつを描き終えた」という〈完成義〉と捉えにくく、むしろ、「上手に描けるようになった」という〈評価義〉のほうが際立っていると思われる。

以上の考察からわかるように、“V 好”の“好”は〈評価義〉を表すのか、それとも〈完成義〉を表すのか、それぞれの文法条件についてはまだ検討する余地がある。

4.2.2.“V 好”の〈完成義〉の顕在化条件

本論は、“V 好”の〈完成義〉と〈評価義〉の顕在化条件に語彙的アスペクトレベルの条件が第一に関わると考える。以下、まず動詞(句)の語彙的アスペクトに着目し、考察を行う。

4.2.2.1.“V 好”の〈完成義〉が顕在化する語彙レベルの条件

語彙アスペクトの研究の中で最も広く受け入れられているのVendler(1967)、Dowty(1979)である。本論文はVendler(1967)の4分類に基づき、語彙レベルの観点から結果補語“好”の意味合いを確認してみたい。その際、目的語が生起する場合は、「動詞＋(目的語)」(V(O))を考察の対象とする。なぜなら、「VR構造＋目的語」(VR＋O)構造を述語とする文は、階層構造は[S[[VR]O]]と分析されるが、意味構造上は[[S[VO]]CAUSE[OR]]と分析できるという考えが有力であるからで

ある。[23]つまり、意味構造上は、VRではなく、VOを一つの単位をなすとみなすことができると考える。

Vendler(1967)は、“What happened?”、“be-ing”、“in an hour”、“for an hour”といった基準を用いて、時間的な継続(temporal duration)、時間的な終点(temporal termination)、および内的な時間構造(internal temporal structure)などの時間的属性により、英語の動詞を四つのタイプに分けている。具体的な内容は以下のとおりである。

(a) states(状態)は

Non-actions that hold for some period of time but lack continuous tenses.

例：

(4-49) Fred knows the girl.

(4-50) Fred believes that Terry will come tonight.

(b) achievements(到達)

Events that occur at a single moment, and therefore lack continuous tense.

例：

(4-51) Bill found his watch.

(4-52) Bill won the game.

(c) activities(活動)

Events that go on for a time, but do not necessarily terminate at any given point.

例：

(4-53) John walked for an hour.

(4-54) John played violin all night.

(d) accomplishments(達成)

---

[23] たとえば、中川(1992：122)は“张三踢碎了玻璃门(張三はガラス戸を蹴り割った)”というVR構造が生起する文の意味構造について、「“张三”が“玻璃门”に対し“踢”という動作を行った結果、“玻璃门”が“碎”という状態変化を経験したという状況を表すことができる」と分析したうえで、その意味構造を〔张三(S)(踢玻璃(VO))〕CAUSE〔玻璃碎(OC)了〕と分析している。

Events that proceed toward a logically terminus.

例：

(4-55) Harry pained a picture yesterday.

(4-56) Harry learned French.

(Vendler1967:103-107)

上記の4つの分類の中で、“states(状態)”は変化を持たない均質な状態を表す。“achievements (到達)”は、状態変化または過程を表さず、何らかの目標に至るという行為の終了点を重点的に述べる動詞である。そして、“activities(活動)”と“accomplishments(達成)”という2種類の動詞句は、どちらも動的でかつ持続的な「過程の局面」が内在する、という点において共通している。一方、“accomplishments(達成)”が必然的な終結点を有するのに対し“activities(活動)”はそれを有しない、という点において異なる。

Vendler(1967)は英語の動詞句を中心に分類しているのであるが、その基準は普遍性を持つため、さまざまな言語の研究に援用されている。

中国語の動詞の語彙アスペクトに注目して、動詞分類を行った研究の多くも上述のVendler(1967)の4分類を踏まえているが、英語と異なり、中国語の動詞“accomplishments(達成)”における目標達成が、意味論的に内在するものではなく、文脈によって取り消すことができることを理由とし、中国語の動詞には、“accomplishments(達成)”というタイプは存在しないという見解を持つ学者が多い(Tai1984、陈平1988、郭锐1993、石村2000など)。たとえば、Tai(1984:291-292)では、次のような例が挙げられている。

(4-57) a.张三杀了李四两次，李四都没死。

(張三は李四を2回殺そうしたが、李四は死ななかった。)

a.'*John killed Peter twice, but Peter didn't die.

上記の例に示すように、“kill”のような英語では達成動詞とされる動詞は動作目標の達成の意味が動詞に含意されているため、結果を取り消す表現が成立しない。しかし、“kill”に意味的に相当する中国語“杀”は、目標達成の意味が動詞

に内在しないため、文脈によって結果のキャンセルが可能である。Tai(1984)などの学者たちはこれを根拠とし、中国語には達成動詞タイプがないと主張する。

一方、中国語動詞に“accomplishments(達成)”タイプを立てる必要性があると考える学者もいる。劉綺紋(2006:14-16)は以下の二点を理由としている。その一は、「多くの言語において、そのAccomplishmentにおける目標達成には、意味論的に意味するものと語用論的に含意するものという2種類がある。…(略)…中国語のAccomplishmentが特殊なのは、その目標達成を意味論的に意味するものがなく、すべて語用論的に含意するものである」ということである。その二は「狭義の結果状態」に関わる問題を考える際に、AccomplishmentとActivityとの区別が非常に重要となるからである。事態が終結すると共に、「結果状態」が生じる可能性があるのは、必然的終結点を持つ事態すなわちAccomplishmentとPunctualのみである。Activityは「結果状態」が生じる可能性がない…」ということである。

本論文は基本的に後者の見解に賛同する立場にある。ただし、理由として考えているのは、「結果状態」が生じるか否かという点で、中国語の“accomplishments”(達成)と“activities”(活動)は明らかに異なっているという点のみである。後述するように、“V好”の意味特徴は、「結果状態」が生じる可能性の有無により規定される部分があるため、“accomplishments”(達成)を独立するタイプとして立てる必要があると考えるからである。

以下、Vendler(1967)の4分類を踏まえ、各タイプの動詞句が“好”と結合する場合、“V好”の意味について検討していく。ただし、状態動詞句と到達動詞句は、そもそも“好”と結合することができないため(e.g.*认识好(老王)，*知道好(他的目的)，*发现好(钱包)，*死好)、以下において、“V(O)”が活動動詞句である場合および達成動詞句である場合について検討していく。

4.2.2.1.1.“V(O)”が活動動詞句類(activities)である場合

活動動詞句類(activities)とは、「動作行為の過程は存在するが、必然的終結点が内在しない。かつ、動作行為が及ぶ対象に状態変化を引き起こさない」という動詞句類を指す。例えば、以下のような例が挙げられる。

(4-58) a.学好汉语(中国語をきちんと勉強する)

b.演好话剧(話劇をきちんと演じる)

c.练好美声(声楽をきちんと練習する)

d.抓好生产(生産をきちんと管理する)

e.管好班级(クラスをきちんと運営する)

(4-58)a の動詞句“学汉语(中国語を勉強する)”は、動作行為の“学(勉強する)”に持続過程があるが、内在的終結点はない。また同時に、受動者“汉语(中国語)”は動作を受けるが、“汉语(中国語)”自身には状態変化が生じない。更に、これらの動詞句類と共起する結果補語“好”の意味特徴について考察した結果、いずれも〈評価義〉のみを表すということが明らかになった。

4.2.2.1.2. “V(O)”が達成動詞句類(accomplishments)である場合

達成動詞句は、活動動詞句と異なり、「動作行為の過程があり、必然的点が内在する。更に、動作行為が終了すると共に、対象の状態変化が生じる可能性がある。」といった特徴を持つ。本論では達成動詞句を状態変化の違いによって「作成動詞句」と「変化他動詞句」に下位分類し、“V好”の意味機能について考察していく。

4.2.2.1.2.1. 作成動詞句

作成動詞句が表す作成行為において、作りだされるものは行為の開始時から存在しているのではなく、行為が完結したときにはじめて具現化するものである。その作り出さるものには具体的な事物(目に見えるもの)と抽象的な事物(目に見えないもの)がある。次の例(4-59)は具体的な事物が出現する用例であり、例(4-60)は抽象的な事物が出現する用例である。

(4-59) a.做好饭(ご飯をきちんと作る/ご飯を作り終える)

b.绣好花(花模様をきちんと刺繍する/花模様を刺繍し終える)

c.挖好坑(穴をきちんと掘る/穴を掘り終える)

d.写好论文(論文をきちんと書く/論文を書き終える)

e.画好画(絵をきちんと描く/絵を描き終える)

f.打印好计划书（計画書をきちんと印刷する)/計画書を印刷し終える）

(4-60) a.说好去吃饭（食事の約束をきちんとする/食事の約束をし終える）
b.想好解决办法（解決方法をきちんと考え出す/解決方法を考え出す）
c.制定好方针（方針をきちんと立てる/方針を立て終える）
d.构思好方案（プレゼンをきちんと練る/プランを練り上げる）

(4-60)の諸例は、(4-59)の諸例と異なり、動作行為が完成したとき、具体的な事物ではなく、抽象的な事物が現れるものである。(4-59)a は動作“做”(作る)という動作が完成したとき、“饭”(ご飯)という具象物が現れる。一方、(4-60)a は「ご飯を食べに行くと約束した」という意味を表し、結果として「約束」という抽象的な事物が出現する。このように(4-59)と(4-60)の二つのタイプの動詞は動作行為の完成に伴い、ある事物が現れるという点で共通している。いずれも結果補語“好”と共起できる。

4.2.2.1.2.2. 変化他動詞句

動作主の動作の結果として対象の状態を変化させるという意味を表す動詞類である。

(4-61) a.炸好土豆片儿（ポテトチップスをきちんと揚げる/ポテトチップスを揚げ終える）
b.翻译好文章（文章をきちんと翻訳する/文章を翻訳し終える）
c.染好头发(髪の毛をきちんと染める/髪の毛を染め終える）
d.修好自行车(自転車をきちんと修理する/自転車を修理し終える）

例(4-61)は例(4-59)、例(4-60)の諸例と異なり、新たな事物は出現しないが、前項動詞句が指し示す動作行為によって、動作対象の状態が変化することを意味する例である。つまり、動作行為が行われる前に動作対象である物体はすでに存在しているのである。変化他動詞句には対象の空間位置の変化を表す動詞も含まれる。

(4-62) a.放好手表（腕時計をきちんと置く/腕時計を置いておく）

b.存好钱(お金をきちんと貯金する/お金を貯金しておく）

c.买好东西（買い物をきちんとする/買い物をしておく）

d.挂好画（絵をきちんと掛ける/絵を掛けておく）

(4-62)の諸例は(4-61)と同様に、動作行為が行われる前に動作対象はすでに存在しており、動作行為によって、対象の空間位置の変化が生じるという意味を表す。例えば、(4-62)a は「腕時計」を元の場所から指定する場所へ移動させるという意味合いが読み取れる。例(4-62)b は「お金」を「銀行に」預けるという意味を表すため、存在する位置に変化が生じる。例(4-62)c は「買い物」をしたあと、商品が買主の手元に移動するという位置変化が予想される。

上述の達成動詞句(作成動詞と変化他動詞を含む)と共起する場合、結果補語“好”の〈完成義〉が顕在化する可能性があるという結果が得られた。

以上、動詞語彙アスペクトの観点から、結果補語“好”と共起できる動詞タイプを考察した。なお、多くの学者が指摘しているように、結果補語“好”は「よい」という話者の主観的な評価を表すため、共起する動詞の範囲もかなり限定されている。例えば、活動動詞句或いは達成動詞句であっても、もし結果が話者にとって望ましくないものであれば、結果補語“好”と共起し難い例も多くある。

(4-63) a.盖好大楼

（ビルをきちんと建てる）

b.?拆好大楼

（ビルをきちんと取り壊す）

例(4-63)b は特殊な文脈がない限り、成立し難い。その原因は、通常「ビルが取り壊される」という事態は通常話者にとって望ましくないものとして捉えられるところにあると思われる。

よって、本論文は、達成動詞句と結果補語“好”が共起する条件に「望ましい結果の出現が予想される」という意味論的条件を補っておく。

以上の考察によって得られた結論をまとめると以下のようになるだろう。すなわち、活動動詞句と共起する場合、“好”は〈評価義〉のみを表すのに対し、達成動詞句と共起し、そして意味的には〈価値のある事物や状態の出現〉が予想される場合、〈完成義〉が顕在化する可能性がある。[24]

4.2.2.1.3.〈完成義〉と〈評価義〉との関係

構文レベルから“V 好”の〈完成義〉の顕在化条件を検討する前に、〈完成義〉と〈評価義〉と関係について確認しておきたい。

“V 好”の〈評価義〉と〈完成義〉の関係について、刘月华他(1983/2001)は“表示动作完成，并且达到完善的地步。(動作が完成し、且つ望ましい状態に達すことを表す)”とだけ述べており、両者の関係について具体的に説明していない。一方、鲁晓琨(1995:53)は、“当‘V 好’出现在一定的句子里时，‘好’总是以其中的一个意义出现。(“V 好”がある文に生起する場合、“好”は常にそのうちの 1 つの意味を以て生起する)”と述べている。この記述から、鲁晓琨(1995)は“V 好”の〈評価義〉と〈完成義〉が対立しているものとして扱っているように覗える。本論文は、この問題について、「“V 好”の〈評価義〉と〈完成義〉は対立の関係ではなく、〈完成義〉は〈評価義〉に含まれる意味特徴の一つである。〈評価義〉は常に存在しているが、文法条件によって〈完成義〉が顕在化する」という見解をとる。

4.2.2.2.“V 好”の〈完成義〉が顕在化する構文レベルの条件

4.2.2.1 で考察したように、“V(O)”が活動動詞句である場合、“V 好”は〈評価義〉のみを表すという言語事実から、〈評価義〉は語彙レベルで規定されるということができる。一方、“V(O)”が達成動詞句である場合、“V 好”の〈完成義〉が顕在化する可能性があると認められるが、常に顕在化するわけではない。〈完成義〉

[24] 鲁晓琨(1995)では、“成就意义动词”と“无成就意义动词”という用語を用いている。そして、“成就意义”について、“随着动作的完了，可以出现某种新东西或新状态(動作の完了と伴い、望ましい新たなものや状態が出現することを要求する)”と説明している。この説明から、“成就意义动词”は「限界点がある」と解釈できるため、「達成動詞」の一部と見なしてよい。しかし、“成就意义动词”はイコール「達成動詞」とは言えない。本章はアスペクト(限界点の有無)に着目している点で鲁晓琨(1995)と異なる。

が明確に顕在化するか否かは、動詞の語彙レベルでの分析のみでは取り扱いきれず、構文レベルから考察する必要がある。

まず、次の文に生起している“V 好”の意味合いを考えてみよう。

(4-64) 我买好了去野营的东西。
(キャンプ用のものはもう買ってある。)
(4-65) 一个小时之内他就打扫好了房间。
(彼は一時間以内に、すぐに部屋を掃除し終えた。)
(4-66) 你拜托我的事都已经办好了。
(あなたに頼まれたことは、もうきちんとやった。)
(4-67) 我改好这两篇稿子就回去，你再等一会儿。(例(4-46)再掲)
(私はこの 2 本の原稿を修正し終えたら、すぐ帰るので、もうすこし待っていて。)

例(4-64)～(4-67)における“V 好”はいずれも〈完成義〉が顕在化している。これは一体何を示唆しているのか。“V 好”の〈完成義〉が顕在化している統語的特徴については、前述した藤田(1993)と鲁晓琨(1995)がすでに言及している。両者の主張まとめると次のようになる。

(ⅰ) 〈完成義〉を表すアスペクト接辞“了”が現れる。
(ⅱ) 前置時間詞(時点・時間量を表す語)を伴う
(ⅲ) 受動者(あるいは対象)が文頭に置かれる
(ⅳ) 受動者(或いは対象)に数量詞がつく
(ⅴ) “把”構文に生起する

しかし、前にも触れたように、上述のような条件はあくまで傾向と呼ぶべきものである。単にこれらの形式によって、“V 好”の意味合いを判断する場合、往々にして言語事実とは符合しない。たとえば、以下のような例が見られる。

(4-68) a.达芬奇花了一生的时间终于画好了肖像画。

（ダ・ビンチは生涯をかけて、やっと肖像画をうまく描けるようになった。）

b.达芬奇花了一生的时间终于画好了《蒙娜丽莎》。

（ダ・ビンチは生涯をかけて、やっと『モナリザ』を描き上げた。）

上の 2 例はいずれも「前置時間詞」と「アスペクト接辞“了”」を伴う。藤田(1993)や鲁晓琨(1995)における、“V 好”の〈完成義〉が顕在化する統語的条件によれば、上記の 2 例はいずれも〈完成義〉が顕在化するはずであるが、しかし、この 2 例における“V 好”の意味は異なる。例(4-68)a は〈完成義〉が顕在化せず、〈評価義〉のみを表す。一方、例(4-68)b は明らかに〈完成義〉が顕在化している。よって、統語的特徴のみにより、“V 好”の意味を見分けるには限界がある。この現象を合理的に解釈するために、本論文は第 1 章で紹介した〈限界的/非限界的〉というアスペクト概念を用いて分析を試みる。

前述のように、文全体の表す事象は、時間的な終点があるか否か(つまり〈+telic〉であるか否か)によって、限界的(bounded)、或いは非限界的(non-bounded)に分けることができる。Dowty(1979)、Pusrejovsky(1995)は動詞の語彙アスペクトと異なり、文全体の表す事象タイプは動詞だけではなく、動詞と組み合わせる名詞句や前置詞句や副詞などの成分に大きく左右されていると指摘している。のちに沈家煊(1995、2004)が中国語の事象アスペクトの研究にも着目し、独自の解釈を加えた。沈氏の説によると、時間詞が述語の前に置かれる場合、或いは〈完成〉を意味するアスペクト接辞“了”がある場合、または目的語が数量詞に修飾される場合、文の表す事象は限界的な事象として捉えやすいという。この説によれば、前述した藤田(1993)や鲁晓琨(1995)で言及した統語的特徴を示す文によってあらわされる事象はすべて「限界的事象」と言えるだろう。

さらに、藤田(1993)や鲁晓琨(1995)によって説明できない例(4-68)については、以下のように説明するができるだろう。例(4-68)aと(4-68)bは「前置時間詞」と「アスペクト接辞“了”」を伴うという統語的特徴を示しているという点において共通しているが、それぞれの目的語には大きな違いが存在する。前者の目的語は「普通名詞」であり、後者は「固有名詞」であるという点において異なる。沈家煊(1995:7)が指摘するように、目的語が「普通名詞」である場合は、通常「裸の

名詞が類を表す総称名詞で、非限界的」という意味特徴を有する。[25]一方、「固有名詞」は、本来個体事物を指し示す名詞類であるため、限界的である。沈家煊(1995, 2004)によれば、中国語の文において、目的語が表す事物が限界的である場合、動詞の表す動作行為も限界的でなければならならず、その逆も同様である。例(4-68)aにおける目的語“肖像画(肖像画)”は総称、つまり類概念を表しており、非限界的であるため、文全体によって表される事象が非限界的である。この場合、“V好”は〈完成義〉は顕在化せず、〈評価義〉のみを表す。一方、例(4-68)bにおける目的語“《蒙娜丽莎》(『モナリザ』)”は固有名詞であり、限界的であるため、文全体によって表される事象も限界的であるため、“V好”の〈完成義〉が顕在化しているのである。

以上の分析により、文全体の表す事象(event)が限界的(bounded)である場合、“V好”の〈完成義〉が顕在化するという結論が得られるだろう。

しかし、ここでもう一つ注意しておきたいことがある。それは、“V好”が述語成分を担う文全体の表す事象が意味上限界的であると推定される場合でも、必ず“V好”の〈完成義〉が明確に顕在化すると限らないということである。次の例を見てみよう。

---

[25] 沈家煊(1995:7)は、中国語の「裸名詞」が指し示す事物の意味的特徴について次のように述べる。“……汉语名词没有单复数的区别，但是光杆名词，尤其是做动词宾语的光杆名词，如吃苹果中的苹果，来车中的车，喝水中的水都是泛指类名，因此代表无界事物；而吃三个苹果，来一辆车，喝一杯水中的宾语名词都带数量词，专指个体，因此代表有界事物。(…中国語の名詞には単数、複数の区別はないが、裸の名詞、とりわけ動詞の目的語となる裸の名詞、例えば“吃苹果(リンゴを食べる)”におけるリンゴ、“来车(車がくる)”における車、“喝水(水を飲む)”における水は、いずれも総称名詞なので、限界のない事物を指し示す。一方、“吃三个苹果(三つのリンゴをたべる)”、“来一辆车(一台の車が来る)”、“喝一杯水(一杯の水を飲む)”などにおける動詞の目的語は、いずれも数量詞を伴い、専ら個体事物を指し示すため、限界のある事物を指し示す)”。なお、認知言語学では「可算名詞」と「物質名詞」という対概念も〈限界性〉の有無という観点から解釈されており、前者は例えば「リンゴ」がそうであり、後者は例えば「水」がそうである。前者は〈＋限界的〉であり、後者は〈－限界的〉であるとみなされる。しかし沈家煊(2004:41)にも指摘しているように、「個体／類総称」の概念は、「可算/非可算」の概念は、それぞれ存在する認知領域(cognitive domain)が異なるため、同じものではないことに注意されたい。

(4-69) 明天你要给孩子把饭做好。

(明日は、子供にちゃんとご飯を作ってあげてね。/子どもにご飯を作っておいてね。)

(4-70) 五点钟之前你要给孩子把饭做好。

(五時までに、子供にご飯を作り終えてね。)

(4-71) 等孩子姥姥把孩子接回来时，你要给孩子把饭做好。

(おばあさんが子供を迎えに行って帰ってくるまでに、子供にご飯を作り終えてね。)

例(4-69)～(4-71)の3例はいずれも限界的事象を述べているが、(4-70)と(4-71)おける“好”は〈評価義〉を有するとともに、〈完成義〉も顕在化している。一方(4-69)における“好”は「きちんと」という〈評価義〉が際立っているのか、それとも〈完成義〉が際立っているのか、明確には言い切れない。それは以下のような理由によるものと考えられる。例(4-70)には“五点钟之前(五時までに)”、例(4-71)には“等孩子姥姥把孩子接回来时(おばあさんが子供を迎えに行って帰ってくるまでに)”という事象の〈限界性〉を明示する統語的成分が存在しており、具体的な動作の終了時点が明示している。一方、例(4-69)における“明天”という時間詞は〈限界性〉を示す文法成分とも見なせるが、例(4-70)と例(4-71)における時間詞と比べると、その〈限界性〉はかなり曖昧である。〈限界性〉が曖昧である場合、“V好”には〈評価義〉か〈完成義〉かという揺れが生じるのではないかと思われる。以上を踏まえると、“V(O)”が達成動詞句である場合、“V好”の〈完成義〉が顕在化する条件は、「“V好”を述語とする文全体の表す事象が限界的であり、さらにその〈限界性〉を表す成分が明示されている場合、〈完成義〉が顕在化する」というように整理できる。

4.2.3.〈完成義〉が顕在化する場合における“V 好”と“V 完”の機能の相違

以上、“V 好”の有する〈完成義〉と〈評価義〉とがどのような文法条件のもとで顕在化するのかを検討してきた。以下において本論は〈完成義〉が顕在化する

場合における“V 好”と“V 完”の機能差異について検討してみたい。

前述のように、〈完成義〉が顕在化する場合、“V 好”は〈評価義〉も失われず、〈価値のある事物/状態という結果状態が現れる〉というニュアンスを付帯する。

(4-72) a.饭已经做好了，你自己拿出来吃吧。

（ご飯はもうできたわよ。自分で出して食べなさい。）

b.? 饭已经做完了，你自己拿出来吃吧。

(4-73) a.我昨天把黄豆发好了，到时候你用色拉油和大酱炒一下就行了。

（大豆は昨日もう水に浸してありますから、時間になったら、サラダ油と味噌でちょっと炒めればいい。）

b.? 我昨天把黄豆发完了，到时候你用色拉油和大酱炒一下就行了。

(4-74) a.这上上下下我已经为你铺好了路子，下面就看你的了。

（上から下まで、もうちゃんと手が回っているから、次はあなたの出番だよ。）

b.? 这上上下下我已经为你铺完了路子，下面就看你的了。

(4-75) a.手续已经办好了，你直接进去住就行了。

（手続きはもうきちんと済ませたので、あなたは直接入って住めばいい。）

b.手续已经办完了，你直接去住就行了。

（手続きはもうやり終えたので、あなたは直接入って住めばいい。）

上記の諸例における a,b の統語的な違いについては、“V 好”「何からの価値のある事物あるいは状態が生じていること」を表すのに対し、“V 完”は単に動作行為の終結の局面を表すという意味機能の違いに起因すると説明することができるが、しかしそれだけでは不十分である。本論文は「動作主の意図性」という要素が関与すると考える。以下の例を見てみよう。

(4-76) *公园里的樱花终于开好了，我们可以去赏樱花了。

上記の例は、“樱花开(桜が咲くということ)”は動作“开(咲く)”の完成に伴い、話し手にとって望ましい結果(桜の花が咲いている状態)が現れるという意味を表す

にもかかわらず、非文である。その理由は動作が意図的ではないからだと考えられる。また次の例も同様である。

(4-77) *中秋节到了，月亮又圆好了。(十五夜になって、月はまた丸くなった。)

よって、上述した“V 完”と“V 好”の意味的差異について、次のように修正すべきだろう。すなわち、「“V 完”は単に動作の〈完成〉を表すが、“V 好”は〈完成義〉のみならず、〈意図的に何らかの「価値のある事物／状態」を生ぜしめる〉というニュアンスをも付帯する」ということである。

〈完成義〉を表す“V 好”は、必ず〈意図的に何らかの「価値のある事物／状態」を生ぜしめる〉ため、その前提として、“V”に動作主の意図が込められることが要請されると考えられる。つまり、“V”が〈＋自主性〉という意味的特徴を有する動作でなければならない。

马庆株(1985)は「動作主の意図の有無」によって動詞を〈＋自主性〉動詞と〈－自主性〉動詞に二分している。本論はそれに倣い、“V 好”について考察する。具体的には、马庆株(1985)において提示されている以下の 8 つの統語形式のうち、少なくとも 1 つに生起しうる動詞は〈自主性〉という意味的特徴を有するとみなし、いずれも生起し得ない動詞は〈自主性〉を有しないとみなすことにする。

(4-78)

①V＋「命令」	②V＋O＋「命令」
③V＋来/去	④V＋O＋来/去
⑤来/去＋V＋来/去	⑥来/去＋V＋O＋来/去
⑦来/去＋V	⑧来/去＋V+O

考察の結果、“V 好”構造全体は〈＋自主性〉であることが確認された。なお、確認しておきたいのは、動詞(句)の〈＋他動性〉と〈＋自主性〉と必ずしも一致するわけではないということである。

(4-79) a.老王盖好了房子。

（王さんはきちんと家を建てた。）

b.*张琴生好了孩子。

（張琴はきちんと子供を生んだ。）

例(4-79)a における“盖房子(家を建てる)”の“盖(建てる)”は例(4-79)b における“生孩子(子供を産む)”の動作“生(産む)”と同じように、〈＋他動性〉という意味特徴を持つ作成動詞であり、そして動作が完成した時に、現れる“房子(家)”と“孩子(子供)”は同じく望ましい結果である。しかし、前者が適格であるのに対して、後者は不適格である。その理由について以下のように考えられる。「家を建てる」という場合は、「家が建つ」までの過程は、開始から終了まで動作主の意志によってコントロールできる。従って、“盖房子(家を建てる)”は〈＋他動性〉且つ〈＋自主性〉であると言える。一方、“生孩子(子供を産む)”という出来事には往々にして不確実性を伴う。つまり、子どもが生まれるまでの過程は、人間(親)の意志によってコントロールできないため、赤ちゃんが予定通りに生まれてくる可能性もあれば、そうではない可能性もある。主語の意図の関与は少ないと考えられる。「子供を産む」ということは、「成長する」「大人になる」「結婚する」「死ぬ」と同じように、自然規律のひとつとして捉えられるのが一般的である。よって、例(4-79)a が成立するのに対し、(4-79)b は非文である。また、次の例も同じように説明することができる。

(4-80) *鸡下好了蛋。

（鶏がきちんと卵を産んだ。）

(4-81) *小王出好了汗。

（王さんはきちんと汗をかいた。）

以上の例に示されているように、自然現象にせよ、生理現象にせよ、通常動作主の意志性を伴わないと捉えられ、つまり〈－自主性〉という意味特徴を有する。よって、例(4-80)と(4-81)には“V 好”は生起しないのである。

4.2.4. まとめ

本節では“V 好”の〈完成義〉の顕在化条件および“V 好”が〈完成義〉を表す場

合、“V 完”との機能の相違について考察した。結論を次のようにまとめる。

（ｉ）“V(O)”が活動動詞句である場合、“V 好”は〈評価義〉のみを表す。“V”が〈価値のある事物/状態の出現〉が予想される達成動詞句であり、なおかつ、“V 好”が述語成分を担う文全体の表す事象(event)が限界的(bounded)で、更に〈限界性〉を表す成分が明示されている場合、“V 好”の〈完成義〉が顕在化するとともに、〈評価義〉も失われない。

（ii）〈完成義〉を表す場合、“V 完”は動作の〈自主性〉と非関与的であるのに対し、“V 好”は常に〈＋自主性〉であり、動作が完成するという意味のみならず、〈意図的に何らかの「価値のある事物／状態」を生ぜしめる〉という特殊なニュアンスも付帯する点が異なる。

4.3. 第 4 章のまとめ

本章では、〈完成相〉を表す VR 構造の代表例として“V 完”、“V 过 $_1$”、“V 好”を取り上げ、三者の意味機能について考察した。考察の結果を【表 8】に図示する。

【表 8】

VR 構造 / 意味機能	“V 完”	“V 过 $_1$”	“V 好”
単に〈完成義〉を表すか否か	＋	＋	－
〈評価義〉を表し得るか否か	－	－	＋
生起条件が主に語用論レベルで既定されているか否か(〈語用論的志向〉が強いか否か)	－	＋	－

※“+”は問いに対する肯定を、“-”は問いに対する否定を、“±”は非関与的であることを表す。

【表 8】からわかるように、結果補語構造“V 完”、“V 过 $_1$”、“V 好”における“完”、“过 $_1$”、“好”はいずれも前項動詞 V に〈限界性〉を付与する、つまり限界化機能を持つが、三者は限界化の実現の条件が異なる。

“V 完”と“V 过 $_1$”は〈完成義〉以外の意味特徴を持たないという点において共

通するが、それぞれの〈完成義〉の実現の条件が異なる。前述のように、“V 完”は「一つの動作行為の内的展開に焦点が当てられており、当該の動作行為が終結する局面」を表すという意味機能を持つ。つまり、前項動詞 V が〈持続性〉を持ち、かつその内的展開が終結する局面を強調する場合、“完”が生起し、限界化が実現されうる。

一方、“V 过 $_1$”は「発話のコンテクストにおいて規定される上位イベントを構成する下位イベントのひとつが実現する局面」を表す。このような「上位イベント—下位イベント」という二重インベント構造は発話のコンテクストにおいてに規定されるため、“V 过 $_1$”の生起は「語用論的志向」が強いという特殊性を持つ。言い換えれば、語用論レベルにおいて、二重イベント構造が成立する場合に限り、“V 过 $_1$”の限界化が実現される。

さらに、“V 好”における結果補語“好”は形容詞としての意味特徴(〈評価義〉)が色濃く残っているため、〈完成義〉の実現条件はより限定されている。すなわち、「V が〈価値のある事物や状態の出現が予想される〉という意味特徴をもつ達成動詞句であり、なおかつ“V 好”が述語成分を担う文全体の表す事象が限界的で、更にその〈限界性〉を示す成分が明示されている」場合のみ、“V 好”の限界化が実現される。

第 5 章　“V 到”構造と方向補語構造の機能差異

第 4 章では、VR 構造の下位カテゴリーの一つである〈完成相〉を表す VR 構造に属する“V 完”、“V 过 $_1$”、“V 好”を考察の対象として取り上げ、それぞれの〈完成義〉の実現条件について検討してきた。前述のように、結果補語構造(VR 構造)カテゴリー内部は均質的ものではなく、“V 完”、“V 过 $_1$”、“V 好”などのような典型的なものから、周辺的ものまで連続体をなしている。本章で取り上げる“V 到”はその周辺的な成員の一つである。“V 到”構造における V が非移動動詞である場合(e.g.“看到(見える)”, “买到(入手する)”)、“到”は V が表す動作行為の完成や実現を表す。この点において他の結果補語と共通する。一方、V が移動動詞である場合(e.g.“走到(～まで歩いていく)”, “爬到(～まで登る)”)、“到”は移動過程の終点を表す。この点においては方向補語と類似性を有する。要するに、“到”は結果補語と方向補語の特徴を持ち合わせており、中間的なものなのである。このような周辺的な VR 構造を〈限界性〉の観点から見れば、どのような特徴があるのかは、VR 構造のプロトタイプあるいは周辺を考える際、重要な問題であろう。

本章では、方向補語構造との対照しつつ、“V 到”構造の機能について検討する。具体的には中根(2005, 2008)及び杉村(2011)を踏まえ、主に〈過程性〉、〈限界性〉、「“正”、“正在”、“在”との共起関係」という三つの問題に絞って検討を加えていく。問題になっている議論の拡散を防ぐため、考察対象の“V 到”構造と方向補語構造を次のような範囲に限定しておく。

Ⅰ. 方向補語の範囲：方向補語は統語上自立性を欠くため、場所目的語、または“来(くる)”“去(いく)”を伴なければならない。本論は前者のみを考察対象とし、さらにそのうち“上，下，进，出，回，过”から構成されるものだけを扱うこととする。

Ⅱ. 動詞の範囲：これらの構造を構成するもののうち、動詞は主体移動動詞(“走(歩く)”, “爬(這える/のぼる)”, “飞(飛ぶ)”など)に限定する。

なお、議論の便宜上、「動詞＋“到”＋場所目的語」を“V 到 Y”、「動詞＋方向補語＋場所目的語」を VxY と表記する。

5.1. 中根(2005, 2008)と杉村(2011)における主な観点

考察に入る前に、中根(2005，2008)および杉村(2011)の主な観点を紹介しておく。

中根(2005，2008)は移動事態を表す“V 到 Y”と VxY の統語的相違点を考察したうえで、両者の文法的機能について、“V 到 Y”は〈位置変化〉に、VxY は〈移動動作〉に焦点が当てられていると主張する。杉村(2011)は、専ら VxY の意味と形式の関係について検討し、VxY の意味機能は、V が表す転位誘発運動によって、xY が表す対立空間転位が起きることであり、VxY は〈移動動作〉ではなく、異空間転位完成の瞬間に焦点があてられていると主張する。

中根(2005，2008)と杉村(2011)の議論の焦点は VxY の本質は〈移動動作〉にあるのか、それとも〈移動結果〉にあるかという問題にある。

5.2.〈過程性〉についての問題

5.2.1.中根(2005，2008)の主張及び問題点

中根(2005，2008)は、VxY は〈限界性〉及び〈過程性〉を持つ非点的事態を表すのに対し、“V 到 Y”は、〈限界性〉および〈瞬間性〉を持つ点的事態を表すと主張している。本論は VxY が〈限界性〉と〈過程性〉を持つという見解について異論はない。尚“V 到 Y”は〈限界性〉を持つ事態を表すという見解についても、基本的に中根(2008)に賛同するが、“V 到 Y”は〈過程性〉を持つか否かということについて、次のように考える。中根(2008)は〈過程性〉という概念について、「…時間の推移に伴い位置や状態を変化させていくその展開過程であり、内部は異質である」と定義している。更に VxY の本質的意味は〈移動動作〉にあり、つまり〈過程性〉が前景化すると主張する根拠として、「動作の様態や動作を行う際の動作者の様子を描写する」副詞や「動作の持続・反復を表す」副詞と共起する用例を数多く挙げている。一方、これらの副詞が“V 到 Y”と共起できるか否かについては言及していない。しかし、以下の例に示すように、“V 到 Y”は「移動様態」、或いは動作の過程を描写する副詞的成分と共起する例が決して少なくない。

(5-1) 走进北街，向西拐进一个小胡同，小董飞快地跑到尽头一家门口，轻轻推开两扇门，喊了一声：“二虎哥。”(CCL・李晓明《平原枪声》)

(北街に入り、西に曲がって小さな路地に入ると、董さんは飛ぶように突き

当たりの家の入り口まで走って行き、そっと両開きの戸を押し開けると「二虎にいさん！」と声をかけた。）

(5-2) 于是孩子站了起来，他从桌子底下钻过去，然后一步一步走到祖母的卧室门口，门半掩着，祖母如死去一般坐在床沿上。（CCL・余华《现实的一种》）
（すると、子供は立ち上がり、テーブルの下をくぐり抜けると、（それから）一歩一歩祖母の寝室の入り口まで行った。寝室のドアは半分開いており、祖母がまるで死人のようにベッドの縁に腰かけていた。）

(5-3) 马哲没有说话，慢慢走到窗口。（CCL・余华《河边的错误》）
（馬哲は何も言わずに、ゆっくりと窓際まで歩いて行った。）

(5-4) 后来她又跟我走了一路，一直追到停车场，在我身后说些带挑逗意味的疯话……（CCL・王小波《白银时代》）
（その後、彼女はまたしばらく私を尾行し、ずっと駐車場までついてきた。後ろで何かからかうようなことをぼそぼそ言っていた…）

もし、様態副詞と共起しうるか否かを〈過程性〉の有無の判断基準とするならば、“V 到 Y”は VxY と同様に〈過程性〉を持つと言うべきであろう。[26]

5.2.2. VxY の〈過程性〉に対する杉村(2011)の見解

杉村(2011)は“V 到 Y”について言及せず、VxY の分析を中心にしたものである。当該論文においては、中根(2008)における VxY は「時間の経過を伴い、経路を描きながら移り動いていく過程を描くものである」という主張に対し、「VxY は転位完成の瞬間が取り立てられ、移動の過程は捨象される」という正反対の意見が提出されている。

しかし杉村(2011)の主張にとって不利な言語事実もある。その一つは下記の例(5-5)のような、動作の進展過程を描写する様態副詞と共起する実例の存在であり、もう一つは“正在”と共起する例の存在である。後者についての分析は 5.4 に譲るが、まず前者の例を見てみよう。

[26] “V 到”の〈過程性〉について、石村広(2000)では、移動事態を表す“V 在 L”と“V 到 L”比較したうえで、前者は変化結果の方に視点を絞りこむのに対し、後者は行為の方に意味の比重が置きやすいと指摘している。

(5-5) 我一步一步慢慢走下台阶，站在她的面前。(用例及び日本語訳は杉村 2011 から引用)

(私は一歩一歩ゆっくり階段を下りて、彼女の前で止まった)

杉村(2011)では、上記の例が挙げられ、「“顺着台阶一步一步慢慢往下走(一歩一歩ゆっくり階段を降りる)”と“走下台阶(階段を降りた)”を短絡的に合体させたものと考えるべき」と説明されている。しかし、この場合、なぜ VxY の移動過程が捨象されることになるのかという問題について、これ以上詳しい分析がなされていないため、必ずしも説得的ではない。本論は中根(2005, 2008)と同様、VxY は様態副詞や「動作の持続・反復を表す」副詞と共起する実例は、まさに VxY が〈過程性〉を持つことを裏付けていると考える。ただし、様態副詞によって引き出される〈過程性〉は VxY 構造全体のものではなく、V に内包される意味特徴であると主張したい。事象構造の観点からみれば、VxY は VR 構造と同様に、動作を表す前項事象と結果を表す後項事象から構成される複合事象である。前項事象を表す V は非限界的事象を表す移動動詞であるため、移動の動きそのものに内属する側面の様子を描写する様態副詞などと共起できる。例(5-5)についていえば、前項動詞“走”が指し示す移動動作は時間的に幅を持つため、“一步一步慢慢”という副詞的成分と共起できる。

上記の分析を踏まえ、本論は中根(2005, 2008)と同様、VxY は〈限界性〉だけではなく、〈過程性〉も持つと考えるが、この〈過程性〉という意味特徴は V に内包されているという点を補足する。

5.3.〈限界性〉についての問題(Y の役割)

中根(2005, 2008)では、“V 到 Y”と VxY はいずれも〈限界性〉を持つが、前者の場合、“到 Y”は V を限界化すると同時に事態に瞬間性を付与するが、後者における xY が V を限界化すると同時に事態に〈過程性〉を付与すると主張している。本論は 5.2.において分析したように、“V 到 Y”と VxY の〈過程性〉は V のアスペクト性質によって規定されるものであり、“到 Y”や“xY”によって付与されるものではないと考える。“到 Y”と“xY”は V に〈限界性〉を付与する役割だけを担うと

いうことである。ただし、両者は〈限界性〉の付与の仕方が異なると本論は考える。まずxYを見てみよう。

“下车(車を降りる)”“上树(木を登る)”“过河(川を渡る)”などのようなxY構造のY(“车”、“树”、“河”)は移動行為(“下”、“上”、“过”など)が経過する領域を表す。認知言語学の観点によれば、事象(event)は個体である参与者(participant)が相互作用を行うことによって成立する。名詞句の指示物が「参与者」であるか、あるいは参与者と参与者の関係が生じる場となる「セッティング」であるのかという区別が文法的に重要な意義を持つ(Langacker1990)。例えば、“他买了一张桌子。(彼はテーブルをひとつ買った)”という事象の中で、テーブルは参与者として機能しているが、“蚂蚁在桌子上爬。(蟻はテーブルにうえで這っている)”という場合、テーブルは蟻が這っている場であり、「セッティング」として機能している。谷口(2005)によれば、名詞句の指示物を「参与者」として捉える場合は、はっきりとした境界を持ち、一つの明確なまとまりを成した物体である。それに対し、「セッティング」として捉える場合、明確な境界を持たず、漠然と広がりを持つという。経過領域(つまり「経路」)も一種の「場」であり、典型的な「セッティング」より範囲が限定されているが、「セッティング」的な性質を帯びている。

一方、“到”は位置移動の終点を導く機能がある(Lamarre2007:59-60)。“到 Y”のYは単に移動終了後、主体の滞在場所がYに変更することを提示するだけで、xYのYのように、移動動作が行われる「場所」ではない。すなわち、〈終点〉と〈経路〉との最も大きな違いは、前者は移動動作が完成したあと、移動主体が到達しかつ滞在する地点のことを指し、後者は移動動作が完成した後、移動主体が到達し、なおかつそこで引き続き移動を継続する場所、すなわち〈経路〉のことを指すというところにある。

両者を比較すれば、xYのYは「到Y」のYより「点(地点)」的な性質が強く、境界性がはっきりしているため、〈限界性〉の程度が高いということが考えられる。それによって〈限界性〉が付与されるVxYと“V到Y”にも〈限界性〉の程度の差があるといえるだろう。

5.4. “正”、“在”、“正在”との共起問題について

5.3節では、〈限界性〉の程度において、“V到Y”はVxYより高いと述べた。本

節では、副詞との共起味関係からこれを検証することを試みる。VxY が“正在”と共起する例については、中根(2005, 2008)及び杉村(2011)はいずれも言及している。まず、それぞれの分析を見てみよう。

5.4.1.中根(2005, 2008)の分析

中根(2005)は以下の例(5-6)～(5-8)を挙げている。(日本語訳も中根 2005 か引用)

(5-6) 众人惊叫着跑下崖去，见瞎老汉正在河滩上翻身爬起，楞瞌瞌坐着，浑身是泥，只在脸上被砂砾划破一道口子，洇出血来。
(見るとめくらのじいさんはちょうど川原で身を翻して起き上がり、ぼおっと座っているところだった。)

(5-7) 在黄山中，不但要低头看山，还要面面看山，因为方向一改变，山的样子就不同，有时竟完全两样。例如从玉屏峰望天都峰，看见旁边一个峰顶上有一块石头很像一只松鼠，正在向天都峰跳过去的样子。这景致就叫“松鼠跳天都”。
(傍らの峰の頂上にリスのような石がひとつ、ちょうど天都峰に向かって飛んでいるようだ。)

(5-8) 父亲被爷爷晃醒，见河堤上一条弯曲的长龙，正飞也似的游动过来。
(見ると土手の上を一匹のくねくねした龍がちょうど飛ぶように近づいてくる。)

中根(2005)は上記の例が成立する理由について、副詞“在”の機能に起因すると主張している。すなわち、「副詞“在”は動作の限界性の有無とは無関係に用いられ、持続局面を有する動作であれば用いることができる」とし、VxY の〈過程性〉と意味上合致するため、上記の例が成立すると述べている。しかし一方、中根(2008)では、“？？正在跑进教室”という例を取り上げ、その不自然さを指摘したうえで、これもまた“在”の意味機能による制約であり、「“在”の時間軸上の一点を切り取る機能と(VxY)の過程性は矛盾する」からであると説明する。ここで疑問が生じる。中根(2005)は“在”は〈過程性〉のある動作と相性がいいと主張するが、中根(2008)

では“在”は〈過程性〉と相容れないと矛盾するような分析が見られるということである。そもそも、中根(2005, 2008)では“在”の意味機能云々と述べているが、実際取り扱っている用例は“正在”、“正”と共起するもののみであり、“在”と共起した用例はひとつも見当たらない。これは筆者による調査の結果と一致している。“正在”“正”“在”はいずれも動作の進行を表すといっても、三者の意味用法に差異がある以上、同一視することはできないと本論は考える。

5.4.2. 杉村(2011)の分析

杉村(2011)は、VxY が〈過程性〉を持たないと主張しているものの、自らこれと相容れない言語事実として、例(5-9)を取上げている。(日本語訳も杉村 2011 から引用)

(5-9) 在二根走出院子之后，他看见朝阳下的村子似乎还是昨天的样子。他还看见有几个像他一样的男人，也像他一样正在走出屋门或走出院落。门声此起彼伏。

(二根は敷地を出て行ったあと、朝日の中の村を眺めると、それは昨日と変わらぬ様子だった。彼はさらに何人かの自分に似た男を目にしたが、彼らもまた二根のように、家を出たり、庭を出たりしていた。戸の開け閉めの音がそこここで鳴っていた。)

当該の例について、杉村氏は次のような分析法を示唆している。すなわち、「動作主が単数ではなく複数(すなわち“几个像他一样的男人”筆者注)であることが分析のキーの一つになる可能性がある。」ということである。確かに、例(5-9)に限っていえば、動作主が複数である場合、VxY は〈限界性〉を持つとしても、複数の瞬間的な動作が行われると捉えれば、“正在”と共起しうるのである。しかし、上述の分析で説明できない例もある。次の例を見てみよう。

(5-10) 这时我听见了在石楠林中一阵簌簌的响声，我抬起头来看，看见希刺克厉夫正在走下山庄，快要走近我们了。(CCL・[英] 艾米莉・勃朗特著/杨苡译《呼啸山庄》)

(そのとき、カナメモチの林から葉の擦れ合う音が聞こえてきたので、頭を上げて見てみると、ヒースクリフがちょうど山荘から降りて、私達の方に向かってきているところだった。)

(5-11) 当落到地面之后，他看着破裂、流血的肌肤，不禁感到有些挫折。但是没时间去管这些了，他抬头看到史东正在滑下绳子，提卡的脸出现在楼上开口的地方。(CCL・[美]崔西・西克曼、玛格莉特・魏丝著/ 朱学恒译《龙枪编年史 1》)

(地面に降り立つと、彼は傷だらけで血まみれの肌を目にし、いささかの挫折を感じずにはいられなかった。しかし、それを気にしている時間などはなかった。顔を上げると、史東がロープを滑り降り、提卡の顔が階段の上に現れるのが見えた。)

(5-12) 比如说，我们在法兰西研究院的院子里看见的，就不是一个院士正在走出院子去叫出租马车，而是这个院士因怕摔交而小心翼翼、摇摇晃晃走路的样子。(CCL・[法]M.普鲁斯特著/李恒基、桂裕芳译《追忆似水年华》)

(たとえば、我々がフランス研究院のキャンパスで見かけたのは、一人の研究員がちょうどレンタルの馬車を呼ぶためにキャンパスを出ようとしたところではなく、その研究員が転ばないように、慎重にフラフラと歩いている様子だった。)

上記の例では、動作主(□で示されている)が単数であるにもかかわらず、VxY は“正在”と共起している。よって、VxY と“正在”との共起条件について、動作主の数という意味条件の他に、別の要因も考えなればならない。本論は、“正在 / 正”と“在”の意味機能の差異に注目し、その原因を探っていく。

5.4.3. 本論文の分析

杉村(2011)では、VxY が“正在”と共起する例を取り上げる際に、「目撃情報を実況報告する場合」であることも指摘している。しかし、それだけではない。上記の例では、“正在／VxY”は“看见，看到，感到”といった知覚動詞の目的語である

と同時に、いずれも複文における従属節に生起している。[27]なお、VxY は“正在/正”と共起するが、“在”とは共起しないという統語的特徴も観察される。この二つの現象の間に如何なる関連性があるのかという問題を解明するには、やはり“正”“在”“正在”の意味機能からアプローチしなければならない。

三者の意味機能について早くに言及しているのは吕叔湘(1980/1999)である。すなわち、「“正”“在”“正在”表示动作进行或状态持续的意思。其中“正”着重指时间，“正”后不能用动词的单纯形式；“在”着重指状态，可表示反复进行或长期持续；“正在”既指时间又指状态。(“正”“在”“正在”は動作の進行或いは持続を表す。その中、“正”は「時間」を指すことに重点があり、“正”の後に動詞の単純形式が後接することができない。[28]“在”は「状態」を指すことことに重点があり、「繰り返し行われる」或いは「長期的な持続」を表すことができる。“正在”は「時間」を指す同時に「状態」をも指す)」ということである。

吕叔湘(1999)がいう「時間」という概念が何を指すのか、定かではない。本論は、肖奚强(2002)、张亚军(2002)、陈前瑞(2003)を踏まえ、“正”は「参照時点」を提示する機能をもつ(以下「参照時点提示機能」と呼ぶ)と考える。[29]つまり、“正VP”が表す事態が発生している(或いは発生した)ときに、別の事態も発生しているあるいは発生したという意味である。“在”は主に動作行為の進行や持続の状態に焦点を当てており(以下「動作進行表示機能」と呼ぶ)、「参照時点提示機能」を

---

[27] 益岡(1997:1)は日本語を題材に、「複文」と「従属節」の概念については次のように規定する。すなわち、「複文とは述語を中心としたまとまりが 2 つ以上集まって構成された文のことである。複数のまとまりを「節」と呼ぶ。文として独立できる節を「主節」、他の節に依存することで一部を構成する節を「従属節」と呼ぶ。」ということである。本論は上述の概念を中国語に援用する。そして、例(5-7)のような、中心語を修飾する連体修飾節も従属節の一種とみなす。

[28] 吕叔湘(1980/1999)では、“正”の後に動詞の単純形式を後接することができない例として以下のようなものを挙げている。例えば、“我们正讨论”は成立せず、“着/呢”を付加することによって、はじめて成立する。例えば、“我们正讨论着呢(我々は正に議論しているところだよ)”などである。

[29] これらの研究では、“正”は動作行為の進行を表すとき、主に「同時性」を強調すると指摘されているが、“正”はなぜほとんど従属節に用いられるのかという問題を説明できない。本論は、“正”自身が「参照時点」を提示する機能をもつとすれば、この問題を解決することができると考える。この問題についてまた稿を改めて論じることにする。

持たない。そして、“正在”は中間的なものであり、両方の意味機能を併せ持つことになる。「参照時点提示機能」は事象の叙述に必要な前提的、予備的な時間情報、所謂事象成立基盤の背景知識を提示するため、“正 VP”の表す事象は背景的事象(background event)として捉えられやすく、統語上は自律性を欠く「従属節」に生起することが多い。[30]一方、“在”は「主語がその時ある動作の過程もしくは状態の中に在る」ことを話し手が判断する意味の副詞であり、且つ話し手は意図的に「動作主およびその動作・状態のタイプの存在の前景化」を表すため(讃井 1996、2000)、“在 VP”は前景的事象(foreground event)として捉えられ、複文の主節に現れやすい。それでは、“正在”の場合はどうであろう。前述のように、“正在 VP”は「参照時点提示機能」と「動作進行表示機能」と両方を持ち合わせる。そうすると、次のようなことが予想されるだろう。つまり、“正在 VP”は「参照時点提示機能」が顕著になる場合は、従属節に現れやすいが、「動作進行表示機能」が顕著になる場合は、主節に現れやすい。

この点については、通時的研究によっても裏付けることができる。张亚军(2002)、付义琴・赵家栋(2007)、王錦慧(2015)などの研究によれば、近代漢語(明清)における“正在”は通常従属文において生起しており、動補構造とも共起できる。

(5-13) 眾人正在聽得詫異，被襲人一說，想了一想，倒大家笑起來。(《紅樓夢》95回/张亚军(2002)から引用)
(みなは聞いてちょうど不思議に思っていたところだったが、襲人にひとこと言われ、しばらく考えると(思い至り)、いっせいに笑い出した。)

(5-14) 卻說安公子正在走過無數的號舍，隻見一所號舍門外山牆白石灰上大書“成字號”三箇大字。(『児女英雄伝』／同上)
(安公子はといえば、ちょうどおびただしい数の号舎の前を歩いていたが、ふとそのうちの一つの外壁の白石灰に「成字号」の三文字が大きく書かれているのが目に留まった。

(5-15) 寶玉正在聽見趙姨娘廝吵，心中自是不悅。(《紅樓夢》第60回/王錦慧(2015)

[30] 背景事象を構成する意味役割はとして、前景事象と密接にかかわり、その成立基盤となっている、空間的ドメインの構成要因である[場所]や[時間]などが挙げられる。(Langacker1991 を参照)。

から引用）

（宝玉はちょうど趙姨娘の騒ぎ声を聞いて、心中不快に思った。）

上記の例が示すように、明清白話における“正在”は様態補語、方向補語、結果補語を伴う動補構造と共起するといった現代中国語における“正在”と異なった統語的振る舞い方をする。この現象に関する研究は、张亚军(2002)、付义琴・赵家栋(2007)、王錦慧(2015)などがある。これらの研究によると、明清白話における“正在 VP”は“正在(这里/那里)VP”における場所指示詞“这里/那里”が脱落することによってできた構造であり、その意味機能は現代中国語における“正”と同じく「参照時点提示機能」である。ゆえに、この時期の“正在”は主として従属節に現れ、且つ限界的事象を表す動補構造と共起できるということである。ところが、現代中国語では、“正在”は基本的に動補構造とは共起できず、しかも、前景事象に生起するのが一般的である。これはおそらく“正在”の文法化が進行するに従って、意味重心が“在”に偏りつつあるところに起因していると思われる。

だが、“正在”の「参照時点提示機能」は弱まっているとはいえ、完全には消失していないと思われる。従属節という統語的環境が付与されれば、「参照時点提示機能」が(ある程度)顕在化するため、限界的事象を表す VxY と共起することが可能になる。

このように考えれば、中根(2008)で解決されていない問題――“？？正在跑进教室”という例はなぜ不自然なのか――という問題はうまく説明できる。つまり、この文は文脈から切り離して、単文として用いられた場合、一般的に前景的事象として認識される。前述のように、前景的事象に用いられる“正在”は“在”と同じように、「動作進行表示機能」が顕在化し、限界的事象を表す“跑进教室”とは意味的整合性が低いため、この文は成立し難いのである。逆にもしこの文を従属節という統語的環境に置けば、文の許容度が高くなる。

(5-16) 我路过他们班级的时候，看见小王正在跑进教室去跟同学借钱。

（私は彼らのクラスの前を通ったとき、王さんがちょうど教室に走って入り、クラスメートからお金を借りようとするところを見かけた。）

ところが、従属節において、VxY と“正在”は共起するものの、用例数はそれほど多くない。代わりに、“正”と共起する例が圧倒的に多い。これは恐らく現代中国語の“正在”はかなり“在”に近づき、〈動作進行表示機能〉がメイン機能となりつつあるからではないかと思われる。

(5-17) 有时候，从树林的间隙里，我们看见远处的青山，而一个暗褐色的动物正爬过山去。它跑得那样快，我们说不上它是什么动物。(CCL・《福尔摩斯探案集》)

(あるとき、林の木々の間から、遠くの青々たる山を眺めると、一匹の濃い茶色の動物が山を登って越えようとしているのが見えた。それは素早く走って行ったので、何という動物なのかははっきりと言うことができない)

(5-18) 哈利勉强地注意到他们正爬过肖像口进入到充满阳光的公共休息室，并且模糊地看到一小群七年级正聚集在那，直到赫敏叫道：“凯蒂！你回来了！你还好吗？”(CCL・[英]J・K・罗琳著/马爱农译《哈利・波特》)

(ハリーはかろうじて肖像の口を登り日差しの降り注ぐ公共休憩室へ入って行く連中に気づいた。そしてぼんやりと七年生の学生たちがそこに集まっているのを目にした。)

(5-19) 北京大学法学院的一位研究生当时正走下农园的楼梯，他听到一声巨响，然后发现很多人开始向外跑。(CCL・《中国新闻网》)

(北京大学法学院の院生はそのときちょうど農園の階段を下りて来たが、(突然)大きな音を耳にした。すると、多くの人が外へ逃げ始めた。)

(5-20) 一位高大、佝偻的英国人正走下跳板。汤姆斯・麦肯・布拉德，他那模仿英国伯爵的胡须使人一眼便能从人群中认出他。(CCL・[美]厄尔・德尔・比格斯著/孙小芬、刘宝芬、吕玉明译《没有钥匙的房间》)

(一人の背の高い、猫背のイギリス人が、まさに踏み板から降りてきたところだった。トムス・マイカン・ブラット、イギリス伯爵を真似して生やした髭のおかげで、人ごみの中でも一目で彼だとわかった。)

(5-21) 母亲似乎也很高兴，便对正走下床的孩子们说：“这样也好，外婆从此不养黑母鸡与花背心，帮你妈妈照管菱菱与元元了。”(CCL・苏青《归宿》)

(母もうれしそうに、ベッドからちょうど降りてきた子供たちに言った。「それでもいいわ。お婆ちゃんはこれから「黒母鶏」と「花背心」の飼育をやめて、お母さんを手伝って菱菱と元元のお世話をするわ」)

(5-22) 他俨然以上司的姿态,轻轻地把道袍一撩,迈开方步,走下三十二级的台阶,迎着小火车走来,向着正跳下车的那些匪装打扮的人,笑嘻嘻地扬手喊道:“胜利了!我忠实的勇士们。”(CCL・曲波《林海雪原》)

(彼はまるで地位の高い人のように、ひょいと僧衣をまくり、鷹揚に三十二段の階段を下りて、小さな汽車の方へ歩いてきた。車から降りてきた山賊の格好をした人たちに向かって、ニコニコしながら手を振って「我々の勝利だ!忠実な勇士たちよ!」と叫んだ。)

(5-23) 这时,我看见埃美特・卡伦、爱丽丝・卡伦和姓黑尔的那对双胞胎正钻进他们的车子,就是那辆亮闪闪的新沃尔沃。(CCL・[美]史蒂芬・梅尔著/覃学岚 、孙郁根、李寅译《暮光之城》)

(そのとき、エメット・カレン、アリス・カレンとヘイル双子兄弟がちょうど彼らの車に乗り込もうとしているのを見た。それはピカピカのボルボの新車だった。)

(5-24) 我忽然看到叔叔在我的前方行走,他似乎摔了一跤,裤子上沾满了泥巴,他的头发乱蓬蓬的,一副老迈不堪的模样。他正走进树林,朝那片坟地走去。(CCL・残雪《掩埋》)

(私はふと、前を叔父が歩いていることに気づいた。彼は転んだらしく、ズボンは泥で汚れており、髪の毛はぼさぼさで、急に年を取ってしまったかのようであった。彼は林に入ると、あの墓地の方へ歩いていった。)

以上の観察と分析を通じて、VxY と“正”“正在”“在”との共起関係は、“正”“正在”“在”の「参照時点提示機能」の顕著度と深く関わることがわかった。つまり、VxY は「参照時点提示機能」の顕著度が最も高い“正”とは共起しやすいが、「参照時点提示機能」の顕著度が最も低い“在”とは共起し難い。そして、その中間にある“正在”とは共起するものの、少数にとどまるのである。では、同じく限界的移動事象を表す“V 到 Y”はどうであろうか。

(5-25) a.林忠、鲁汉和队员们押着一批俘虏从院子里出来，走到街上，看到小坡从另一个院子里赶出一个军官。军官正跑到井边，把匣枪往地上一掷，一头插进井里了。(CCL・知侠《铁道游击队》)

(林忠、魯漢と隊員たちは捕虜たちを押さえつけながら、敷地から出てきた。通りに出ると、小坡が別の家から一人の士官を追い出しているのをみた。その士官は走って井戸のところまで来ると、モーゼル拳銃を地面に投げ捨て、ドボンと井戸に跳び込んだ。)

b.*林忠、鲁汉和队员们押着一批俘虏从院子里出来，走到街上，看到小坡从另一个院子里赶出一个军官。军官正在/在跑到井边，把匣枪往地上一掷，一头插进井里了。

(5-26) a.大妈生好了煤球炉子，仰头看着天色，小心翼翼地抱起桌上的大包袱来，往屋里收二春正走到房门口，顺手接进去。(CCL・老舍《龙须沟》)

(叔母は石炭ストーブに火をつけると、空を仰いで天気を気にしながら、テーブルの上の大きな風呂敷包みを慎重に抱えて、屋内に持って行った。二春がちょうど入り口まで来ており、無造作に風呂敷包みを受け取って中へ入っていった)

b.*大妈生好了煤球炉子,仰头看着天色,小心翼翼地抱起桌上的大包袱来,往屋里收。二春正在/在走到房门口，顺手接进去。

上記の例に示すように、“V 到 Y”は“正”と共起するが、“正在”“在”とは共起しない。この現象も“正”“正在”“在”の機能の相違と関係すると考えられる。

前述のように、“正”は主節の事象と従属節の事象を、同じ時点にしめ合わせながら、二つの事態の「同時性」を表す。言い換えれば、複文である“正 VP_1,VP_2”によって表される二つの事態を、ひとくくりにして同じ時点に属する一つの局面として話者が意図的に捉えるので、VP が限界的事象を表すか、非限界的事象を表すかは問題とされない。よって、〈限界性〉の程度がかなり高い“V 到 Y”とも、〈限界性〉がそれほど高くない VxY とも共起できる。

一方、“在”は話者が「主語がその時ある動作の過程もしくは状態の中に在る」ことを意図的に判断することを意味するため、限界的事象を表す“V 到 Y”と VxY とは共起しない。

要するに、“正”は〈限界性〉を容認するのに対して、“在”は〈限界性〉を排除するというようにまとめられる。

また、その中間にある“正在”は“正”と“在”二者の意味機能を持ち合わせているため、従属節に生起する場合、〈限界性〉を有する事態を容認するが、その〈限界性〉が曖昧であることを要求する。よって、“正在”は〈限界性〉が弱い VxY とは共起するが、〈限界性〉の程度が強い“V 到 Y”と共起しないことになる。

5.5. 第 5 章のまとめ

本章は中根(2005，2008)と杉村(2011)を踏まえたうえで、VxY 構造と“V 到 Y”構造について、〈過程性〉、〈限界性〉及び「“正”“正在”“在”との共起関係」という三つの問題について検討を加え、以下のような 3 点を主張した。

①中根(2005，2008)が指摘するように、VxY は〈過程性〉及び〈限界性〉を持つ事態を表す。しかしその〈過程性〉は V に内包されるアスペクト性質であると考えるべきである。そして、“V 到 Y”は VxY と同じように〈過程性〉を持つ。

②“V 到 Y”と VxY はともに〈限界性〉を持つが、“到”と「x」の意味上の制約により、二つの Y の役割が異なるため、V に対する限界化の仕方が異なる。具体的にいえば、前者の“到”は Y が移動動作の〈終点〉を表すことを要請するのに対し、方向補語 x は Y が移動動作の〈経路〉を表すことを要請する。〈終点〉と〈経路〉は最も大きな違いは、前者は移動動作が完成したあと、移動主体が到達しかつ滞在する地点のことを指すのに対して、後者は移動動作が完成した後、移動主体が到達し、なおかつそこで引き続き移動を継続する場所、すなわち〈経路〉のことを指すというところにある。〈限界性〉の程度からみれば、前者は後者より高い。

③「参照時点提示機能」を持つ“正”は二つの事態を、ひとくくりにして同じ時点に属する一つの局面として捉えるため、〈限界性〉を持つ VP を容認する。一方、“在”は「主語がその時ある動作の過程もしくは状態の中に在る」ことを強調するため、〈限界性〉を持つ VP を排除する。そして、“正”と“在”の意味機能を併せ持つ“正在”は限界的事象を表す VP と共起する場合、その〈限界性〉が曖昧であることを要求する。このような“正”“正在”“在”と VxY、“V 到 Y”との共起関係は次のようにまとめられる。

【表 9】

	“正”	“正在”	“在”
VxY	○	△	×
V 到 Y	○	×	×

※「○」は共起可能なことを、「×」は共起不可能を、「△」は条件付きの共起可能なことを表す。

前述のように、“到”は結果補語と方向補語の特徴を併せ持っており、中間的なものである。“到”は移動動詞 V と結合する場合、意味上「V＋方向動詞」と類似する部分があるが、両者は統語的特徴において相違が見受けられる。本章では、「移動動詞＋“到”＋場所目的語」構造と「移動動詞＋方向補語＋場所目的語」構造に焦点を絞り、両者の機能の相違について考察した結果、次の 2 点が明らかになった。

(ⅰ)“到”と方向補語の意味的相違によって、前項動詞に対する限界化の仕方が異なり、両構造が表す移動事象の〈限界性〉は程度の差がある。
(ⅱ)両構造が表す事象の〈限界性〉の程度の違いが“正”“正在”“在”との共起関係にも影響を及ぼすということである。

「移動動詞＋“到”＋場所目的語」構造は「移動動詞＋方向補語＋場所目的語」構造より〈限界性〉の程度が高い。この点において、結果補語構造(VR 構造)に近いといえる。方向補語と異なり、“到”が文法化を経て移動動詞以外の動詞とも結合できるようになり、“看到(見える)”, “买到(入手する)”, “做到(成し遂げる)などのような結果補語構造を形成することが可能になったのは、その〈限界性〉の程度が高かったということに起因しているではないかと思われる。この問題を今後の課題としたい。

第 6 章　本論文の結論と今後の課題

本論では、〈限界性〉の観点から、現代中国語における結果補語構造の下位カテゴリーについて考察し、様々な文法現象の解釈を試みた。以下に各章で述べたことを簡単にまとめておく。

第 1 章では、これまで先行研究において議論されてきた重要な研究課題と研究成果を紹介したうえで、VR 構造の下位カテゴリーに関する研究がまだ不十分であり、下位カテゴリー間の差異を解明する意義と必要性があることを述べた。そして、〈限界性〉の観点について従来の議論を紹介したうえで、本論文で用いる〈限界性〉という概念について「動作行為の時間軸上の内的展開における限界点の明確度のことを指す」と定義した。そして VR 構造の下位分類に関する先行研究を紹介したうえで、その問題点を指摘した。更に、本論文は結果補語(R)の限界化の仕方を基準に、VR 構造に対し下位分類を行った。具体的以下のような分類が得られた。[A 類]R が V の完成相を表すタイプ、[B 類]R が受動者の状態変化を表すタイプ、[C 類]R が動作主の状態変化を表すタイプ、[D 類]R が受動者・動作主以外の第三関与者の状態変化を表すタイプ、[E 類]R が V の表す動作行為の結果状態に対する話者の評価を表すタイプという 5 タイプである。ただし、この分類はあくまで語彙レベルにおける分類であり、具体的な統語的環境に生起する場合、他の文法成分との相互作用や語用論的な要因も絡むことを指摘した。

第 2 章では、VR 構造が従属節――連体修飾語“VR(了)的 N”構造――に生起する場合における“了”との共起関係について考察した。その結果、“了”との共起頻度、つまり連体修飾語“VR(了)的 N”構造における“了”の生起頻度には VR 構造が表す事象の限界性の程度が関与していることが分かった。具体的にいうと、限界性の程度が高いほど、“了”は生起し難く、限界性の程度が低いほど“了”は生起しやすいという逆比例の関係にあるということである。また、VR 構造の限界性の程度が、R の限界化の仕方の違いが関与することも明らかにした。具体的に言うと、R がそれぞれ、動作の完成、受動者の可視的な状態変化、動作主の非可視的な状態変化、話者の心理的な落差を示すことによって、V に対して限界化を行うがゆえに、VR 構造が表す事象の限界性の程度に差が生じるということである。

第 3 章では、VR 構造が主節のうちの動詞コピー構文に生起する条件について

考察した。具体的には、動詞コピー構文に関する先行研究における問題点を指摘したうえ、動詞コピー構文の類型を整理した。当該構文がそのプロトタイプである「動作行為それ自体或いは動作行為に関する事物の〈多量性〉を表す」非使役義動詞コピー構文と、「動作行為者にとって非制御的であり、なおかつなんらかの〈多量性〉を備えた動作行為によってある結果状態がもたらされるという因果関係を表す」使役義動詞コピー構文という二種類の構文から構成されると主張した。また、両者はいずれも動作行為〈多量性〉を表すという共通性が見出されることを踏まえ、後者は動詞コピー構文のプロトタイプである前者から、動作行為の〈多量性〉を表すという意味的共通性を基盤として、構文的意味の拡張により生成されたものであると主張した。さらに、VR 構造が動詞コピー構文に生起する状況を考察し、その生起条件に動作行為者による〈制御性〉の程度が関与していることを明らかにした。つまり、〈制御性〉が高いほど、VR 構造は動詞コピー構文に生起し難く、〈制御性〉が低いほど、VR 構造は動詞コピー構文に生起しやすいという結論を得た。

上記の 2 つの事例の考察を通じて、VR 構造における R が限界化の仕方においてさまざまなのバリエーションを持っており、VR 構造の統語機能に関与することを確認した。

続いて、第 4 章では、ミクロな視点から VR 構造の下位カテゴリーの一つである A 類の〈完成相〉を表す VR 構造に着目し、その下位カテゴリーの“V 完”、“V 过 $_1$”、“V 好”を個別例として取り上げ、それぞれの生起条件の違いについて、次のように主張した。すなわち、“V 完”と“V 过 $_1$”は〈完成義〉以外の意味特徴を持たないという点において共通するが、それぞれの〈完成義〉の実現の条件が異なる。第 4 章で述べたように、“V 完”は「一つの動作行為の内的展開に焦点が当てられており、当該の動作行為が終結する局面」を表すという意味機能を持つ。つまり、前項動詞 V が〈持続性〉を持ち、かつその内的展開が終結する局面を強調する場合、“完”が生起し、限界化が実現されうる。一方、“V 过 $_1$”は「発話のコンテクストにおいて規定される上位イベントを構成する下位イベントのひとつが実現する局面」を表す。語用論レベルにおいて、二重イベント構造が成立する場合に限り、“V 过 $_1$”の限界化が実現される。さらに、“V 好”における結果補語“好”は形容詞としての意味特徴(〈評価義〉)が色濃く残っているため、〈完成義〉の実現

条件はより限定されている。すなわち、「V が〈価値のある事物や状態の出現が予想される〉という意味特徴をもつ達成動詞句であり、なおかつ“V 好”が述語成分を担う文全体の表す事象が限界的で、更にその〈限界性〉を示す成分が明示されている」場合のみ、“V 好”の限界化が実現される。

上記の“V 完”、“V 过 $_1$”、“V 好”はいずれも典型的な VR 構造である。認知言語学の観点からみれば、VR 構造には典型的な VR 構造があれば、非典型的な VR 構造もある。本論文の最後の第 5 章では、非典型的な VR 構造とされる“V 到”構造を取り上げ、同じく限界的移動事象を表す場合における方向補語構造との相違について考察した。具体的には〈過程性〉、〈限界性〉、「“正”、“正在”、“在”との共起関係」という三つの問題に絞って検討した結果、“V 到”の“到”の前項動詞 V に対する限界化の仕方が方向補語と異なるため、“V 到”が表す移動事象の限界性の程度は方向補語構造より高いこと、そして、従属節に生起する場合、この限界性の程度の差が両者のアスペクト副詞“正”“正在”“在”との共起関係にも影響を及ぼすということがわかった。

本論文は 2 つの事例(第 2 章と第 5 章)研究によって、これまで先行研究において論じられなかった VR 構造が持つ〈限界性〉という意味特徴に程度の違いを認めることが、文法研究において有意義であることを論じた。興味深いことに、VR 構造の限界性の相対性が観察されたのはいずれも従属節においてのことである。そこで、次の 2 つの問題の解明が必要になってくる。一つは、〈限界性〉の程度の差異を顕在化させる統語的環境は従属節に限定されるか否かという問題である。もう一つは、もし従属節に限定されるのであれば、なぜそうなるかという問題である。現段階では従属節においては動詞のアスペクト対立の中和が起こりやすいという要因の関与が考えられるが、緻密な観察と分析は、今後の課題としたい。

また、本論文は〈完成相〉を表す VR 構造(第 4 章)に関して、下位カテゴリーの代表例として“V 完”、“V 过 $_1$”、“V 好”を取上げたが、〈完成相〉を表す VR 構造の全体像を把握するには、それだけでは不十分である。今後は考察の範囲を広げて、“V 掉”、“V 住”の限界化の実現条件について検討していきたい。

更に、VR 構造の下位カテゴリーは歴史的形成過程においてどのような差異があるのか、VR 構造の文法機能が R の意味の漂白化とどのような関係があるのかなどの問題については、通時的な調査が不十分なため、詳細に論じることができ

なかった。これも今後の課題としておきたい。

参考文献一覧

〈日本語〉

秋山淳(2010)動詞＋結果補語の使役義獲得について,『九州中国学会報』第 48 巻：pp. 122-135

秋山淳(1998)語彙概念構造と動補複合動詞,『中国語学』第 245 号：pp.32-41

荒川清秀(1982)中国語の語彙,『講座日本語学 12:外国語との対照Ⅲ』:pp.63-84, 明治書院

荒川清秀(2003)『一歩すすんだ中国語文法』, 大修館書店

今井敬子(1985)「結果を表す動補構造」の統辞法,『中国語学』第 232 号：pp.23-32

岩崎皇(1990)「動補」文における比較の二類型――過分義現象をめぐって,『中国語学』第 237 号：pp.71-81

岩崎皇(1992)形容詞補語文における指示と意味関係――過分義現象再考,『人文学報』第 234 号：pp.107-117

石村広(2000)“V 在 L”形式と結果表現,『人文学報』第 311 号：pp.93-108

石村広(2000)中国語結果構文の意味構造とヴォイス,『中国語学』第 247 号：pp.142-157

石村広(2011)『中国語結果構文の研究――動詞連続構造の観点から』, 白帝社

王占華・Bansei Newcomb(2008)連体修飾語における“了”の性格について――語義・語用論的アプローチの試み,『現代中国語研究』第 10 期：pp.69-80

大内田三郎(1966)補語構造を示す“个”について,『中国語学』第 166 号：pp.1-15

大河内康憲(1969)重畳形式と比況性連合構造,『大阪外国語大学学報』第 21 号：pp.41-58

木村英樹(1982)テンス・アスペクト――中国語,『講座日本語学 11:外国語との対照Ⅱ』：pp.19-39, 明治書院

木村英樹(1997)動詞接尾辞“了”の意味と表現機能, 大河内康憲教授退官記念論文集刊行会(編)『中国語学論文集:大河内康憲教授退官記念』, 東方書店

木村英樹(2000)中国語ヴォイスの構造化とカテゴリー化,『中国語学』第 247 号：pp.19-39

金水敏(2006)『日本語存在表現の歴史』, ひつじ書房

黒田亘(1975)『経験と言語』, 東京大学出版会

黒田亘(1992)『行為と規範』, 勁草書房
玄幸子(2001)補語(その 1),『中国語』第 4 期：pp.56-58
河上誓作(編著)(1996)『認知言語学の基礎』, 研究社出版
黄春玉(2000)中国語における形容詞結果補語の意味及び構文的特徴――日本語との関連で,『ことばの科学』第 13 号：pp.87-95, 名古屋大学言語文化部言語文化研究会
讃井唯允(1996)結果補語・方向補語とアクチオンスアルト(1),『中国語』第 7 期：pp.28-31, 内山書店
讃井唯允(1996)語気助詞“呢”・時間副詞“在”およびアスペクト助詞“着”,『中国語』第 6 期：pp.28-31, 内山書店
讃井唯允(2000)“在等”“等着”“在等着”――“在”と“着”の文法的意味と語用論,『人文学報』第 311 号：pp.53-73
申亜敏(2005)中国語の事態と結果表現類型――日本語・英語との対照から, 影山太郎(編)『レキシコンフォーラム』第 1 巻：pp.231-266
申亜敏・望月圭子(2006)中国語の結果複合動詞の語形成,『言語情報学研究報告』第 12 号：pp.15-35
杉村博文(1992)補語を導く“V 得”の文法機能,『中国語』第 12 期：pp.34-37
杉村博文(2000)“走进来”について,『荒屋勤教授古希記念:中国語論集』: pp.151-164, 白帝社
杉村博文(2011)対立空間転位の諸相――「方向補語」再考,『現代中国語研究』第 11 期：pp.15-30
杉村博文(2012)中国語における姿勢形成と空間移動――終端プロファイリングによる系列動作統合の視点より, 影山太郎・沈力(編)『日中理論言語学の新展望 2:意味と構文』: pp.125-143
鈴木重幸(1965)現代日本語の動詞のテンス――言いきりの述語に使われたばあい,『ことばの研究』第 2 集　秀英出版
柴谷方良・影山太郎・田守育啓(1982)『言語の構造(意味・統語篇)――理論と分析』, くろしお出版
朱継征(1993)中国語動詞の「動相」と「静相」について,『教学』第 15 号:pp.25-38, 日中学院出版局

朱継征(1999)中国語の完了相について――“～完”と“～过 1”の文法的使い分けと意味的分析を中心に,『中国語学』第 246 号：pp.117-124
申亜敏(2007)中国語の結果補語動詞の項構造と語彙概念構造，影山太郎(編)『レキシコンフォーラム』第 3 巻：pp.195-229，ひつじ書房
谷口一美(2005)『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』，ひつじ書房
高橋清子(2010)タイ語における他動性と使役性，西光義弘・プラシャント・パルデシ(編)『自動詞・他動詞の対照(シリーズ言語対照第 4 巻)』:pp.91-142，くろしお出版
張岩紅(2006)結果補語“～完”と“～过 1”とについて――“吃完吃过”、“看完看过”を例として，日中対照言語学会(編)『中国語の補語』:pp.123-143，白帝社
陳順益(2000)結果補語性語尾“掉”について,『中国語学』第 247 号:pp.158-171
中根綾子(2005)動趨式が表す本質的な意味――動結式との対照から,『中国語学』第 252 号:pp.229-246
中根綾子(2008)移動事態を表す Vx 句と V 到句の意味と形式,『中国語学』第 255 号:pp.157-176
西尾寅弥(1972)『形容詞の意味･用法の記述的研究』国立国語研究所報告 44，秀英出版
中川裕三(1992a)使役義を表す動補動詞について――意味構造を中心に,『人文学報』第 234 号：pp.119-137，東京都立大学
中川裕三(1992b)CR 他動詞文について――認知言語学的観点から,『中国語学』第 239 号：pp.76-85
中右実・西村義樹(1998)『構文と事象構造』，研究社
パルデシ プラシャント(2007)「他動性」の解剖――「意図性」と「受影性」を超えて，角田三枝他(編)『他動性の通言語的研究』pp.179-190，くろしお出版
藤田糸恵(1993)「完成」を表す“V 好”と“V 上”について,『お茶の水女子大学中国文学会報』第 13 号:pp.45-63
朴鐘漢(1997/2000)認知文法による現代中国語多義語の研究(遠藤雅裕訳),『中央大学論集』第 21 号:pp.21-41
益岡隆志(1997)表現の主観性，田窪行則(編)『視点と言語行動』:pp.14-25，くろしお出版

三宅登之(1989)“V 的”と“了”――“的”構造における“了”の生起に関して,『中国語学』第 236 期:pp.53-60
三宅登之(1991)動補構造と“了”の省略,『中国語学』第 238 号:pp.97-105
丸尾誠(2005)『現代中国語の空間移動表現に関する研究』, 白帝社。
宮島達夫(1994)『語彙論研究』, むぎ書房。
望月圭子(1990)日・中両語の結果を表す複合動詞,『東京外国語大学論集』第 40 号：pp.13-27
望月圭子(1990)動補動詞の形成,『中国語学』第 237 号:pp.128-137
山口直人(1991)動補動詞の類型と形成について,『中国語学』第 238 号:pp.115-124
ヤーホントフ(1958/1987)『中国語動詞の研究』(橋本萬太郎訳), 白帝社
安本真弓(2009)『現代中国語における可能表現の意味分析――可能補語を中心に』, 白帝社
楊安娜(2011)現代普通話の結果補語“好”の意味機能について,『饕餮』第 19 号:7-23
楊安娜(2012)動補構造“V 过 1”の意味機能に関する一考察――“V 完”との対照を通じて,『北海道大学大学院文学研究科研究論集』第 12 号: pp.309-322
ラマール(2008)中国語の位置変化文とヴォイス, 生越直樹他(編)『ヴォイスの対照研究――東アジア諸語からの視点』: pp.109-142, くろしお出版
劉綺紋(2006)『中国語のアスペクトとモダリティ』, 大阪大学出版会
劉月華等(1991)『現代中国語文法総覧』(相原茂監訳, 片山博美・守屋宏則・平井和之共訳), くろしお出版
廬濤(2000)『中国語における「空間動詞」の文法化研究』, 白帝社

〈中国語〉

常玲玲(2007)结果补语对德语结果句式和汉语动补结果句式的影响,《语言研究》第 27 卷第 2 期:pp.65-73
陈平(1988)论现代汉语时间系统的三元结构,《中国语文》第 6 期:pp.401-419
陈前瑞(2003)汉语内部视点体的聚焦度与主观性,《世界汉语教学》第 4 期:pp.22-31
戴耀晶(1998)试说汉语重动句的语法价值,《汉语学习》第 2 期:pp.1-4
丁声树等(1963)《现代汉语语法讲话》, 商务印书馆

范晓(1985)略论 V-R,《语法研究和探索》第 3 期，北京大学出版社

范晓(1993)复动“V 得”句,《语言教学与研究》第 4 期:pp.57-74

冯胜利(2000)《汉语韵律句法学》，上海教育出版社

付义琴·赵家栋(2007)从明代小说中的“正”、“在”看时间副词“正在”的来源,《中国语文》第 3 期:pp.237-244

高更生·王红旗(1996)《汉语教学语法研究》，语文出版社

郭锐(1993)汉语动词的过程结构,《中国语文》第 6 期:pp.410-422

郭锐(1995)述结式的配价结构和成分的整合，沈阳·郑定欧主编《现代汉语配价语法研究》:pp.168-191，北京大学出版社

郭春贵(1988)试论动态助词“过$_1$”与“了$_1$”,『中国语学』第 235 期:pp.86-92

龚千炎(1991)《谈现代汉语的时制表示和时态表达系统》,《中国语文》第 4 期:pp.251-261

黄春玉(2009)汉语结果补语句与日语的对应性研究——从他动性的角度,《外语教学与研究》第 48 期:pp.136-137

黄月圆(1996)把/被结构与动词重复结构的互补分布现象,《中国语文》第 2 期:pp.92-99

孔令达(1986)关于动态助词“过$_1$”和“过$_2$”,《中国语文》第 4 期:pp.272-276

孔令达(1995)从语言单位的同一性看汉语助词“过”的分合,《安徽师范大学学报》(人文社科版)第 3 期:pp.338-345

孔令达(2005)“VP＋过”的功能,《安徽师范大学学报》(人文社会科学版)第 33 卷第 6 期:pp.718-722

柯里思[Lamarre] (2003)汉语空间位移事件的语言表达——兼论述趋式的几个问题,『現代中国語研究』第 5 期:pp.1-18

柯里思[Lamarre] (2007)从趋向范畴的方言表述看“书面汉语中的不同层次”的判定,『中国語学』第 254 号:pp.51-73

雷冬平·胡丽珍(2010)時間副词“正在”的形成再探,《中国语文》第 1 期:pp.67-73

李临定(1980)动补格句式,《中国语文》第 2 期:pp.93-103

李临定(1984)究竟哪个“补”哪个？——“动补”格关系再议,《汉语学习》第 2 期:pp.1-10

李讷·石毓智(1997)汉语动词拷贝结构的演化过程,《国外语言学》第 3 期:pp.32-38

黎锦熙(1924/1954)《新著国语文法》，商务印书馆

梁银峰(2001)先秦汉语的新兼语式——兼论结果补语的起源，《中国语文》第 4 期:pp.354-363

铃木裕文(2004)日语“V 出す”和汉语“V 出”的差异，《日语学习与研究》第 3 期:pp.44-47

刘培玉(2012)动结式重动句构造的制约机制及相关问题，《汉语学报》第 1 期:pp.56-64

刘坚等(1992)《近代汉语虚词研究》，语文出版社

刘珣等(1986)《实用汉语课本》，商务印书馆

刘焱(2007)“V 掉”的语义类型与“掉”的虚化，《中国语文》第 2 期:pp.133-143

刘月华等(1983/2001)《实用现代汉语语法》(增订本)，商务印书馆

刘子瑜(2004)汉语动结式述补结构的历史发展,《语言学论丛》第 30 辑:pp.188-264，北京大学汉语语言学中心

陆丙甫(2003)“的”的基本功能和派生功能——从描写性到区别性再到指称性，《世界汉语教学》第 1 期:pp.14-29

陆俭明(1989)说度量形容词，《语言教学与研究》第 3 期:pp. 46-59

陆俭明(1990)“VA 了”述补结构语义分析，《汉语学习》第 1 期:pp.1-6

陆俭明(2001)“了”述补结构语义分析补议，《汉语学习》第 6 期:pp.78-80

鲁晓琨(1995)“V 完”和“V 好”,『中国語学』第 243 号:pp.49-55

吕叔湘(1942/1982)《中国文法要略》(修订本)，商务印书馆

吕叔湘(1980/1999)《现代汉语八百词》(增订本)，商务印书馆

马庆株(1985)《汉语动词和动词性结构》，北京大学出版社

马希文(1987)与动结式动词有关的某些句式，《中国语文》第 6 期:pp.424-441

马真(1981)《简明实用汉语语法》，北京大学出版社

潘允中(1982)《汉语语法史概要》，中州书画社

彭国真(2007)英汉结果补语结构中补语形容词的差异，《语言教学与研究》第 3 期:pp.48-55.

屈承熹著，紀宗仁協著(1999)《漢語認知功能語法》，文鶴出版

邵敬敏(1982)《基础短语分析法》《杭州大学学报增刊》

沈家煊(1995)“有界”与“无界”,《中国语文》第 5 期:pp.367-380

沈家煊(1997)形容词句法功能的标记模式,《中国语文》第 4 期:pp.242-250
沈家煊(1999)“在”字句和“给字句”,《中国语文》第 2 期:pp.94-102
沈家煊·王冬梅(2000)“N 的 V”和“参照体-目标”构式,《世界汉语教学》第 4 期:pp.25-32
沈家煊(2004)再谈“有界”与“无界”,《语言学论丛》第 30 辑:pp.40-54
沈家煊·完权(2009)也谈“之字结构”和“之”字功能,《语言研究》第 29 卷第 2 期:pp.1-12
沈力(1993)关于汉语结果复合动词中参项结构的问题,《语文研究》第 3 期:pp.12-21
沈阳(1997)名词短语的多重移位形式及把字句的构造过程与语义解释,《中国语文》第 6 期:pp.402-414
施春宏(2006)动结式的配价层级及其歧价现象,《语言教学与研究》第 4 期:pp.45-57
施春宏(2008)《汉语动结式的句法语义研究》,北京语言大学出版社
施春宏(2010)动词拷贝句句式构造和句式意义的互动关系,《中国语文》第 2 期:pp.99-113
石毓智·李讷(2001)《汉语语法化的历程》,北京大学出版社
石毓智(2001)《肯定和否定的对称与不对称》,北京语言文化大学出版社
石毓智(2002)《现代汉语语法系统的建立:动补结构的产生及其影响》,北京语言大学出版社
唐翠菊(2001)现代汉语重动句的分类,《世界汉语教学》第 1 期:pp.80-86
湯廷池(1992)《漢語詞法句法三集》,台湾学生書局。
王灿龙(1999)重动句补议,《中国语文》第 2 期:pp.122-125
王红旗(1995)动结式述补结构配价研究,载沈阳·郑定欧主编《现代汉语配价语法研究》,北京大学出版社
王红旗(1996)动结式述补结构的语义是什么,《汉语学习》第 1 期:pp.24-27
王还主编(1995)《对外汉语教学语法大纲》,北京语言学院出版社
王錦慧(2015)時間副詞「在」與「正在」的形成探究,Language and Linguistics16(2):pp.187-212
王力(1943/1979)《中国现代语法》(上·下),商务印书馆,香港:中华书局
王力(1944)《中国语法理论》,中华书局 1954 年版
王力(1958/1980)《汉语史稿》(中册),中华书局

王松茂(1981)汉语时体范畴论,《齐齐哈尔师范学院报》第 3 期:pp.65-76
肖奚强(2002)“正(在)”、“在”与“着”功能比较研究,《语言研究》第 4 期:pp.27-37
项开喜(1997)汉语重动句式功能研究,《中国语文》第 4 期:pp.260-267
徐通锵(1998)《语言论——语义型语言的结构原理和研究方法》,东北师范大学出版社
杨安娜(2006)“VR(了)的 N”结构中“了”的隐现问题,『中国語文法研究』通巻第 5 期:180-192。
杨玉玲(1999)重动句和“把”字句使用考察,《世界汉语教学》第 2 期:pp.71-75
袁毓林(2000)述结式的结构和意义的不平衡性——从表达功能和历史来源的角度看,《现代中国与研究》第 1 期:pp.49-61
曾传禄(2007)重动句宾语的指称性质,《洛阳师范学院学报》第 4 期:pp.140-143
赵元任(1979/2002)《汉语口语语法》,商务出版社
赵新(2001)重动句的结构和语义分析,《华侨大学学报》(人文社科版)第 1 期:pp.117-121
张伯江(1998)《论汉语“把”字句的句法隐喻》,首届汉语语言国际学术讨论会提交论文
张国宪(2000)现代汉语形容词的典型特征,《中国语文》第 5 期:pp.447-458
张黎(2006)汉语的动相——从补语问题谈起,『中国語の補語』:pp.180-192,白帝社
张黎(2012)《汉语意合语法研究——基于认知类型和语言逻辑的建构》,白帝社
张亚军(2002)时间副词“正”、“正在”、“在”及其虚化过程考察,《上海师范大学学报》第 1 期:pp.46-55
张志公(1953)《汉语语法常识》,中国青年出版社
钟小勇(2010)重动句宾语话语指称性分析,《世界汉语教学》第 2 期:pp.199-211
朱德熙(1982)《语法讲义》,商务印书馆
朱德熙(1986)《语法答问》,商务印书馆
朱德熙(2003)《语法讲义》,商务印书馆。

〈英語〉

Comrie, Bernard. (1976) *Aspect.* Cambridge University Press.

Comrie, Bernard. (1989) *Language Universals and Linguisitc Typology (2nded).,* Chicago.

Chao,Yuen Ren (1968) *A Grammar of Spoken Chinese*（*中国话的文法*）, California: University of California Press.

Depraetere, Ilse. (1995) On the necessity of distinguishing between (un) boundedness and (a)telicity, *Linguistics and Philosophy(18),* pp.1-19.

Dowty, David. (1979) *Word Meaning and Montague Grammar*. Reidel.

Hopper, P. & Thompson, S. (1980) Transitivity in grammar and discourse, *Language* (*Vol 56(2)),* pp. 251-299.

Lakoff, G. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things：What Categories Reveal about the Mind [M]*. The University of Chicago Press.

Langacker, Ronald W. (1990) Settings, Participants, and Grammatical Relations. *Meanings and Prototypes: Studies in Linguistic*.Categorization, ed. by Savas L. Tsohatzidis, pp.213-238. London: Routledge.

Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Covnitive Grammar*. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. (1993) Reference-point Constructions. *Cognitive Linguistics (4.1),* pp. 1-38.

Li, Charles N.& Sandra A. Thompson (1981) *Mandarin Chinese: A functional Referece Grammar*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

Pusrejovsky, James. (1995) *the Generative Lexicon.* MIT Press.

Tai, James H-Y. (1984) Verbs and Time in Chinese: Vendler's Four Categories. *Papers from theParasession on Lexical Semantic*s, pp.289-296, Chicago Linguistic Society.

Tai, James H-Y. (1985) Temporal Sequence and Chinese Word order. *Typological Studies in Language* (6), pp.49-72.

Talmy, Leonard (1985) LexicalizationPatterns: Semantic Structure in Lexical Forms. *Language Typology and Syntactic Description (Vol. 3),* pp.57-149, Timothy Shopen (ed.) Cambridge: Cambridge University Press.

Talmy, Leonard (1996) The Windowing of Attention in Language. *Grammatical*

Constructions, pp.235-287, Masayoshi Shibatani and Sandra A. Thompson (eds.) Oxford: Oxford University Press.

Talmy, Leonard (2000) *Toward a Cognitive Semantics Vol. Ⅱ: Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, MA: MIT Press.

Vendler, Zeno. (1967) *Linguistics in Philosophy.* Cornell University Press.

Xu Dan (2006/2008) *Typological Change in Chinese Syntax*.Oxford University Press.